レディＴ～ある女医とナースの副業～

京野美波

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
レディＴ～ある女医とナースの副業～

【Ｎコード】
Ｎ９９４９ＨＪ

【作者名】
京野美波

【あらすじ】
高級住宅街に開業する若い女医とナース。本業は美容整形クリニックだが夕方から特殊な顧客だけを特別に診察する。彼女の裏の副業は拷問師。医療のテクニックで自白から人体改造迄、顧客の要望に対処する。彼女が誰なのか？女？男？年齢は？今宵も新たなお客様がヒトガタを持って来院する。

拷問師

序章

「コレで良い？」

「歯は強化シリコン。ペニスを噛み切る事は無理にしているわ。胸はDカップをギリギリまで豊胸してFカップ。顔は全てを改造。人気女優をベースに人気アイドルのカワイイ目鼻を入れてどちらかと言えばロリよりに…。膣内には人工カズノコ壁にしてザラザラが興奮状態で浮き出る仕様。愛液は粘着性が増すように特殊なホルモン注射で半永久…後は…両手、両脚は脱着式。基本、足だけを小さく改造して歩くだけにも出来ますが…脱走癖が有るとの事で杖が無いと歩けない仕様に…胸の豊胸はこれ以上は無理です。性器はまだ改良の余地あり。」

「男はどうした？」

「男はペニス、睾丸を取り、人工膣、可動式肛門、豊胸と女性ホルモン注射で女に変えました。客もとれますよ。」

「オーケー、ミス、エフ！相変わらず仕事が素晴らしい。」

「お客様に満足して頂いたら光栄です。」

「おい！連れて行け！」

診察室から真っ白な包帯に巻かれた女性が二人、車椅子に乗せられ黒服の男に車椅子を押され出て行く。

「ところで…ミス・エフは専門は拷問師だと聞いたが？」

「ミスター！よく調べましたね。某国の情報部にいました。ですので、壊すのも治すのも改良も得意ですわ。」

「その拷問師の腕で情報を吐かせて欲しい女がいるのだが？」

「ミスター…情報を聞くまで、何処まで？」
「何処とは？」
「リミット無しなら死ぬまで拷問します。女で組織で働かすなら精神まで壊して性器と胸は無事にしますが？」
「そうだな…情報を吐かせて性器と胸は無事に…後は顔の改造を…」
「分かりました…ミスター！明日、お連れ下さい」
白髪に隻眼の老紳士は杖を突きながら出て行った。
真っ黒な長いストレートの黒髪。長いまつ毛に一重の切れ長な目。
唇は薄く純日本美人の凛とした顔立ち。
身長は１７０程あり、無駄な脂肪は付いていない。
胸も巨乳ではなく、貧乳でも無い。
余りにモデル体型過ぎて整形を疑うような容姿と顔をしている。
柊美容整形クリニック。
コンクリート打ちっぱなしの外観のクリニックの入口には看板が掛り、普通の美容クリニックに見える。
周囲は高級住宅街。
クリニックがある場所にしては場違い感があるが、顧客にはセレブと呼ばれる女性達が多く住宅街にクリニックを開業するメリットは大きい。
「ヘイ！マオに電話！」
「ピピ…」
電子音が鳴り、呼び出し音がなる。
「な～に？先生！」
「もう、お昼よ。明日、夜に本業が有るから準備をしてて！貴女の好きな若い女性よ！」
「え！先生、壊す方？自白迄？」
マオの声が弾む。
「ミスターからの依頼だから自白させて、終わりかな？凄く若いから処女膜再生術位は有るかも…」
「何だ！壊したら駄目なんだ…」

マオの落胆が電話からでもわかる。
「あ！来週は性器改造が有るわよ。ミミズ千匹仕様にするわよ！」
「本当！先生！分かった！明日、夜迄に準備しておく」
「頼むわね。マオ！」
「プッツン…ッー」
電話が切れた。
マオはクリニックでただ一人のナースであり、女に対してザドっ気が強い。
元々は真面目なナースだったが、ホストに騙され反社会的勢力が経営する、ＳＭクラブの奴隷をしていた。
客に性器を壊され、人身売買でオークションに出されていた時にナースの資格有りで購入し、性器も治療した。
マゾだとずっと思っていたが、酷い仕打ちをされ続け、自分でもしたくなったと聞いた。
特に同性に対する拷問はストップをかけないと人体が壊れる迄、辞めない。
不思議な事に女性を拷問するのは好きだが男には気乗りしていない。
本人は自分のされた激痛快楽を同性に共感して欲しい。
男性にはクリトリスをペンチで潰される激痛は分からない。乳房に縦に針を刺される痛さも分からない、とのことらしい。
サドとマゾは紙一重とは聞いた事があるが、余りにもの拷問で感情が壊れている。
まぁ、そこが気に入り買い取った所もあるが、本人は海外闇流出のＳＭモノに出演しても構わなかったらしい。
闇流出モノの最後は生きたまま、バラバラにされるか、ピラニア、ライオンに喰われてエンディングが定番である。
仕事柄、少しネジが飛んだナースでないと助手は出来ない。
翌日、夕刻にミスターと呼ばれる白髪の紳士がクリニックを訪れた。
後ろからサングラスをかけ、銀色の髪の若い男が車椅子を押して女医の診療室に入ってきた。

目鼻立ちの整った二十歳前後の若い女性。
眠っている顔も美麗である。
「あ！この子ガールズグループ◆◆◆のナオだわ！」
短い髪をオレンジ色に染めたナースのマオが声を弾ませた。
「アナタ、知っているの？」
「え～先生、知らないんですか？今、若者の間で有名なアイドルグループのセンターの子ですよ！」
マオは得意げに話す。
確かに黒髪の清楚な感じに整った目鼻立ち、出る所は出過ぎず、目立ち過ぎす。童貞受けする顔立ち、体型である。
「ミスターの系列に芸能事務所があるわよね？そのタレント？」
「そうだ…うちで一番、稼いでるタレントの一人だ！」
「その子を自白、改造を希望するのですか？」
「ドクターも知っての通り、私は裏では密輸組織も取り仕切っている。この、ナオは事務所に履歴を自分から送り面接を受けに来た。ナオを事務所に入れてから密輸の取り引き場所に敵対勢力や警察のガサ入れが入るようになった。私は裏の組織の人間や外部の裏の調査会社に依頼してすべての部下、タレントを調べさせ、このナオが怪しいと突き止めた。」
「証拠って？」
「このナオは時々、漫画が好きでネットカフェに行くんだが漫画も借りずに個室に閉じこってパソコンを弄っていた。それだけなら別に怪しくないがフリーメールを使い海外にメールを送っていた。これが内容だ！」
若い部下からタブレット端末を渡された。
端末には有る独裁国家の文字でミスターの組織の密輸情報が書かれている。
「なるほどね。あの国はドラッグも自国で製造している。でも、ミスターが扱う商品よりも品質が劣るから誰も買わないけどミスターの扱う商品が市場に出回らないと代用品で買う中毒者はいるわね。」

「ソレをこの子が…？」
ジッと顔を見て、銀色の定規で目の位置、鼻の位置、高さ、唇と顎までの数値を測り紙に書き込んで行く。
「ねぇ、ミスター…この子の顔ってイジった？」
「いや！儂の主義でタレントの顔は弄らん」
「ミスター、この子の両親の写真は有る？」
「おい！」
敵対勢力が多いミスターの組織ではタレント、関係者すべての情報を把握している。
「マオ！アタシのタブレット、持ってきて！」
「カシャ、カシャ」
ナオの両親の顔を取り込み、タブレットを操作した。
数秒後に一人の合成写真が浮き出る。
「ミスター！この子が本当に両親から生まれたらこの顔になるの…多少の誤差はあるけど、ここまでの整い過ぎた顔にはならないわ。それに顔のパーツの位置が完璧すぎるの。人間の顔は左右対称に見えてどんな美人も少しのズレが有るのよ。ソレがこの子には無いわ。この子、K国のエージェントね。どうします？エージェントなら訓練を受けているから自白剤を使っても拷問をしても言わないわ。脳に直接、聴くしかないけど…します？」
「その場合は？」
「良くて廃人、最悪死亡に成ります。」
「構わん！タレント業の稼ぎより裏の密輸業の方が稼ぎが良いわい…やってくれ」
マオ、開頭手術の準備をして、後…アソコに指をいれないでね…無くなるわよ…
そう言い残し部屋を出て行った。
「ミ…ミスター…手術は御覧になりますか？」
「ああ…久しぶりに若い女がバラバラになるのを見たい。」
「では廊下を出て右に行きますと閲覧室と書いた部屋が有ります。

そちらでお待ちください。
「うむ…いくぞ…」
白髪の紳士は部下を連れて診察室を出て行った。
「ナオ！ナオの裸！ナオのノウミソ！」
銀色の可動式手術台にナオを乗せてナオのブラウスのボタンを外した。
ブラウスを広げると白い肌にピンクのリボンが、胸の谷間、左右のブラをつなげる所に付いている。
背中側に手を伸ばし、ブラのホックを外す。フルン！と白い乳房にピンクの小さな乳首が薄い乳輪の中に小さく有る。
「ゴクッ！」
マオが唾を飲み込んだ。
スーッと自分の肉厚な唇を乳首に近づける。
「バシュン！」
「グフッ！シャーボトボトボトボトボト…」
「イッター」
「こら！マオ！その子がエージェントなら乳首を舐めた途端に死ぬよ！アンタの身体はアタシの持ち物だからね！勝手な事は辞めてね！」
「ドクター…見ていたんですか…先に言って下さいよ！」
「アンタは口で言っても聞かないでしょ？余りクリトリスに電流を流し過ぎたら取れるわよ！」
マオにとってはクリトリスが取れるで愛液が溢れ出す。
「パンツ、濡らしてるんでしょ！アナタ、見られるの好きだから裸で来なさい。早くして！お客様を待たせたら駄目よ！」
マオは手術着を脱ぎ、ビショビショになったパンティを脱ぎ捨てて銀の可動式手術台を押して診察室から扉を通り、コンクリート打ちっぱなしの廊下に出て手術室に向かう。
外から中を覗きながら髪を手で直す若い女がいる。
高級住宅街に住んでいる女性だろう。廊下の壁はミラーガラスにな

っており、外は鏡になっている。
自分が見られているような気持ちになり
マオの股間からはトロトロと透明な液が太腿を伝い床に垂れた。

人造アイドル　ナオ

「ブィーン…」
手術室の自動ドアが空き、ニタニタと笑いながらマオが可動式手術台を押して入ってくる。
レディTが手術姿で入って来る。
「マオ！そこに四つん這い！」
マオが嬉しそうに手術姿の隅の側溝の側に有る排水用のステンレス製の蓋の上に四つん這いになる。
「オマエ！毎回、愛液は垂らすし漏らすし…次は穴を埋めるぞ！」
先程、診察室で喋る口調と違い、図太い男の声で有る。
だが姿は胸も尻も出て腰つきは滑らかで若い女性の身体付きが手術着からもわかる。
これがレディTが女性なのか男性なのか分からない由縁で有る。
床の血糊等を洗い流す専用のホースでマオの身体を洗う。
「ビシャー！ズバババ！」
強力な水圧で水が当たった場所がヘコむ。
「ほら、頭！」
「バシュー！」
マオの黒縁メガネが吹き飛ばされる。
目が垂れて、バラエティにも時々、出ているふっくらグラドルに似た顔が水に濡れ妙に色っぽい。
「尻！」
「ビジュー！」
尻の肉が水圧に押されへこむ。
「股を拡げろ！」
のそのそと脚を左右に広げる。
「バシュン！ババババ…」

「アン！」
水圧で肛門の下に付いている肉のヒダがブルルッと揺れる。
「声を出したら、そのビラビラも切り落とすからな！」
」
…キリオトス…
マオが切り落とされる事を妄想しニャっと笑う。
「ほら！お客様をお待ちしているんだ。早くエプロンだけして助手をしろ！」
手術室の上部はガラス張りになり、手術室が見える。
「これから、年齢、性別不詳、ナオ仮名の自白術を始める。」
「ピンセット！」
「？ピンセット？」
マオはＤｒ．レディＴに銀のピンセットを渡す。
右手にピンセットを持ち左手でナオの乳房を押さえると小さなピンセットの先で乳首を摘み指先に力を入れると緑色の液体が乳首から滲み出る。
「マオ！その乳首から滲み出た液体を分析機にかけて！」
シリンダーの先で乳首から出た液体を掬い、マオは分析機にスポイトで緑色の液体を吸い込み、機械の窪みに入れて蓋をした。
Ｄｒ．Ｔはナオの股間を開き、産毛のような陰毛、ピンクに光る、割れ目を開いて膣の中をペンライトで照らしながら脚の鼠径部を押さえたりしている。
「センセイ…分析結果です。…」
成分表には、トリカブト、ウミヘビの毒等の今の医学では血清が作れない毒を混ぜたものが成分表に現れる。
一舐めすれば助からない猛毒。
コレだけの毒なら乳首の皮膚にもダメージが出るはずだが、乳首も乳房、乳輪、ダメージは皮膚に見られない。
「マオ！ステンレスの棒！」
細長いスリコギ状の棒に等間隔でリングが付いているムクのステン

レス棒をナオのピンク色に輝く小さな肉のヒダを左右に開きゆっくりと入れた。
「あ！」
白髪の紳士の横に居た部下が声を上げた。
ナオが処女なら政財界に枕営業をさせれると思い声を上げたのだろう。
ゆっくり半分位、ステンレスの棒を入れた所でＤｒ．Ｔの白い指が鼠径部のへこみを押した。
「ガシュン！」
ステンレスの棒をゆっくりと膣から抜くとムク素材のステンレスが切断されていた。
「ガチャ！」
「ミスター！この子、改造を受けた暗殺兼用のスパイよ！拷問では自白は無理ね。
自白剤も耐性があるわ。どうします？情報を抜くなら脳から直接、抜くしかないわ。膣内の改修工事と胸の改修工事をすれば生きた性人形にはなるけど…どうします？」
「ミスＴ、黒幕が分からなければ対処出来ない！構わない、脳から情報を抜いてくれ。」
「ミスＴ、よく分かったな？」
「ミスター、この子の顔、スタイルが完璧過ぎるのよ。黄金比率にピッタリの子等、自然界では存在しないわ。ミスターのタレントには整形はミスターが禁じているから彼女は何処かで整形、それも精巧に出来る機関が整形しているのよ。」
「マオ！アンタ、乳首を舐めていたら死んでいたわよ。」
「アソコに指を入れてもコレ…」
女医は切断されたステンレス製の棒の断面を見せた。
「開頭手術に切り替えるわよ」
手袋をはめた指が手術台横のボタンを押すと上半身は起き上がり膝から下は折れ曲がり椅子の形に変形した。

「ミスター！ジャマーかけるからスマホ、タブレット、パソコン類は電源を切って下さいよ。」
「オイ！電源を切らないとスマホが爆発するぞ…」
「いいですか？」
手術台横にある装置を動かした。
「キュイン！」
「う！」
鼓膜が押され、潜水時に耳抜きをするような状態になる。
ミスター、Ｄｒ．Ｔ
、マオはインカムを付ける。
少女の長い黒髪をハサミでザクザクときり短髪になるとバリカンで全ての頭髪を刈り上げた。
更にカミソリで頭髪は全て剃りあげ、無くした。
少女の頭に銀色のメスが横に走る。
赤い線から、血が滲む。
「マオ！」
マオが頭の皮を鉗子で摘みデロンと剥いた。
白い頭蓋骨が見える。
白い頭蓋骨の下に端正な顔立ちの美少女。
「マオ、特殊ＣＴ。」
美少女の頭上に天使の輪のような白く光るリング状の機械が置かれ、
マオが機械のスイッチを入れた。
女医が機械のモニターを凝視する。
ナオの脳内に小さなマイクロチップが埋め込まれている。
「マオ、耐爆容器を持って来て！」
全裸にエプロンの豊満なナース。
頭蓋骨を見せた全裸の美少女。
仕切る黒い手術服の女医。
高級スーツに身をまとた老紳士。
隣に立つ高身長の黒服にサングラスの男。

手術室自体が異様な空間になっている。
「マオ、頭蓋カッター。」
マオが尖端が高速回転するペンのような器具を女医に渡す。
「ウィーン…」
頭蓋骨をなぞると尖端が骨を削り頭蓋骨を切って行く。
「イーン…」
機械が止まった。
無言でマオに機械を渡す。
そしてユックリとナオの白い頭蓋骨を上に上げる。
青白い脳が姿を表した。
卵の薄皮のような膜が脳を覆う。
メスで切れ込みを入れ剥がす。
白子に似た脳が姿を表す。
「マオ、脳専用ピンセット！」
マオが細長いピンセットを女医に渡す。
モニターを見て位置を確認すると銀色のピンセットをズブリとナオの脳に付き入れた。
マオは女医の足元に蓋を開けた耐爆容器を置きしゃがんで蓋をする姿勢でいる。
しゃがむとエプロンの隙間から尻とモッコリした股間が見える。
想像しながら助手をしているのだろう、股間からは糸を引いた愛液が床に垂れている。
女医がモニターを見ながらマイクロチップをピンセットではさみ、スグに抜いた。
抜いてスグに足元に有る耐爆容器に入れた。
真っ白な冷気がモクモクと立ち込める。
「マオ！」
マオが蓋をした。
「なんだった？」
白髪の紳士が女医に尋ねる。

「ミスター、形状的にＧＰＳと自決用の小型爆弾ね。某国のスパイがよく頭に入れられているわ。十中八九、あの独裁国家だわ。」
長い針に電線が付いた物を二本、ナオの脳に刺していく。
脳の真ん中、記憶を司る部分で止めて、電線の先の機械に繋がったパソコンを打ち込む。
「ぐわ！」
ナオの両眼が開き、某国の言葉を喋り出す。
「…じ…じ…」
パソコンの翻訳機能から日本語に略された言葉が出てくる。
「我が偉大な指導部にこの身を捧げた事を誇りに思います！」
「にに任務、内容は日本の薬の大半を牛耳るミスター●●の密売ルートの殲滅とミスター及び関係者の暗殺。」
「き、キキキ協力者は…ミスターの秘書、トモエ！」
「おい…トモエの身柄を拘束しろ！」
「そして、連れて来い！」
「ミスター！何処まで聞きます？」
「ジュ…ジュン…、マヤ…まや…」
「ミスター、この名前に見覚えは？」
「その名前はナオが所属するグループのメンバーの名前だ！」
「ミスター、今からトモエの所属する部署の女性とナオが所属するグループのメンバーをクリニックに呼んで貰えます？」
「今からか？」
「はい。複数人、協力者がいる感じです。クリニックの裏口に特殊ＣＴを埋め込んでいる玄関が有りますから金のドアからクリニックに入るようにミスターの一番信頼する部下に伝えて下さい。」
「ソイツもスパイなら？」
「その時はアタシもミスターも運が無いと諦めましょう。」
ミスターは手術室の２階に設けられた観覧室の隅に設けられた対外光回線電話で片腕の桐生に女達を連れて来るように命令した。
「ミスター、ナオなんだけど…どうします？あ、歌やダンスはこの

子、無理です。ダッチアイドルとして裏社会で稼がせます?それでしたら毒の乳房の除去と膣の暗殺機械を外して豊胸と人工性器に変えますが?どうします?」

「売出しに金をかけたからな…稼げるようにしてくれ。」

「分かりました。」

「マオ!メス!」

メスを受け取り、こんもりした膨らみの乳房の下乳房、乳房とアバラの境目にスッとメスを刺し横に右から左にメスを走らせた。真っ赤な肉に刺しのように毒の乳腺が走り皮膚の下に白い脂肪が膨らみを形成している。

乳房の皮膚の下、スグにある脂肪にメスを走らせ乳房の中身を毒の乳腺ごとメスを走らせて取り除く方法を女医は取ることにした。

「ベチャ!」

銀のトレーの中に真っ赤な肉に白い脂肪が付いた肉の塊が2つ無造作に置かれた。

「マオ!後は乳房の豊胸はアナタでもできるでしょ。アタシはオマ●コの中のギロチンを取る手術をするわ。」

「ハイ!」

マオはウキウキと空になっているナオの乳房内に特殊な風船を収めて廻りにクリーム状の特殊シリコンをケーキ作りのようにクリームを入れヘラで乳房の中、隅々に入れて行く。

女医は人工的に作られたであろう少女の性器に注射針を刺し、液剤を流し込んだ。

数分後、閉じていた肉のビラが開き、肛門も半分開き液をながしている。

手早くガーゼで拭き取り、特殊CTでギロチンがどのように入っているかをモニターで探っていた。

…骨盤に埋め込まれている…切断機械は膣全体に筒状に入っているわ…骨盤側から切開して、子宮は機械本体だから、全て取り除き人工性器に置き換えて…後は人工性器に太腿の肉で膣入口と肉ビラを

整形すれば客は取れるわね。
「キリキリ…キリキリ…」
手術台の脚を固定している台が左右に分かれ女医が股の間に身体を置き手術が出来るようにした。
下腹部、恥骨の右からメスを少女の肌にスッと滑らせた。
白い肌に赤い線がスッと走った。

神経抜き

「ガタン！ガチャン！」
小型のワゴン車が2台、高級住宅街に有るクリニックの門を抜けて敷地に入る。
駐車場は高級住宅街の中にあっても優にマイクロバスなら2台は置ける広さが有る。
「おい！コッチだぞ。スマホは電源はきれよ。病院だからな。」
●●美容整形クリニックと裏口にも看板が有る。
「なに～美容整形？整形でもするの？」
ワイワイガヤガヤ…と少女達は騒がしいが一人、浮かない顔をしている女がいる。
アイドルグループメンバーでは無く、名前が出た秘書のトモエでも無い。
アイドルグループを統括させている元アイドルのレイカで有る。
「先生！この子達、全員がオマ●に暗殺ギロチンと頭にチップが入れられているわ。
後、このレイカって子にはマイクロチップだけ。
」
「ミスター、この子達。海外に行った？」
「●●国の芸能界がアイドルグループの育成に優れているという事でレイカに言われ二月、言っていたが…その時か？」
「このレイカが主犯ね。工作員はナオ。他のメンバーは分からない内に改造されているわ。」
「ミスター、グループの子達はどうする？頭のチップを抜いて性器に組み込まれた機械は起爆装置を破壊して膣を狭窄さてセックス出来ないようにして芸能人でうるか、機械を外して裏社会のセックスドールとするか？」

「う〜ん…まだ、アイドルグループで稼げるからな…ドクター、芸能界でまだ売るよ。セックス出来ないようにしてくれ。」
「レイカは？壊して逆スパイにする？ナオの機械を埋め込み、相手を殺す方法もあるし、爆破させることもできるわ。」
「レイカの仲間がまだ内の組織内にいるのかと黒幕の特定をしてくれ…」
「分かったわ。じゃあ、ガスを出すから」
「無色無臭の催眠ガスが流れ、女達は全て玄関で倒れ眠りに入った。」
「おい！女達は別室に運べ。レイカは拷問室に連れて行け！」
クリニックの駐車場には車が数台増えている。
中から黒服にサングラスの男達がクリニックの金の玄関から入りグループの少女達と秘書を別室に運び、レイカは特別処置室に運ばれた。
「う…うぅん…」
「おはよう、レイカさん。」
白衣に黒い革製のマスクを被った人がレイカの前に立っている。
レイカは全裸にされ両手はバンザイの形に固定され、両脚はM字に開いたまま、台に固定されている。
「レイカが本名なの？」
白衣の胸の膨らみ、声から女性とは分かる。
…ミスターお抱えの拷問師なら自白される…自爆するしか…
「カチッ」
「？」
「やっぱり自爆をえらんだか…スパイの鏡ね。安心？しなさい、貴女はここでは殺さないわ。」
「さあ…全て喋ってもらおうかしら…」
「マオ！」
マオが細長い針を女医に渡した。
マオと呼ばれたナースは小柄で胸だけは異様な感じにデカイ。

「アナタ、何処かの工作員かしら…一般人では無いわよね…工作員なら耐性も付いているわよね…我慢してね…」
ユックリと腰を下ろすと椅子に座り、固定されたレイカの台の高さを調整する。
「ウィーン…」
丁度、性器が女医の顔の前に来る高さに調整された。
「マオ！ギャグかまして…」
端正な顔にツンと尖った鼻のレイカの鼻がマオに摘まれる。
「ブハァ…」
「アガ！」
口が開いた瞬間にギャグボールをレイカは噛まされた。
「コレ…知ってる？普通の針ではないの。ヘアーニードルって言って髪の毛よりも細いの…でね…」
女医は皮を被ったクリトリスを剥き、クリトリスに針先をユックリと刺すとスルスルと押し込んだ。
髪の毛より小さい極細の金属は血も出さずにレイカのクリトリスの中に消えた。
５０センチは有る針がクリトリスに全て入り込んだ。
「コレだけなら拷問にはならないわね。普通の苦痛なら普通の針を刺したほうが痛いのよね。でもね…」
女医が針先の手元に有る持ち手に有るボタンを押した。
「グガ！ガー！」
レイカの全身を激痛が走る。
ヘアーニードルが特性品で温度を少し上げるとヤスリの様なウロコが浮き出る仕様になっている。
繊細な神経が集まるクリトリスの神経の束に極小の針が入り込んだまま、神経の中で金属のウロコを出す。
「カチ！」
「フーフーフー！」
「どう？アタシの針は？コレからどうすると思う？」

キッと睨んだまま、何も答えようとしない…
「そうよね…答えられてもね…」
「カチ！」
「アガ！」
「ズ…ズズッ…」
「ガハッ！がガガガ…アガ！」
クリトリスに有る針を少しずつ引く。
「ギ…ギギギギギギギ…」
「パキン！」
「アハ、ボールを噛み潰した」
「アガー！ジャメデ！」
「アンマー！◆◆◆◆◀☆」
「日本語話しなさい！わかんないわよ！」
「やべでぐだ…ざい…」
「全て喋るなら辞めるわ！」
「し…喋ったら…爆発する…」
「頭のマイクロチップは取ったわ。全部、喋りなさい。嫌ならクリトリスに有る全ての神経を抜くから…アナタに騙されたボスの命令はクリトリス、肛門、尿道の全神経と乳房の神経と乳腺を麻酔せずに抜くことなんだけど…」
レイカは本名、国籍、日本での協力者を全て喋った。
少し敏感な場所の神経を抜かれる恐怖でレイカは鳥肌が立って収まらない。
「ミスター、グループのマネージャーのサナ?彼女、お金でスパイにっているわ。はい…全ての神経を抜いて相手の…領事館に捨てる…はい…分かりました」
レイカには注射が打たれた。
スグにレイカは眠りについた。
ショートボブに外国で流行りの化粧、金色に染めたマネージャーのサナが黒服、二人に抱き抱えられ特別診療室に連れて来られた。

「裸に剝いて台に固定して！」
黒服に裸にされ股を開いた形でサナは固定された。
「な！なによ！」
「アナタ、ミスター裏切ったでしょ。ミスターから依頼が有ったの…アナタを壊せ…と…」
「先ずは、ココの神経を抜いてあげるわ…」
サナの股間は奇麗に剃られ、肉厚の大陰唇、皮から飛び出たクリトリス、肉厚の褐色の肉のビラビラ。
股間に肉の貝の身が着いているような感じに見える。
ピンと尖ったクリトリスの先に特殊なヘアーニードルを刺して行く。
刺されても痛みも痒みも無い。
クリトリスにヘアーニードル全てがおさまった。
「カチ！」
「アギャ！」
神経内でニードルからウロコを出した激痛がサナを襲う。
「ズ…ズズズズズズ…」
「アガーギャ！ギャー！」
一度、挽いただけでサナは失神した。
「大体は一回で失神するのよね…」
失神したサナに構わずニードルを抜き差しする。
「アギャアギャ～！」
サナは失神しては激痛で起き、また失神を繰り返した。
「マオ、特殊シリコン」
マオが白い薬剤が入った注射器を女医に渡す。
ニードルを抜いた穴からは少量の血が流れる。
穴に注射針を差し込み中の白い薬剤をクリトリスに流し込んだ。４、５回流すと穴に細い糸を刺し込みクリトリスの作業は終わった。
「マオ、乳房の神経と乳腺を抜くからヘアーニードルの乳房用を…」
「はい、先生。」
マオから渡されたニードルは髪の毛よりも少しふとく普通の針を長

くした形状である。
長さは３０センチ程、針の尖端を乳首の先の窪みから刺し込んだ。
「あぎゃ！イダイ！」
サナは目を見開き自分の乳首に刺さる針を見た。
少し褐色のあるピンクの乳首の先に銀色に光る金属が刺さりグリグリと乳房に入って行く。
乳首に火を当てられ炙られているような激痛が乳首から乳房に広がる。
「カチッ」
「ハガ！アガアガアガアガ…」
乳房に収まった金属から小さな金属のウロコが浮き出る。
「ズリ…ズリ…」
「アギャー。ガガガ！」
「マオ！口にガーゼでも詰めて…舌でも噛んで死なれたら面倒だから」
端正な顔は泣き崩れ、口からはヨダレを垂らして半開きになった口にガーゼを押し込む。
「フビ…フグ…フヒ…」
鼻で息をしながら激痛に耐える。
途中、何度も気絶しては激痛で覚醒を繰り返し、女医はクリトリスにしたように白い液体入りの注射を乳首に刺し白い液体を乳房に流し込んだ。
「マオ、下は出来ているわ。巻き取り機械を持って来て。」
マオが電動リール式の機械を持って来て固定台の股間部分に有る取り付け金具にリールを固定して、クリトリスに有る糸をリールの穴に刺し込んだ。
リールは糸を自動的に固定してユックリと自動的に廻りはじめた。
「ブィーン」
ユックリと下に垂れていた糸がリールとクリトリスをピンと張った。
「ブチ…ブチブチブチブチ…」

「フーフーフーフー」
鼻で息をしてクリトリスから出て行くピンクと白、黄色が混ざった肉の紐状のモノを大きな眼を見開き見ている。
眼球に有る毛細血管が切れ血のような涙を出して自分のクリトリスから出て行く神経繊維を見ている。
時間にして5分程で神経は全て抜き取らた。
「チロ…チロチロチロチロ…」
尿道の神経も無い状態なので尿道口を締める力も入らない。
「ブリ…ブリ」
「臭い～マオ！尻と尿道に栓をして。」
尿道には小さなコケシ状の栓、肛門には円錐の栓が詰められた。
マオが陰毛を抜いても気づかない。
股間が全く感触が無くなっている。
「次は乳房かな？痛さはクリトリスより痛いのよね。」
黒いマスクから覗く目が笑っている。
「マオ！肩を押さえていてね」
乳首に有る糸をTの字型の器具に取り付け、女医が力任せに引っ張る。
「ブフーブフーグッグー！」
乳房が女医に引っ張られ真横に伸びる。
伸びた先に女医がいてT字状の取っ手を両腕で握り引っ張る。
「ズル…ズルズルズルズルズル」
神経繊維の束に黄色い乳腺細胞が付いた物がズルズルと乳房から出てくる。
F近く有ったサナの乳房は少し萎んでいる。
左右の乳房から神経と乳腺を抜き取られたサナは涙が枯れ、流した涙の跡が赤く跡になっている。
「終わったわ、ミスター。お土産も持たせたし領事館に放り込んだら？」
翌朝、某独裁国家の領事館にサナを裸の状態でミスターの部下が運

び込む。
領事館を警備する者にはミスターの配下もいる。
領事館の玄関にサナを置いた。
翌朝、領事館の職員がサナを見つけて領事館に入れる。
「何が、有った?同士よ?」
職員が訪ねてもサナは手を振りよるなとジェスチャーをする…
声帯は潰しているので声は出ない。
領事館職員がサナに近づき毛布をかけた途端にサナの尻の栓は爆発し、領事館の玄関と職員数人が消し飛んだ。

アキの受難とブラックサンタ

「ターン」
「パカン！」
「☆☆☆☆…何だ！何が起こった！」
某独裁国家の首領が演説中にナンバー2の男が狙撃され民衆の前で頭を破裂させ絶命した。
声明にはナンバー2が外国勢力と結託し反乱を計画していた罪で粛清したとの事だが実際はミスターのスパイが某国の軍隊の中にも一定数、潜り込んでいる。
ミスターの怒りは凄まじく、某国のスパイは全て国内から消された。
其の翌日、某国首領に後継している大国からホットラインで連絡が入る。
「…あの国のアノ男には関係するな。アノ国の本当の首領はアノ男だ。
次は君の国の首都で核が爆発する。」
「核？アノ国は非核では？」
「君もめでたいな？君の国で打ち上げているのは衛星だよな？核は関係無いよな？それと一緒だよ。アノ国の無音に近い潜水艦に潜水艦発射型の核搭載の潜水艦が我が国と君の国の近海に何艘も潜っている。我が国が離れ小島にしか挑発、出来ないのはそう言う事だよ。」
「わ…分かりました。アノ男には手は出しません…」
「ガチャ！」
電話を切り真っ赤な顔で小肥りの男は側近に伝えた。
「アノ男には手を出すな！しかし、同士を殺した者は粛清しろ！」
ふくれっ面で国民の前から踵を返し宮殿に入って行った。
…東京某所…

「ジリリリ…ジリリリ…」
「う〜ん…もう朝なの…」
「マオ、仕事なの？」
甘ったるい猫なで声でマオの大きな乳房を揉みながら股間にも手を廻そうとした女の手をマオは掴み
「コラ！仕事、遅れたら怖い女にお仕置きされるのよ！」
笑いながら手を振り払いムックリと起き上がった。
「あ！」
激しい行為で脚に力が入りにくい。
ベッドの上には６０センチは有る巨大な双頭バイブがゴロンと転がっている。
「アキ！貴女も夕方からの出勤でしょ？シャワーを浴びて昼飯を取ったら？
アタシは先生から用事を頼まれているから先にでるわ。」
豊満な乳房をゆったり目のシャツを頭から被り、その上に革のジャンパー。
下は下着を履かずに革のパンツを直に履き、部屋から出た。
レズの出会い系クラブでアキとは昨夜、知り合い、その儘、二人で数軒クラブをハシゴをして深夜にマオのマンションに入っている。
マオは派手目な格好と髪の毛の色からナースには見えない。
アキは外資系企業の契約社員で黒髪、銀縁メガネに灰色の落ち着いたスーツでアキの方が硬い看護師に見える。
某国諜報員にもそう見えたのだろう。
アキが身支度をしてマオの部屋から出た。
マオの部屋はオートロックでアキは鍵を持たずにマオの部屋から出た。
「ガチャリ！」
アキの背中で部屋のロックがかかる。
エレベーターに乗り高級ホテルのようなマンションロビーを抜けて玄関から外に出る。

…マオ、看護師って言っていたけど…看護師って儲かるのかな?賃貸でも凄い家賃だよ…
昼前なので子供は少なく、所々にベビーカーを押している若い母親が見られる。
「え?なんで?ベビーカーの車輪が動かない!」
アキの目の先に若い母親がしゃがんでベビーカーの車輪を覗き込んでいる。
ベビーカーには乳児が乗っているのでベビーカーを持ち上げては見れず途方に暮れている。
「どうされました?」
「すみません。ベビーカーの車輪にロックが掛かったみたいで…申し訳無いですがこの子を少し抱いて頂けないですか?」
若い母親はベビーカーから乳児を持ち上げるとアキに渡した。
後ろから若いベビーカーを押す母親がアキに近付いていた。
母親はバッグから注射器を取り出しアキの首に当てた。
「プシュン」
極小の針を首に刺され麻酔が効き倒れるまで数秒。
道路には救急車がとまっている。
「ガラガラ…」
ワゴンの扉が開き、中から白衣の救急隊員の姿の男達が降りてアキを救急車に乗せて連れ去った。
注射を打った若い母親もベビーカーが故障した母親もいつの間にかいなくなっていた…。
…アキのヤツ、連絡をくれないな。仕事が忙しいのかな?…
「ビービービー」
「マオ!出て!」
「はい?〇〇宅配便です。」
「玄関に置いておいて。」
「冷凍便で結構、重量が有りますよ?」
「じゃあ、玄関迄、持って来て。」

インターホン横の玄関シャッターのリモコンを押すとシャッターが上がり、青い制服を着た宅配便社員が小型冷凍庫は有る箱を台車に乗せて押して来た。
「版はここで…ありがとうございます」
「マオ?誰からなの?」
「宛名は書いていないです。」
「マオ、ハンドスキャナーを持って来て」
女医がスキャナーを当てモニターで中身を確認した。
「爆発物は無いわ。肉の塊が何個かとソーセージが入っている。それとディスク。」
「マオ、ディスクが見れるレコーダーかパソコン!」
「ベリベリ…ベリベリ」
ダンボールの封を開けると発泡スチロールの箱が有り箱の上にディスクが一枚、乗っていた。
「マオ、再生して。
」
ノートパソコンにディスクを差し込み、ディスクを再生させた。
「イタイ!染みる!染みる!」
若い女の声で嘆願している。
「オマエ、ジョイノジョシュダロ!イバショオシエロ!」
「知らない…アタシはタダの事務員…」
「ジムインガアンナマンションスメナイ!ウソツクナ!」
「あ!アキだ…」
「え?マオの知り合い?」
「知り合い…と言うか…ワンナイトの相手…」
「ガラガラ…ガラガラ…ジャラジャラ…」
壺に漬けられたアキが壺から出される。
乳房には乳首が無い、。
「ホントウノコトイエ!」
「本当にマオとは出会いパブで意気投合して泊まっただけだから…

許して…」
「ウソツキオンナメ」
男は顔全体を黒いマスクで覆っている。
手には肉切りハサミを持っている。
「ああ…いや…やめてください…本当にしらないんです…」
涙声で弱々しくアキは言っても男の手は止まらない。
「アグっイタイ！」
アキの股間、陰毛に隠れた小さな突起を見つけて引っ張る。
無意識にアキの股間が前に出る。
ピンクの引っ張られた突起に肉切りハサミの銀に光る刃先が徐々に
男がハサミを握るのと同時に縮まり交差する…
「ジョ…」
「アグアー！グックッ…ククク…アガッアーアアア…！」
血を流す突起の跡を気にせずに左右に伸びる肉のビラビラをハサミ
で器用に切って行く。
「漬けろ！」
「いひーひー！染みる！いや！出してー！」
「アンタ、股間、濡らしているんじゃ無いわよね？まあ、いいわ、
そのディスク、複製していてミスターに見せるから。」
「それと其のお肉、処分しておきなさい。貴女が肌を合わせたオン
ナでしょ？」
「先生…ロジャーの餌に…」
「バカ！辛い物を食べさせたらお腹壊すでしょ！池のピラニアにも
駄目よ！燃えるゴミの日に出しなさい。」
「はーい。」
女医もマオも他人が生きようが殺されようが関心は無い。両人とも、
死が身近に有る環境で過ごし麻痺をしている。
「はい！分かりました。梱包の手伝いですね。場所は？ミスターの
芸能事務所？分かりました。」
「マオ、出かけるわ。昼からは松田さまがヒアルロン酸注射だけだ

から貴女にたのむわ。」
「先生は?」
「ミスターからの依頼。あの…ナオだっけ?あの娘を領事館に送り返すの。お土産を付けてね。」
黒いジュラルミンケースを持ち、女医は駐車場に置いてある大型バイクの荷台にジュラルミンケースを固定して病院の敷地から爆音を上げながら出て行った。
ミスターの芸能事務所は都心から少し離れた住宅街に有った。
防音工事と対爆、防弾工事が施された重厚感ある造りになっている。
「女医の★★です。ミスターに言われて伺いました。」
「ガコン!」
重厚感ある玄関ドアが開き中からサングラスの男が出て来る。
「で処置するナオ?だっけ?どちらに?」
「コチラです。」
女医は男の後ろを付いて行った。
至る所に有る監視カメラ。
曲がりくねった廊下。
元暴力組織の建物だけ有って敵の襲撃ように造られている。
「ココです。」
「クソ!クソ!」
若い女がピンヒールでナオの乳房を踏み付けていた。
「おい!もう辞めろ!また、違うオモチャをあてがうから!」
「どうすんの?」
「コレから先生にお土産を付けて貰って返却だよ。」
ナオは組織の買春組織に流さず、自分が騙して国外に連れて行き性器に改造された元のメンバーの鬱憤ばらしで事務所に飼われていた。
元メンバーはセックスできずに溜まった鬱憤をナオにぶつけていた。
事務所幹部から性器に付いたギロチンを無理に取り外すと下半身が動かないと言われてメンバーの性器は狭く女医にされていた。
いずれ海外の名医に外して貰う約束で芸能活動を続けている。

「返却なら今日でこの世から消えるのね！清々するわ。」
そう言うと部屋から出て行った。
「さあ、お願いします。」
円錐の針形を男から出された。
「先生、扱いは慎重に…この建物の内部は丸焦げになる破壊力はありますから…」
肛門の横に筋弛緩剤を注射して肛門に数カ所、切れ込みをいれ円錐形の爆弾を尻の穴に埋め込み切れ込みを縫った。
「出来たわよ」
「それよりも早く終わらせてくれない？遊びもできないわ。」
「わかりました。今日で終わりますから…明日のニュースを御覧ください…」
重厚感有る廊下を歩き玄関を出てバイクに跨るとバイクを発車させた。
案の定、後ろから黒塗りのワゴン車が付いて来る。
バイクは路地裏を通り、商店街の中を抜けてワゴンを撒いた。
その夜、某独裁国家の領事館の修理途中の玄関にナオが裸で置かれている。
夜間に見廻りをしていた某独裁国家の人間が見つけ、ナオをライトで照らしながら様子を伺っている。
「　　…
」
同時刻、某国と川を挟んだ独裁国家に並んでいる国の古びたマンションの一室から花火のような音がした。数人が夜空を見るが何も飛んでいない。
数十分後、某独裁国家の中心地に細長い矢に羽根が生えた物が屋根に当たった。
「カッン！」
「ド！ドドドドドドーン！」
某独裁国家の象徴的な建物は一瞬で塵と化した。

ＧＰＳ機能付自動滑空局地核ミサイル、通称ブラックサンタ。
目標物を中心に1キロの空間だけ灰に出来る極地兵器が使われた。
南から飛んで来たので有れば攻撃を受けたと騒ぐが北の同盟国から飛んで来ている。
着弾前迄、レーダーにも映らずに…。
独裁国家首領に同盟国の首脳からホットラインが入る。
「だから、言っただろ！あの国には裏が有る…昔から笑いながら人を斬る国民性だ！手を出すと国が滅亡するぞ！」
同時刻、ナオのアナル爆弾が爆発した。極地ナパーム弾で瞬時に廻りの空気を爆弾が吸い込み真空にする。
その作用で領事館員の大半は即死する。
次に敷地内だけを高熱で焼き尽くし鎮火する。
消防車が着いた時には黒い炭化した人型と建物だけになっていた。

改訂　南米編　人体改造と蟻地獄

「ノー！ヘルプ！ヘルプ！」　薄褐色の健康的な肌。　薄褐色から乳首に向かい乳輪から徐々に乳頭に向かってピンクにグラデーションのように色が変わる。　彫りの深い目鼻立ちの整った顔に大きな瞳。　髪は金髪と栗色の中間色。　南米特有の女性を女医は特に好んだ。　白衣は脱ぎ黒いタンクトップに迷彩柄のズボン。　マオもタンクトップに黒いパンツ。　場所は南米、某国。　麻薬、売春、奴隷密売組織のアジト。　女医は世界各国の非合法組織と契約をしている。　ＧＰＳの取り付けから、顔や身体の整形。　処女膜再生手術。　拷問師としての自白、拷問、ビデオ撮影時の拷問師として…。　職種は無限に有る。　特に南米系の若い女性が好みで南米の組織からの仕事の依頼は良く受ける。　余り受けないのが黒人系。　スグにボスなり幹部が頭を撃ち抜く。　拷問の過程を楽しまない。　一度に殺すなら拷問師は要らない。　自白剤と銃が有れば良い。　その点、南米系は拷問をビデオに残し裏配信でも儲けるから拷問もジックリと出来る。　今回も南米系組織からなのでスグに受けて昨夜、東京を立った。　今回の女は警察関係らしい。　持ち物に手錠と銃が有る。　相手が誰だろうと依頼は請ける。　何故なら彼女達が生きて組織から開放される事は無いからだ。　「ノ……」　女性捜査官は眠りに就いた。　「ノー☆☆☆！」　現地の言葉で太った男が怒鳴る。　「何を言っているの？」　「何故、寝かせるかと怒っています！」　「はぁ？馬鹿じゃ無いの？麻酔をかけずに改造手術をしたらショックですぐ死ぬわ。ソレならアタシの仕事は要らない。銃で頭を撃ち抜くだけで良い！どうする？彼に聞いて！」

「　　…」　「麻酔をして巧く改造をして欲しいとの事だ。」

「今度、口出しするとアナタの組織とは縁は切るわよ！」　グッ

タリした長身の南米美女を真っ直ぐにさせて太腿とふくらはぎに台を置き、膝にメスを入れた。　スグに白い骨が見える。「粉砕機！」　電動ドリルの先が平たく成った機械を骨に当てるとトリガーを弾いた。「ガシュン！」　膝の骨が一瞬で砕けた。　膝から下を外すために膝の神経、筋肉、筋等を切り裂いていく。「ゴキ！」

　先ずは右脚を外した。　左右の膝下を外すと後処理はマオに任せ左右の手に移った。脚と同じ要領で肘から先を切断し外した。　うなじ上の頭皮を髪の毛事、切開して外し尻の尾骨の部分の皮膚を切開して髪が着いたまま、移植する。　尻尾が尻に着いた状態になる。

　次に胸の改造に移る。　豊胸しなくても南米美女特有の豊胸な胸をGカップ迄、豊胸する。　バッグから白い液体バッグが付いている特殊な機械を出し、ピストル型の銃身部分が注射器になっている機械を手に持ち仰向けにねている褐色の乳房を触りながら隙間が有れば手に持つピストル型の注射器を突き刺しトリガーを引く。「ジュー…」　液体バッグの白い液体が少し減ると注射針を刺した乳房が少し膨らむ。　全体的に膨らませる為に手で乳房を触りながら針を射ち液体を流し込む。　液体は人体から脂肪吸引で抜いた人の脂肪に特殊な薬液とホルモン強制剤が入っている。　数日で脂肪が身体に慣れて豊胸される。　乳房の施術が終わった。　乳房全体が赤く腫れているが数日で腫れは引く。「マオ、開口器出して」

マオが開口器を女医に渡すと口に取り付け口を開けた。　喉の奥に声帯が見える。　声帯に特殊なシリコン製の膜を貼る。「マオ、眼にガーゼと眼帯。耳に防音耳栓して、それで手術は終わりよ。」

　女医により手脚を短くされ喉を潰された女捜査官がストレッチャーに横たわり手首には何本か点滴の針が付いている。「出来たわよ！１週間は豚小屋は駄目よ。感染したら死ぬから…獣姦を撮影するなら３週間後ね。」　「もう、仕事は無いでしょ？日本に帰るわ」

　女医は南米組織の人間と流暢な英語で喋っている。「Ｄｒ．Ｔ、明日、拷問をして欲しい女がいる。今夜はホテルで泊まり明日もお願い出来ないか？」　「マオ、日本での診察や手術は？緊急で無け

ればキャンセルしていて。」　「先生、明日は1軒、ヒアルロン酸注射だけです。明後日は休診日です。」　「そう。じゃあ電話で謝りの電話を入れていて。」　「じゃあ送ります。」　マオと女医は手術道具は組織のアジトに置き、少しの手荷物だけを持ってアジトを出た。　出口でマスクとヘッドホンをされジープに乗り込む。数十分、揺られ普通の舗装された道路を通り高速道路にジープは乗った所でヘッドホンとマスクを外しても良い許可を組織の人間が出す。

大体の海外の組織は特定されるのを嫌うので海外の仕事では何処でも同じ事をされる。　車は其の国では一番で有ろう高級ホテルに着いた。　ホテルマンが近寄り案内を申し出る。「翌朝、伺います。くれぐれも外出はしないで下さい」　そう言い残し組織の男は去った。　部屋は二部屋、キープされているがマオの部屋に二人は入った。　枕の下にバッグに入れていたハンドガンを取り出し入れ、ホテルに先に入れていたカバンから部品を取り出し自動小銃を組み立てた。　南米の小国は政府を裏の組織が仕切っている場合が多い。

税関も密輸入は金で見逃す。　女医のバッグに入っている銃器も特殊強化プラスチック性で見た目も銃口に栓をしている為、モデルガンとして税関を抜けて持ち込む事が出来ている。　銃弾も強化プラスチック性の白い銃弾。　しかし殺傷力は普通の小銃並みに有る。

「先生、いつ見ても銃器の組み立て早いですね。」　マオは毎回、見慣れたように言う。　裏の組織との仕事ではトラブルは普通に起こる。　いつ敵対組織に拉致されるかも知れない。　自分の身は自分で守らないとスグに殺されるか、自分が改造される。　マオを必ず海外の仕事に連れて行くのも盾の代わりも有る。　替わりのナース等、奴隷市場にスグに出廻る。　「ネェ…先生…もう…我慢、出来ない…」　マオは手術後は何時も発情する。　特に女性を改造、拷問の後は興奮状態になっている。　「先生も…勃起している…」

パンと張った尻の前は男のように怒張している。　「ジジ…」

マオがジッパーを降ろす。　女医の下着は普通に女性用のパンティだが股間が怒張している。　マオが怒張を触り、ゆっくりとパンテ

ィをずらすと、男性のペニスが出てきた。　普通にカリがあり血管も浮いている。　違うのはペニスの先に有るべき穴が無い。「ハァ…」　女医がマオの顔を掴みしゃがみ込む。　マオのポテッとした唇に自分の唇を合わせ舌を絡ませる。　普通に見ればレズビアン同士の行為だが女医の股間には怒張した物が有る。　二人ともキスをしながらお互いの衣服を脱がして行く。「ハムッハア…ハァ」

「ビ！ビービチビチ！」　マオのシャツを女医が力任せに引きちぎる。　普通の力の強い男性なら手でTシャツを引きちぎる事は出来る事も有るが細い腕の女医の何処にそんな力が有るのか？　簡単にシャツ、ブラジャーを引きちぎった。「せ、先生！」　マオは普通の女性なので女医のボタンを上から開けていきシャツを脱がしている。「アッアッー」　マオは先に全裸にされて崩れて横たわった。「アッアッアッ」　唇からマオの股間に女医の唇は移っている。　赤い唇がマオの肉厚なビラビラした肉を吸い込み舌がビラビラを舌先でビラビラビラビラと動かしている。「アッ」　マオが女医のペニス状の起立したものを咥え頭を上下したり尖端を舌先でチロチロとした。「アッアッアッ…」　女医には物心がついた時にはもうペニス状の物がついていた。　毎日、午前中は牽引されて伸び切った所でソレに注射を打たれていた。　名前も昔から無い。

コンクリートの部屋に鉄格子の無機質な場所でAからZのナンバーが付いた自分とおなじ様なペニスが付いた少女達とすごしていた。

幼い頃はクリトリスの牽引と子女と呼ばれる看守の女が幼い性器を舐めたり、特殊な薬を打たれたり塗られたりしていた。　初潮が始まる頃にはセックスの修行が始まり、ハリ型を膣に収め何時間も落とさない訓練、後は女性、男性の性感帯の未付け方、愛撫のしかたから、激痛を与える方法。医学の知識、薬学、格闘技、銃等を教え込まれる。　２６人の少女達も訓練で命を落としたりして成人迄残ったのは僅か７人だけだった。　訓練施設の場所も不明だったがアジア系のTは日本に派遣された。　毎月、訓練された組織に医師、拷問師の売り上げの半分は納めなければならない。　ミスターは組

織に言われ遭った人間だ。　他の生き残りメンバーには白人系、南米系、黒人系がいるが配属されてからは見ていない。　人造的に造られたペニスの根元には普通に肉のビラから膣まで普通に付いている。　女医の好みは巨大化したクリトリスを女の膣に差し込みお互いが快楽を得るのが好きで有った。　「マオ、入れるよ…」　「ピンポーン！」　女医が興醒めした。　あれだけホテル関係者に部屋に近寄るなと言っているのにインターホンを鳴らされ、また2回目も鳴らした。　「アタシ、文句言って来る。」　「マオ、アタシが行くから…」　女医はガウンを裸の身体に直に羽織り枕の下に有る拳銃を握り腕を組んで拳銃をガウンの袖に隠した。　「誰？」　「ルームサービスをお持ちしました。」　ホテルの制服姿の若い女性がワゴンを前に立っている。　「頼んだ覚えは無いんだけど…」　「ジョセフさんから頼まれお持ちしました。」　ジョセフは今、依頼されて来ている組織のナンバー2だ。　無下に断わるのも出来ない。　「そう。じゃあ運び込んで…」　「カチャリ」　女医はロックを外した。　「失礼します」　そう言いながらワゴンを押す両手から右手をワゴンの後ろに垂らした袋に入れて拳銃を握り背後から女医を撃とうと頭を上げた。　「バスン！」　ホテルウーマンの女が腹部を抑えて前のめりに倒れた。　「カチッ」　女医の拳銃が少し形を変えた。　ホテルウーマンが倒れて直に男がドアから入ろうと銃を片手にドアの左右から現れる。　「パン！パン！」　女を撃った音と違う音が部屋に響く。　男達は頭を撃ち抜かれ絶命している。　ホテルウーマン姿の女は胃の内容物を口から吐きながら泣き顔で悶絶している。　「マオ、フロントに連絡をして組織の人間に来てもらって。後、ベビーハンドとメスを持って来て」　マオは白い棒状の子供の手状の模様がかいている赤ちゃんの腕のようなバイブを持って来た。　「先生！」　メスを受け取り足首に有る筋をスグにメスで切り止血剤が入った布を張った。　左右の腕の上腕に有る筋も切り止血剤をはる。　「ガハッガハッ…」　まだ苦悶の顔で悶絶している。　ホテルウーマン姿の女のスカートを捲りパンティ

をずらすと棒状の物をズブリと膣に押し込み棒状の先に有るボタンをおした。　膣から出ている部分が膨らみ蓋のように平たくなり股間に平たく張り付いた。　「ハァハァハァハァ…」　女の悶絶した顔がマシになり外国語で女医達を罵倒している。　何を言われているか分からないが罵詈雑言とは分かる。　「アガ！オゥ！」　「ほら、スケベ女がオモチャを掴み出した。」　「アア…」　また、悶絶しだした。　ベビーハンドと言われるバイブは表面はシリコンのような柔らかさだがスグに剣山のような針山が中にある。　別に特別な機械や仕組みはしていないが女性の膣は棒状の物が入ると包み込み、締めるようになっている。　特に性行為経験が多い女性は無意識に締める。　赤ちゃんが手のひらの物を無意識に掴む行為と同じで止める事は無理。　「どうしました？」　組織の男達が来た。

「襲って来たわ。男の遺骸は始末して女は明日の仕事前のデモンストレーションにするから組織のアジトに運んで…それとシャンパンを一本、持って来てね。」　組織の男達がワゴンを片付け、男達の遺骸と女を連れていき、シャンパンとおつまみを持って来た。

「もう来ないでね。次は最初から実弾使うから…」　「お気を付けて…」　騒がしい騒動が終わった。　シャンパンを手で開け、口に含みマオの顔に近づき、口移しでマオの口にシャンパンを流し込み、そのままベッドに倒れ込んだ。

南米編２

「ハムッ！ハウッ！」

女医はマオの口に吸い付き舌を絡めながら豊満なマオの乳房をにぎりしめ爪を乳首に立てた。

「アッ！」

ビクンとし、一段と乳首が膨らむ。

女医の口が乳首に近付き歯を立てて乳首を甘噛みして伸ばす。

「あうん…」

「先生…入れて…」

ベッド脇、サイドテーブルに置いていた双頭のバイブを先にマオの

尻の穴に突き刺しもう片方を自分のペニス大のクリトリス下に有る肉ビラを拡げバイブを入れる。
クリトリスはマオの肉のビラを掻き分けマオの膣に突き刺す。
「あう…」
「キュ…」
マオが女医のクリトリスを締める。
「アッ…」
マオの尻に突き刺したバイブは女医の膣とマオの直腸をかき回す。
「あ、あ、あ、あ！」
「オォーッ」
獣の咆哮が部屋には深夜迄、響いた。
「パン！」
肉を叩く音が南米の早い朝に響いた。
「マオ、朝よ！依頼者のところに行くでしょ！」
女医は服を着て出発準備は出来ていた。
皮のパンツでプリンとした尻を隠し、大きな胸は黒いシャツを着て、迷彩柄のサマージャケットを羽織っている。
肩から掛けたガンホルダーには銃がぶら下がり胸の横で揺れている。
「早く！」
急かされたマオは裸にジーパンを履き、シャツを羽織る。
黒いシャツの胸の位置にポッチが浮かん出いる。
一階に降りると組織の人間が椅子に座りタバコを付加していた。
「待たせた？ごめんね。今日はボスは？」
「組織の本部に居ます。昨日、先生を襲撃した女を拷問した所が見たいようです。」
ジャングルを走り抜けた場所に白亜の西洋館が建っている。
館横は駐車場で高級車が2台。
ジープが5台、止まっている。
「先生、コチラです…」
案内係の男が流暢な英語でエスコートす。る。

「あ、ちょっと待って。」
女医はカバンからイヤホン状の機械をだし耳に付けた。
「それは？」
「自動翻訳機よ。拷問時にイチイチ翻訳されたら気が散るわ。」
洋館の中は空調設備が効き南米とは思えない。
「コチラの部屋です。」
通された部屋には拷問室特有の血と糞尿、体液が混ざった独特なニオイがする。
「ほら！入れ！」
坊主頭の女が裸で拷問室に連れて来られた。
口枷をされてモゴモゴと女医を見て何かを言っている。
連れて来た男が口枷を取ろうとする。
「あ！取らないで！ソレだけの元気の良さなら自害する体力も気力もあるわ。拷問する必要が無くなるわ。」

「通訳の彼だけ居て、後は外に出て！」
「四つん這いに成りなさい。」
通訳が現地の言葉で訳す。
「面倒だわね！」
女の鳩尾を足先で蹴り飛ばす。
「アグッ…」
「がはぁ…」
「ビチャビチャビチャ…」
「汚いわね。拷問前に食事、与えないでよ」
「マオ！ソコのホースを使って汚物と女のヨゴレを流して！」
「体はブラシで擦ると良いから…」
「はーい先生！」
マオが陽気に返事をしバシャバシャと
女の身体に水をかけてトイレブラシで身体を擦った。
「ウグッ…ウ…ウゥ」

白いはだが紅くなる。
「はい。口を開けて！」
女は口枷を取られても口を開けようとしない。
「本当に面倒だわ」
女のアゴを手で掴み、エラ部分の窪みを動かすとガコッと音がして女のアゴは外れた。
「アワ…ア…ガ…」
「ゴウンゴウンゴウン…」
拷問室の横に有る壁が上に上がり透明なガラスが現れた。
椅子にM字開脚で座る少女が見えた。
勿論、衣服は付けていない。
「ほら、よく見ておけよ…次はお前だから…」
組織のボスが少女の産毛のような陰毛を触りながら握り締めでブッと引き抜いた。
「さて、するわよ。マオ、パンチングニードル」
「はい先生。」
マオがヤットコのようなペンチを渡す。
ペンチの片側には尖った針、反対側には穴が空いている。
「アガ…アガ…フガッ」
鼻の穴にペンチを差し込み柄を握る。
「バッン！」
「アギャ！」
鼻の穴からポタポタと血が落ちる。
「鼻輪。」
女の鼻に牛のような、鼻輪が着いた。
「ほらよく似合うわ。子牛ちゃん。」
「マオ、仰向けに寝かせて」
マオが鼻輪に付いたロープを引っ張り仰向けにする。
鼻を引っ張られ素直に仰向けに女はなる。
「ほら！脚を開く！」

「パン！パン」
太腿を叩き脚を拡げるように促す。
「アグッグッグ…」
ユックリと女は脚を拡げる。
「ヘーキレイなピンクの穴ね。あ、おしっこの穴。」
「マオ、紐を壁に縛ってカテーテルを取って」
マオは壁から出ている輪っかに鼻輪からのロープを縛り、カバンからカテーテルを取り出し先端にワセリンを塗った。
「チクッとするわよ…」
尿道口を拡げカテーテルを入れる。
カテーテルが中程まで入った所でカテーテルに付いている分岐されたホースにシリンダーを刺し空気を入れた。
「アグッ」
膀胱内でカテーテルの風船が膨らみ固定された。
カテーテルから尿がポタポタっと垂れる。
尿が垂れるカテーテルの先端に殻のシリンダーを刺し膀胱内の尿を吸い込む。
シリンダーに黄色い尿が貯まる。
「キュポ！バシャ　！」
「チューッ」
「キュポ！バシャ」
女医は女の膀胱から尿を吸い出し空にした。
「これ、何かわかる？」
シリンダーの中で小さな虫が蠢いている。
「ファイアーアントよ。刺されたら焼けたように熱いんだって？」
「ウ…ウ…ウ…」
何をされるのか女にも分かったのだろう。
シリンダーの蓋を外し一匹、ピンセットで取り出し殻のシリンダーに入れる。
「カン！カン！」

アリがシリンダーに入り込む。
空のシリンダー内にアリが一匹。
シリンダーに小型コンプレッサーを使い空気圧でアリを尿道に突き刺さるカテーテルを使い膀胱迄、送る。
「アゲッ！ハガッ！」
ファイアーアント、ヒアリが女の膀胱内を刺しているのだろう。
「誰の命令で襲ったの？」
女は首を横に降る。
「ヒアリの毒では人は死なないけど…何処まで正気で持つかな？」
「カン！カン！カン！」
シリンダーに残る全てのアリを入れた。
ソレを女に見せる。
「ああ…い…いいますから…やめて…」
「ダレ？」
「ペドロさんです…」
「ボス！聞いた？ペドロだって？」
「ガタン！」
「ペドロ？ウチのペドロか？」
ペドロは組織のナンバー2。
ボスの娘のボディガードも兼任する程、信頼している。
「ジリジリ…ジリジリ…」
ボスがスマホにでる。
「よう！ウチの娘、さらってくれたな？」
スマホに画像が映し出される。
真っ裸で天井の滑車から下がったロープに全裸の少女が垂れ下がる。
「ホラ！」
吊るされていたのはボスの娘のミランダだった。
髪を握り締めるのはペドロ。
「交換しようぜ！
今から2時間後に高速の〇〇にあるモーテルに連れてこい。」

「ドクター！聞いての通りだ！今日の拷問は辞めてくれ」
…なんなのよ！身内を取られて拷問中止なんて！ガキなんかギャングが作るな…
「わかったわ。それじゃ…アタシは帰るからね。抗争に巻き込みはゴメンだわ。」
「マオ、ボスの所に行くわ…あ、そのアリ、この女に全て入れてて…」
女医はカバンから卵型の黒い物体とリモコンを手にしてボスの元に行った。
「ビュンー」
マオがシリンダー内に風を送る。
黒く蠢くアリは全て女の膀胱に入って行った。
手際よくマオがカテーテルを抜く。
「オグッ…オオオオオオー！」
女が暴れ廻る。
「ボス、アタシからのプレゼント。貴方の娘がおかしかったらリモコンのボタンを押してね。」
「ハァイ！かわいいアソコね？あら？バージン？じゃあコチラに入れるから…」
黒い卵にローションを付けて少女の尻に突き刺しとニュムっと尻の尻に入った。
「また、仕事は待っています。コレから帰るわ。」
「すまないな…ドクター。」
「先払いで料金は頂いているから大丈夫よ！ソレより、空港迄は私達が運転していくわ。抗争に成れば兵隊はいるわよね」
「ああ、好きな車を使ってくれ。鍵は空港のカウンターに渡せばいいから…」
「マオ！帰るよ！」
「先生、このおんなは？さぁ…尿が貯ればアリは溺れ死ぬし…刺され過ぎたら女が死ぬだけよ。ほら、モタモタしてたら、ギャングの

抗争に巻き込まれるわ」
女医が館を出てマオが追いかける。
駐車場には一台、軍用ジープが止めてある。
「マオ、コレに乗るよ！」
二人はジープに乗り込むと走り出した。
ジャングルを抜けて高速に乗ると後ろから車が追いかけてくる。
「ほ～ら来た…」
バッグがら、筒状のモノを取り出し窓の外に出すと後ろから銃撃して来た。
「これだからギャングって好きだわ」
「ピン！」
「カラカラカラ…」
高速に筒が転がり後続車の前方で爆発した。
対戦車手榴弾。
普通の車なら前方で爆発しただけで破片が四方に飛び車は破壊される。
追跡者も相手が手榴弾を持っているとは思って無いのだろう。
防弾ガラスで無いフロントから無数に破片が飛び込み社内の全員が死んでいる。
高速を降りてジープを駐車場に入れて空港に入る。
空港カウンターでパスポートを見せて国際線を入った所に敵対ギャングが入って来たが空港警備の軍人にとめられている。
気にせずに国際線ターミナルを進みアメリカ行きの飛行機の機内に入った。
「疲れたわ。マオ、眠るから…アメリカで起こして…」
「先生、あの少女のお尻に入れたの何ですか？」
「え？小型爆弾。装甲車なら一発よ。」
…町外れモーテル…
高級車が数台、モーテル駐車場に止まっている。
そのモーテルに数台、高級車が入ってくる。

車から数人の男が降りる。
手には自動小銃、ロケットランチャーを持っている。
「おい！娘の交換が先だ！」
敵に捕まったボスの娘が車椅子に座り裏切ったペドロが車椅子を押してくる。
「ほら自分で歩け！」
敵対ギャングの娘が裸でトボトボと歩いて行く。
「ほら！娘だ！」
車椅子を部下が押してボスの車に乗せる。
「ガタガタガタガタ…お…お父さんのペニス…舐めさせて！」
「おい！どうした？クスリでも打たれたか？」
ガチャガチャとボスのベルトをはずそうとする。
「おい！」
ボスが娘の頭を両手で押さえると頭頂部にキズが見える。
「ガッデム！あのクソ野郎！」
ボスがスグにリモコンのスイッチを押した。
「お父さん！お尻！お尻に何かを入れられた！早く取って」
「はや…」
尻に爆弾を入れられた娘の下腹が紅く膨らみ尻から火を吹くと体中が膨らみ社内が炎に包まれて車体が膨らみ破裂した。
「お前ら！ぶち殺せ！」
敵対ギャングの車に向かいロケットランチャーが数発発射された。
ドン！ドドン！
木の葉のように車が吹き飛ぶ。
「おい！先生にスグに電話しろ」
機内の女医のスマホが鳴った。
「はい…あ…ボス？え？はい…アタマはアタシの領域では…頭なら知り合いのドクターRと言う脳の専門医がいますからボスの所に送ります…はい…」
「あ…R？、今は南米？良かった。ギャングの〇〇ファミリーのボ

スに合って…そう…仕事の依頼…電話番号はメールしておくから…じゃあね…」

「お客さま…スマホは…」

「あ、ごめんなさい…」

夕暮れ時の空に旅客機は飛び立った。

改訂　マオの始末と看護師ジェーン。

「う〜ウン…アハァ…」
マオが顔を擦りながら起きて来た。
「あれ…タクヤ…パチンコ？」
タクヤは駅前にあるホストクラブのホスト。
女医との約束を破り時々、通っている。
仕事終わりに同伴で食事をし店で閉店まで過ごしマオの部屋でセックスに励んでいた。
「何か…お腹空いた…」
ノッソリと立ち上がるとノーパンの股からはタクヤの体液がツーッと太腿を流れた。
…横浜港・コンテナ倉庫…
「カン！落札、クズ１０体、日本刀剣協会！」
横浜港の一画にコンテナを重ねた一帯が有るがその中に全てのコンテナを繋げ中をくり抜きオークション会場にしている一角が、有る。
女医は一人、購入に来ていた。
事前に送られたパンフレットに購入意欲をソソられた女がいた。
ジェーンフジサワ。
元アメリカ海兵隊特殊作戦群医務官。
年齢２７。
中東紛争時、ゲリラの捕虜になり拷問を受けるが自力にてゲリラを殺害し脱出。
沖縄基地勤務時、上官を殺害したが精神疾患により除隊。上官遺族から傭われた沖縄の組織に拉致されわれ人身売買組織に売られる。
「この子、良いわ。マオは銃器も運転も出来ないのよね。」
「マオ、明日はクリニックを閉めるから。休みよ。アタシは先に帰るわ」

院内の電話でそう伝えると裏口から出て駐車場から車に乗り夜の街に消えた。
「あ、タクヤ…病院に来れる？先生、先に帰ったんだ」
数分後に原付バイクに乗ったタクヤがクリニックに着いた。
「タクヤはお金！アタシは薬を取ってくるから…」
「ビビービビー」
助手席に置いている女医のスマホが鳴り映像が映る。
映像にはクリニックの金を数枚、盗むタクヤと薬棚から向精神薬を盗むマオが映る。
「はぁ…ここまでね…マオ…さよなら…」
翌日、ホテルをチェックアウトした女医は車を都心から横浜に走らせた。
ホテルで朝昼兼用で食事を済ませ、昼前にホテルを出たので3時位には人身売買会場に、着いていた。
顔見知りの人物を会場で探す。
「あ！当主、買って貰いたい女と男がいるんですが…」
「おお…先生か？で、誰じゃ？」
「はい、この手癖の悪いネズミを2匹です。女は病気は有りません。男はホストですので…肝臓が少し弱い位ですかね？」
「うむ！いくらじゃ？」
「いくらでも…その代わりに今日のナンバー１４を譲って下さい。」
「良くわかったな。あの元特殊部隊員と儂の弟子を戦わそうと思ったんじゃ…先生は？」
「あの娘の戦闘経験と看護師の技術です。海外の組織との仕事には銃器に精通した人間が必要ですし…お願いしますね…飽きたら当主に譲ります」
「わかったわ！で、こ奴らわ？」
「ＧＰＳを付けているのでこのスマホを渡します。地図を見たらパチンコ屋ですね…。」
「おい！小奴らを捕まえてサムライポルノに出演させい！」

「次はメス奴隷！」
ナンバーが次々と呼ばれる。
「ナンバー１４！」
女医が手にしたカードが光る。
誰も競らない。
女医が日本の黒幕フィクサーの関係者と人身売買参加者は全員が知っている。
「カン！決定！」
「あ、貴方、彼女を外のアタシの車迄、連れて来て。服や下着はいらないわ。ガウンを羽織っただけで良いから…早くね…」
…パチンコ屋内…
「ねぇ！出てるの？」
「あぁ、別積みで今は１６箱だぜ。」
盤面に二人は顔を近づけ玉の飛ぶのを見ている。
「マオさん？」
肩をグッと掴まれビクリとマオはする。
「先生に頼まれ探していたのですよ。
そちらは彼氏のタクヤさん？」
…え？スマホは自宅に置いたのに、何故？…
「先生が二人をお連れしろと言われたので…来て貰えますか？」
マオの背中にゴツリと筒状の物が当たる。
同じくタクヤの背中にも…。
「人前で騒ぎはしたくないので…来てくれますよね？」
「タ…タクヤ、付いて行くよ。」
「冗談だろ！モデルガ…」
「プチュン！」
「ここで始末はできますが…」
タクヤは右の太腿を撃たれた。
四人がタクヤを隠し後ろをマオが付いて行く。
その後ろをサイレンサー付きの銃器をカバンで隠した男が付いてく

る。
外にワゴン車が止まっている。
「ほら！乗れ！」
「いて…イテテ…」
二人はクルマに乗せられ連れ去られた。
「アガ！」
タクヤは口枷をハメられ喋れない。
マオは一度、拉致された事が有るので先生にバレたとスグに思った。
車は高速に乗り一時間程、走った。
高速を降りたら田舎の風景が見える。
田んぼに里山、人も余り歩いていない。
車は村を抜けて竹藪の道を進む。
竹藪の先には城のような建物が建っている。
大きな大手門がギシギシと開く。
門の中には袴姿の男女が剣や槍、薙刀の稽古をしている。
車は土蔵のような建物の前に止まる。
土蔵と言っても大きさは体育館ほどは有る。
外には臓器運搬車が数台、駐車している。
「おい！連れて行け！」
「男は血液検査をしろよ。女は問題は無い。」
ムキムキの身体に褌姿の男がマオを連れていく。
「ほりゃ」
タクヤが数人の男に担がれ土蔵の中に消える。
「要らん毛は全て落とさんとな」
そう言いながらマオの頭髪のオデコからバリカンを入れた。
「ギュイーン…」
「ボタボタボタ…」
マオは先生に横領、薬の横流しがバレて売られたと自覚している。
女医がマオを購入した時にクリニックの金は組織の金。
それに手を付けるのは組織への裏切り。

組織の掟に従い処分する。
誓約書に名前を書き拇印も押した。
「アナタは下半身がだらしないから…絶対にホストクラブには行かない事！行けば相手のホストも処分する」
先生の非情さと言うより組織の非情さは何度も分かっていたがタクヤに唆されクリニックの金と薬を盗んだ。
アタシは今日、処分されるだろう。
せめて…ひと思いに…。
褌姿の男に手を引かれ木の廊下を歩く。
眼には目隠しがされ廻りが見えない。
同じく金髪の髪を剃られ坊主姿のタクヤが連れて来られた。
先にマオが木の床に寝かされ、股に何か液体を塗られた。
ローションらしいが股やクリトリスがジンジンして来る。
いつの間にか乳首も立ち膣からはタラタラと愛液を垂らしている。
小陰唇は開きかけ
ペニスを受け入れる準備は出来ている。
「ほら！入れろ！」
野太い声が聞こえた後、肉のビラを掻き分けタクヤのペニスが入って来た。
「あん！」
人前でも声は出る。
腹の辺りをベルトで床で固定された。
「ほら！対面だ！最後の交尾を楽しめ！」
タクヤは催淫剤を飲まされペニスをしごかないとギンギンに勃起し過ぎて痛いぐらいに成っている。
マオも催淫剤入りのローションで膣壁を擦られないとおかしくなる。
二人が腰をヘコヘコと動かす姿が数台のカメラで撮影されている。
「ア…アアン…」
「ハァハァ…」
二人はセックスに夢中で近づいて来る巨大な銀色の円盤には気付い

ていない。
そして頭部と腹部の横に立つ刀を持った男も…。
「ハァハァ…」
「シャヤ……」
「アギャ！」
タクヤのペニスの付け根と陰嚢の間に回転するノコギリの歯が当たり痛さで我に帰ると「キエィ！」
頭部にいた男が二人の頸を目掛けて刀を振り下ろした。
「シャヤ…」
ペニスは半分に切られセックスの途中で勃起したペニスが膣に収まったまま、腰まで切られる。
「とうっ！」
斬馬刀のような刀が二人の胴を切る。
白装束の女性達が頭を桶に入れ胴体は袋で包み、腰から先は保存液に浸された容器に入れて持ち去る。
白装束達は表の臓器運搬車で赤色灯を廻しながら発進していく。
４台の車が館から出ていった。
褌姿の男達は血が飛び散った巨大な丸鋸の廻りを水をまきブラシで磨く。
…都心高級ホテル…
「こんにちは…この子に服、下着、靴、全てを揃えて…センスは貴女に任せるわ。」
「あ、訳有で下着を付けていないから下着からね…頼むわ」
そう言って女医はセレクトショップに購入した女を任せセレクトショップを出てホテルカウンターに行った。
「コレなど…如何ですか？」
ジェーンの容姿で外国語しか分からないと思った店員は拙い英語で話しかける。
「下着はスポーツブラのような身体が動かしやすい下着が欲しい。
ブラウスはスリットの入ったドレス。

靴はピンヒール。
色はダーク系なら何色でも良い」
流暢な日本語で話す。
「スポーツブラは無いですがコレなら…」
既に全裸のジェーンは下着を付けて身体を左右上下に倒したり捻ったりした。
「下着はコレで…」
「ドレスは…」
恐る恐る店員はドレスを渡す。
ジェーンの背中には何本もの傷が付いていた。
ドレスを着て脚を膝蹴りにしたり身体を捻る。
最後にピンヒールを履いてセレクトショップのソファに座る女医に近付いた。
「それで良い？」
「ごめんなさい。ドクタータオでせあ　請求書はクリニックに廻して。」
「ジェーン、部屋を取っているの上に行くわよ。」
「ハイ。ドクタータオ」
先に女医がエレベーターに乗り遅れてジェーンが乗り込む。
最上階に着きエレベーターを降りた。
最上階には部屋が一つしかない。
豪華な内装に装飾、そしてテーブルには豪華な食事が並んでいた。
「ジェーン、好きに飲んで食べて！貴方の歓迎会だから…」
「何故です？」
ジェーンが初めて女医に話しかける。
「コチラも聞きたいわ。何故、襲ってこないの？その動きやすそうな下着にドレス。凶器にもなるピンヒール。殺る気、満々じゃない。」
「あなたが普通の人間なら殺して逃げていた。貴女こそ何者？」
「アタシは自分の事を知らない。気が付けば組織に育てられ幼い頃

から殺人術、銃器の扱い。医学を教えられていた。毛の生える頃には仲間を殺していた。朝に話をした友を夕方には手にかける。それで生き残り今は日本よ。だから名前も無い。友達は全員がアルファベットしか付いていない。だからアタシは自分が何人かも知らない。だから…あなたが襲ってきたら殺しているわ。」

「アタシは…」

「いいわ。コレだけ答えて。アタシの仲間になるのか？成らないのか？心に殺意を抱く子は使いにくいわ。仲間にならなければ返品するだけよ」

「どうする？」

「先生に付きます。」

「そう、さぁ食べて！」

「プルルプルル…」

「はい…はい、当主、始末が終わりましたか…1時間後に放送…はい…」

「さぁ、食べるわよ。」

二人はテーブルの食事を各々が好きな物を食べ酒を飲んだ。

「ジェーン、ちょっとした見て貰いたいの…」

女医はテレビにUSB型のアンテナを付けてスイッチを付けた。

画面にはセックスをしながら下半身を切られ、頭を落とされる男女が映る。

「先生…知っている人ですか？」

「彼女は昨日迄、ウチのクリニックの看護師よ。貴女と同じく人身売買組織から買ったの…」

寂しそうにポツリと喋った。

「約束したんだけどね…組織の金は盗むなと…男にそそのかされたら裏切るのかな？」

「ジェーン、約束して組織の掟には従うと…裏切り者はアタシでも庇いきれない…」

「ソレさえ守れば男を作ろうがアナタの自由よ…」

「はぁ…アナタは今日はココに泊まりなさい。アタシは組織によばれているから…明日から出勤でいいわ…そのスマホはアナタの自由に使って…クリニックの場所はアプリに入れているから…じゃあ…来週から…。

女医はドレスの裾をなびかせて部屋を出て行った。

・スカルファック・

「ギチッ…ギチ…ギチッ」

「アギャーちぎれる！」

「ジェーン、ちぎっちゃいなさい」

「ブツッ！」

「ガハ！」

銀色のペンチの先にピンクの肉片が付いている。

「カン！カンカン！」

銀のトレーに肉片が落ちた。

「まだ言わなくて良いわよ。このオマタがツルツルになる迄、むしって、切り取ってあげるから…」

「アギャー！」

「あのね…貴女が男と遊び過ぎたから貴女のクリトリスは肥大するし、包皮も捲れて大きくなる。小陰唇のビラビラも大陰唇から飛び出すからグラビア撮影出来ないって貴女の事務所の社長から言われて手術してるの！麻酔しても良いけど切れたら激痛が襲うわよ！それに、麻酔が少ないほうが術後は綺麗なのよ。」

ミスター傘下の芸能事務所のグラビアアイドル、アユミ。

やたらと男遊びが激しく、相手の男は売れる前のデビュー仕立ての新人が多い。

今回は某男子アイドルが多数、所属する事務所の売れっ子、アイドル。

この男も種馬のように異性間の問題を起こし事務所からの依頼で手術する。

アユミがギャーギャー喚くベッドの横でペニスに導尿用の管を挿さ

れ、猿轡をして震えている。
眼にはアイマスクをしている。
耳からはアユミの悲鳴がずっと聞こえている。
「さて…無駄な肉ビラや包皮、肥大したクリトリスは小さくしたわ。次に男が嫌いになる不感のツボを突いて不感症にするから…。貴方が引退するまで性欲は無くなるわ。」
「え！嫌です。セックス出来なかったら仕事しません！」
「貴女、セックスのし過ぎで肉ビラが捲れてビキニからはみ出すようになってグラビアの仕事が出来なくなったんでしょ。そんなにセックスしたいなら娼館に売るようにしようか？セックスしてお金が貰えるんだから…どうする？そのかわり、男は不細工も来るしオヤジも来る。まぁ、イケメンは来ないでしょうね。
今、決めなさい。娼館に行くなら今から事務所に電話してあげるから…」
「わ…分かったわよ…不感症に成れば良いんでしょ！」
「分かれば良いわ。ジェーン、２０センチの針」
「ハイ、先生。」
細長い髪の毛並みの針を女医は渡された。
クリトリスと尿道との間に有る窪みに針先を当てスッと刺して行く。
針はスッと１５センチ程はいる。
針の根元に付いている木の棒をユックリとトントンと二度、叩いた。
「アッ！」
「はい、出来た。感じる？」
「ブィーン」
ピンクの割れ目に黒いバイブがクネクネとウネリながら入るがアユミの膣に潜り込みグネグネとかき回すがアユミは何も感じていない。
「シャッ」
「ほら、感じないでしょう」
下腹部と上半身を隔てていたカーテンを開けてアユミは自分の股間に潜り蠢くバイブを見ていた。

「なに～全然、感じない」
「仕事に励みなさい。社長からの許可が有れば直してあげるから…」
「次はヤリチンくん…」
「た…助けて…」
「なにいってんの、嫌と言うファンを犯して事務所に揉み消して貰った事が何回も有るでしょ。ソレに貴方の去勢が両事務所の同意要項なの。な～に、立たなくなるだけよ。おしっこは出来るし、事務所の言う事を聞いて働いたら元に戻して貰えるわよ。あ、ソレとアタシ以外の医者にかかった場合、一生インポのままになるわよ。」
尿道カテーテルに通して有る針先を前立腺迄入れるとムクムクと勃起しだした。
「二十はやり盛りか…」
「トン」
「アッ」
針を抜いて行くと次第にペニスが萎み初める。
「ジュルン！」
ペニスからカテーテルが抜かれた。
萎んだペニスからトロリと当分は出なくなるであろう精子がでた。
「ジェーン。手術終わり。待合室のマネージャーに言ってきて。」
男が先にスゴスゴとパンツを履いて手術室を出ていく。
「なんで！こんな事をするんだよ！週刊誌にバラすぞ！」
「あぁ？バラしてみろ！お前、一人をこの世から消すのは訳ないぞ！週刊誌に載った時点で切り刻んで売ってやるよ！」
何時もは大人しいマネージャーが急にドスの効いた声だしたのでアイドルの男はシュンと大人しくなった。
「なぁアユミ…この世界、人が消えたり不明な自殺って結構、あるんだよな…2回目は無いからな…まぁ…不感症なら心配、ないか…早く服を着ろ、午後から撮影だ！」
「はぁ…やっと静かになった…。」
「この季節は大変なんですか？」

「芸能は年中、大変よ。特に夏かな?浮かれてゴム無し妊娠。未成年アイドルの堕胎。
後は枕前の処女膜再生。
１７や１８の子に処女を求めるのはナンセンスよ。早い子は１３や１４で経験するわ。」
「午後の予定は?」
「あ、先生、午後からはマダムセイコの拡張と旦那様が在宅なので出来れは今日、挑戦したいと…」
「何センチまで拡張できた?」
「３５位ですかね。無理をしたら裂傷に成りますが…」
「３５ならギリギリに頭は行けるかな?でも裂傷の処置の準備はしていったほうがいいわ。」
マダムセイコ夫婦は昔からのクリニックの得意先。
主人は小さな小柄な男性。
マダムセイコは三十代後半。
夫婦の性癖は性器の拡張。
自分達でフィスト迄は出来るようになったが、フェイスファックが出来ないかと半年前に頼まれ半年かけてセイコの膣を拡張して来た。
筋弛緩剤と膣筋の切断、引き伸ばしで何とか半径２５センチ迄に拡げた。
「今日、スカルファックをするんですよね」
「アタシ達、立会でね。旦那が暴走して顎まで入ったら窒息死してしまうから…」
「物好きですね。」
「性癖は限度が無いからね。一種の病気。セックス依存もそうだし、整形のやり過ぎもそう。」
「じゃあ、筋弛緩剤と手術道具一式でいいですね。」
昼に二人は軽食で済ませ真っ赤なベンツに手術道具を積み込みクリニックを出発した。
ホンの数十分で患者マダムセイコの自宅に着いた。

「ビー！ビー！」
「ガチャリ。」
「いらっしゃいませ。先生。」
二十代後半のスーツ姿のお手伝いの女性が女医らを迎えた。
「マダムは？」
「まだ、おやすみです。」
「旦那さまは？」
「浴室で準備をしています。」
「コチラに…」
西洋の洋館を丸ごと移築した館には中世の調度品、西洋騎士の甲冑などが飾られている。
社長は製薬会社の会長。
女医も依頼して色々な薬を作って貰っている。
「コチラの部屋に奥さまが居られます」
「先生、ごきげんよう」
黒髪を日本髪にしているが西洋の血が入っているのか日本人女性よりも大柄な肌の白い女性が大の字に横たわっている。
眼は青み掛かった黒。
真っ裸で横たわり豊満な乳房は左右に別れてデロンと乳首が床に着いている。
「先生、今日は出来るわよね！」
「奥さま。本日、決行いたしますが…その前に拡張具合を見てみます。」
股間にはボウリングの玉のような黒いボール状のモノが膣を押し拡げ隙間なく肉のビラも伸び切りクリトリスも形状を留めていない。
「ジェーン、ボールの紐を先に抜いて。空気を抜かないとボールは外れないわ。」
「プシュー」
股間に張り付いた黒いボールは萎み円球がシワシワと縮む。
「バコン」

「あん！」
股間から拡張用ボールが外れた。真っ赤な肉の穴が股間に開いている。
「先生、行けますかな？」
「会長、会長の頭でしたら行けますがくれぐれも深く頭を押し込めないで下さい。最悪、窒息死をします。後、コレが特殊ゴーグルです。先にＬＥＤライトを付けて頭を押し込めてください。会長にアクシデントが有った場合は会長の命を優先して奥さまの膣は切り広げます。宜しいですね？」
「構わん」
会長は身長１６０センチ、小学生並みの体型に筋肉と骨の究極の細マッチョ体型。
「ではタカコ、お前も脱いで準備をしなさい。」
タカコと呼ばれたのは先程のスーツ姿の女性。
タカコはスーツを脱ぎ、躊躇せずに裸になった。
「では初めます。」
小柄な体型だけあって頭も小学生並みに小さい。
頭髪は全て剃り上げている。
特殊なゴーグルをかけた会長の頭に特性のローションを塗りたくり、横になっている奥さまセイコの膣口にもタップリと流し込む。
セイコはエアマットに寝転ばりマット上部には鉄製の取っ手が左右に有り分娩台のように手でにぎり身体を固定する事が出来る。
「ジェーン、身体を掴んで！せーので会長の身体を持って奥さまの膣に体ごと押し込んで！いくわよ！せーの！」
「あーーーー」
大陰唇が拡がり、スキンヘッドの頭がズブズブと膣に入って行く。
「ジェーン、ストップ！」
鼻が入る手前でジェーンを止めた。
「お！おお！凄いぞ！ピンク色の肉の世界だ！」
会長のペニスはギンギンに勃起してきる。

タカコが勃起しているペニスを咥えて頭を上下させはじめた。
タカコも端正な顔立ちと肉感的な身体でクラブのハンバーワンと言われても納得出来る美貌の持ち主。
その彼女が自分の妻の膣に頭を入れて勃起している男のペニスを含み愛おしいそうに頭を上下させている。
ビデオカメラを3台置き、行為を撮影している。
1台は会長が頭を入れている局部の撮影。
頭を入れられ恍惚の表情のセイコの顔。
最後に会長の勃起したペニスを愛でるタカコ。
「タカコ！入れてくれ！」
口からペニスを離し、怒張したペニスをタカコは自分の秘所に押し当て腰を降ろして尻をグラインドさせはじめた。
…なんなの？このプレイは？…
ジェーンには理解出来なかった。
魔界に有るオブジェを見ている感覚に陥った。
「アンアンアンアン」
タカコのグラインドが激しくなると会長の身体が膣側に押し当てられズ…ズズ…と入っていく。
「あ！」
「ズボリと鼻が膣に納まった！」
ズルん！
会長の頭は全て膣内に入り込むと身体をバタバタとさせた。
恐れていた事態。
スグに助けないと窒息死する。
「ジェーン！その女を会長から剥がして！」
ジェーンはグラインドしているタカコを突き飛ばし会長から離した。
「ドサリ！」
タカコは会長から離れたが会長の身体が小刻みに震え出した。
「ジェーン！緊急オペ！奥さまの膣を切り開いて会長、助けるから。」

いざと言う時の為に麻酔薬、メスは準備している。
セイコの大陰唇に麻酔薬を打ち、スグに会陰をメスで切開した。
次に膣上部をクリトリスを避けて切開して隙間を作りジェーンが会長の身体を引っ張り出した。
スグに酸素マスクを口に当てる。
「ドクン」
勢い良くペニスから白い液体が発射された。
「ベト…」
ジェーンの腕に液体は付いた。
射精と同時に会長の顔色が土色から肌色に変わる。
「はぁ…助かった…」
「ジェーンがいてくれて助かったわ。前の助手は力が無くてね。窒息死させたのよ。」
「まえ?先生、このような事は何度もあるのですか?」
「有るわよ。スカルファックの会ってものもあるしね。だからアタシの仕事にもなるのよ。普通の医者がプレイを手伝う?」
「あ…奥さまはもう駄目ね。これ以上、小さくならないわ。」
「ハァハァハァハァ…先生、助けてくれてありがとう…セイコはもう無理か?」
「そうですね…締まりは無くなります。」
「そうか…次はタカコを拡張してくれんか?」
「わかりました。来週からはじめますがタカコさんの同意書は会長にまかせます。」
セイコは呆けて、タカコは震えていた。

新たなナースサナエ

「カン！カン！落札！決まりました。サムライ企画さま。外道、５匹をお買い上げ」

外道と呼ばれた者たちは腕に入れ墨を入れたり、女は髪をボサボサに生やしてトボトボとバニーガール姿の女に首輪を引かれカーテンの奥に消えて行った。

「先生、外道ってなんですか？」

「あ、外道は目的以外の者の事。釣り人が良く使うわ。彼らは薬物中毒者。健康体なら製薬会社、臓器移植等で使い道があるけど…薬物中毒者はイキナリ、幻覚を見たり狂ったり、始末に負えないのよ。彼らの末路はサムライポルノの出演か、介錯をしていた若い剣士達の試し切り用。彼、彼女らは有名な剣術道場の子弟たち。昔は人を斬って一人前と言われたからね。そして外道の大半は密売、殺人等の罪人。斬る剣士達には罪悪感は余りない。」

「あの女性達は？」

「彼女達も大半は殺人者。棒術や槍の練習用かな？股間を突いて一気に口から出すのは技術が必要なのよ。槍先に血糊、内臓、体液が突いて普通は止まる。ソレを口から出すにはスピードと力が必要なの。後は刀匠の刀の試し切り。」

「へー人身売買にも色々な人が売られるんですね…今日は先生…」

「お！ジェーン、面白い改造人間が出品されるぞ！」

「エントリー１、人間ゲージセイコ」

「ガラガラ…ガラガラガラガラ」

「先生…あの人…」

台車の上に性器拡張されスカルファックの末に膣を切り開かれたセイコが乗っている。

眼はトロンと宙を眺めている。

「キーキキ～」
切り開かれた股間、膣にはネットが張られ、ピグミーモンキーが膣の中で暴れている。
膣壁が黒く変色している。
何かの薬品で革のように硬くしたのだろう。
「カン！落札！２１番」
恰幅の良い丸坊主の男が購入した。
「彼はヤン。中国闇社会の一人よ。
コレクション室には人間達磨や乳房が４つ有る女等、コレクションしているわ。」
「次は密輸用。」
日本人、黒人、白人、南米系などの裸の女性達が入って来た。
顔は普通。
胸も日本人ならＢからＣ、外国人でも胸の大きな女性はいない。
「みなさん…普通なんですね。」
「そうよ。目立たないのが一番、いいの。見てみなさい。」
オークション係員が注射器を持って来て一人の日本女性のＢカップの胸の乳首に針を刺した。
女性は痛がっていない。
シリンダーを押すと注射器の液が乳房に流れ込む。
段々とＢカップの胸が膨らみ注射器５本で胸の膨らみはＤカップに変わった。
「あれはね、医療シリコンに薬物を混ぜた注射をしているの。乳首は注入口だから痛みはないわ。あの中身を液体爆弾に変えると…テロで使えるの。」
「３人！２人！」
色々な密輸組織がオークションに参加して女性は全て売れた。
「次はセックス専用です。先ずは男！」
「筋肉隆々、細マッチョから色白、外国人、さまざまいます。ペニスは未改造です。購入者で改等はお願いします。」

裸に首輪をされた男達が舞台に上がる。
「ピカッ」
落札された男は首輪が光る。
細マッチョの顔が美形なペニスも大き目の男の首輪が赤、緑、青、黄色とひかり赤で止まった。
「ナンバー３０番さま。落札」
「先生、彼のペニスの改造、お願い出来るかしら？」
胸に３０のバッチを着けた貴婦人が女医の元に来て改造依頼をして来た。
「あの、微震動の機械をお願いしたいんですが…。」
「良いですよ。事前検査も有りますから来週、来てください。」
「次はオンナのセックス奴隷です。」
「ナンバー１．．前職、アイドル…」
アイドルは人気が無くスグに落札される。
「ナンバー２．前職、銀座クラブ…」
銀座クラブ勤めだった女の首輪が光る。
「落札！」
「ナンバー４、前職ソープ嬢！」
「ピコン！」
「はい、落札出来たっ。ジェーン裏に車を廻して。あの子、連れ帰るから…」
「ナンバー４、持って帰るわ。
手錠とガウンを羽織らせて。下着は要らないわ。
検査はウチでするから…あ、あの子、戸籍は有るの？無ければ適当に作っていて。
請求はクリニック迄。ボスに宜しくね。」
黒いガウンを羽織り女がオークションの係員と共に現れた。
「名前は…とりあえず４のシーちゃんね。車に乗って。クリニックで話はしましょう。」
「イヤ！いや！死にたく無い！」

「馬鹿ねクリニックで臓器だけ取らないわよ。貴女、ナースの資格、有るわよね。私はナースとしてアナタを買ったの。付いてくるのが嫌なら返品するけど?どうする?」
「い…行きます!」
「じゃあ、行きましょう」
真っ赤なベンツがコンテナの前に止まっている。
ジェーンや女医達が入っていたオークション会場はコンテナを何台も重ねた中に空間を作りカモフラージュしている。
万が一、警察等に摘発される情報が入れば船に乗せたり、トレーラーで自由に移動できる。
外のガードは普通に警備会社の制服を着ている男達がしている。
「改めて見ても凄いわね先生。」
「それだけ国際的な裏組織が仕切っているの。売られたら８０%は海外、国内は２%、１８位は死亡ね。シーちゃん、感謝しなさい。」
「ジェーン、車を出しなさい。」
「ガコン!ヒュルルル…」
ベンツはゆっくりと音を余り立てずに海岸通りを通りクリニックの有る高級住宅街に向かった。
「ジェーン、クリニックに着いたらスグにこの娘の検査と整形するから…。」
「はい。先生。」
「あなた…名前は?本名。」
「トワダサナエ…です。」
「ふ～ん、普通。戸籍は?売った?売ってない?」
「売ってないで…す」
「貴女、何をしてアソコに売られた訳?大体の事は聞いているけど…自分の口から言って!」
「あ…アタシは歌舞伎町のホストに…貢いで…び…病院の薬を…横流ししたり…入院中の…組織の幹部を…医療事故に見せかけ…殺害しました。裁判は事故と判決が降りましたが…拉致されて…人身売

買組織に…売られました。」
「あ、そう。」
「ところで…看護師免許は?持っている?」
「はい…」
「じゃあ、採用。」
「先ずはシャワーを浴びて来て!ジェーン、洗うの手伝ってあげなさい」
「はい!先生。ほら、こっち!」
髪はボサボサになり薄汚れたサナエをジェーンはシャワールームに連れて行った。
「アタシも浴びよっと」
ジェーンはドレスを脱ぎ捨てた。
ドレスの下には下着は着けていない。
筋肉と脂肪が均等に付き白い裸にシックスパックの腹筋、研ぎ澄まされた肉体美にサナエは見入っていた。
「ほら、頭!」
ジェーンがサナエにシャワーのお湯をかけてシャンプーをドバドバと頭にかけた。
ドス黒い汚れた水がサナエの身体を伝い排水溝に流れて行く。
何回かシャンプーをかけて髪を洗う作業を繰り返すと流れる水が透明になる。
「次は身体だから!その椅子に座る!」
浴室の椅子に座るとジェーンはボディソープをかけて身体をゴシゴシと強く擦った。
身体からも大量の垢が出て泡が黒くなる。
「ジェーン!その子、洗い終わったら処置室に連れて来て。今日は性病検査とアソコの具合を調べるから…あ、アンダーヘアは剃っていて!」
大体、洗い終わり…
「さて…余計な毛は不衛生よ。剃るから横になって股を開いて膝を

抱えて…」
自分で脚を抱えてジェーンに股間を見せる。
手入れも何もしていないから剛毛が股間を埋め尽くしている。
ジェーンの青い眼が股間の剛毛に注がれている。
ジェーンはスグに頭にタオルを巻き、ショーツにスポーツブラ姿になっている。
「凄いわね。日本人って処理しないのね。
本当はワックスで永久脱毛したいけど検査が有るから剃るだけで仕方ないか…」
そう言いながら美容師が使うハサミでジョキジョキと剛毛を切り短く成ったところをカミソリを使い恥丘から大陰唇、ヒダ、肛門そばまでカミソリで剃り上げた。
「アナタ、タオルで身体を拭いて裸の上にガウンを着て付いて来なさい」
「アナタ、この処置室からなかに入りなさい」
そう言い残し処置室横の部屋にジェーンは入って行った。
処置室に入るとスグにパーティションがあり部屋全体は見えない。
「あら、入ってきたの?ノック位はしなさい。コッチへ来て。」
「其処の分娩台に座って!」
サナエはモジモジとしている。
「アナタ、ソープ壌してたんでしょ?定期検診は?ほら、早く!返品するわよ」
裸になり分娩台に座り足を開いて台に股を拡げて検査を待った。
「先生、はじめますか?」
「そうね…ジェーン、簡易検査液を膣に流し込んでから採血して…淋病と梅毒ならスグにでるしエイズ簡易キットも有るでしょ。それで大概の性病検査はできるわ。」
…簡易検査液は凄く刺激が有り現在は血液検査が主体だ。それなのに使うって…
ジェーンがツルツルに剃り上げたサナエの縁が黒ずみグラデーショ

ンに成ったビラビラした肉ヒダを分けビデを差し込み、簡易検査液を膣内に流し込むとサナエの膣内壁にピリピリとした刺激が走った。
「ハッイッ！」
簡易検査液は酸で膣内を少し溶かしその中に最近がいるかの検査液。検査される女性には苦痛でしか無い。
６０秒差し込み、検査器を抜くと検査器には溶かした膣内壁の液がポンプ式に入り出て来る仕組みに成っている。
「シュワシュワ」
検査器を抜いてもサナエの膣内に残る検査液は泡を立てながら膣壁を溶かしている。
膣内洗浄器をジェーンはブスリと刺して洗浄器を作動させた。
今度はサナエの膣内を高圧の水流が洗い流す。
「バシャバシャバシャバシャ」
膣から溢れた水が床を濡らす。
「とりあえず、淋病とエイズ、梅毒はないわね。それにしても…アナタのソコ…ちょっとゆるくない？何処の店にいたの？」
「横須賀の…シャングリ・ラ」
「え！あの外国人専用。米兵御用達の？外人ペニス相手ならココも緩むか…仕方ないわね。縮小手術と膣改造手術してあげる。」
「ジェーン、脚を分娩台に固定して。」
ジェーンは素早く脚を固定して手首もバンザイの形で拘束した。
「イヤ！別に緩んだままで…イイです…」
「あ～あ、拳を入れられたのも分からないの？馬鹿に成っているわよ。ジェーン、コレから膣縮小手術と膣壁改造をおこなうから…」
「ああ！嫌です！嫌です！」
「モニター、見て。」
処置室に下げられているモニターにノコギリで男とセックスしながら尻から切断される動画が写った。
「この女、前にココで働いていた看護師。病院から金を盗んだから売っちゃった。アナタも嫌なら売るけど…イイ？」

「ジェーン、スマホ。」
血の涙を流し泡を吹く女の顔を見てサナエは怖く成った。
「いっ！」
サナエの大陰唇に注射針が刺さり局所麻酔がされた。
「ゴトリ」
サナエの顔の横に見たこともない器具が置かれた。

新たなナース、サナエと人工ペニス

「ジュジュジュジュ…ジジ…ジジ」
「ハグッ…グクッ…」
「パン！これぐらい我慢しなさい。アナタのマ○コ、ガバガバで中はツルツルなんだから…普通に手術すれば数百万はかかるのよ！」
「で…でも…もう少し…麻酔…ヒギッ」
「アナタ、看護師、何年？膣の神経を傷つけたらアソコが使いものにならないでしょ！」
「はい！咥えときな！」
「ジュ…ジュ…」
「ホントによくここ迄、拡がったわね。外人相手だけではここ迄、拡がったりしないわよね。拡張でもされた。」
サナエがコクリと頷く。
「病院じゃ無いわね。」
「調教師って言われる縄師みたいな人に最初は指で左右に引っ張られて拳大のディルドを毎日、ハメてました。」
「でしょうね。膣内の神経が馬鹿に成っているし筋肉も切れているわ。デカチンの外国人の一部は喜ぶけど…ブカブカだわ。」
サナエはアソコをボロクソに言われしょげていた。
「まぁ、見てなさい。アソコから胸、顔も全て綺麗にしてあげるから…その代わり…裏切ったら…売るから…殺人ＳＭに出演してアソコに槍でも突っ込まれたらいいわ」
「アッ！」
膣と肛門の間、会陰に鈍い痛さが走った。
肛門も犯され脱肛気味に成っている。
普通に手術としてするなら数百万以上はかかるオペをしている。

「ジェーン、顔と胸も終わらせるから全身麻酔をかけて。ノッて来たから今夜に終わらすわ。」
ジェーンがサナエの口にマスクを被せるとサナエは眠りに入った。
…先生、最初から麻酔をしてアソコの手術もすれば良いのに、凄いサドっ気だわ…
先にサナエの胸から取り掛かる。
乳房の横にメスで切れ込みを入れてシリコンパックを挿入して形を固定し、シリコンパックに注射器でシリコンを注入しDの胸をF迄膨らませた。
顔の前に太腿、下腹の脂肪吸引を終わらせ顔に取り掛かる。
顔のエラ下にメスを入れて顔の皮を浮かせて骨を特殊工具で削る。
特殊人工骨を塗りエラが張った顔の輪郭を変えた。
鼻はシリコンで数センチ高くして、眼は二重にし、唇は厚めに変えた。
裏組織に売られて外国人専用風俗、人身売買組織なら最初の裏組織に見つかれば又、売られる可能性が有る。
又、サムライビデオや人身売買組織に転売するときも顔の容姿で値段は変わる。
全ての手術が終わったのは朝に成っていた。
「ジェーン、アタシはシャワーを浴びて少しねるわ。アナタも小便用のカテーテルを着けてから仮眠しなさい。今日は予約が少ないから…」
「わかりました先生。」
女医は手術室を出てシャワールームに入って行った。
「ビリ！」
ジェーンはカテーテルの袋を破り中からゴム製のカテーテルを抜き尖端をサナエの尿道に差し込み、膀胱に到達すると注射器で空気を入れてカテーテルを固定させた。
サナエの身体には何本も点滴の管が繋がれミイラのように包帯を巻

かれていた。
サナエをストレッチャーに載せ2階に有る個室に運ぶと女医が声をかけてきた。
「ジェーン、アナタも休みなさい。」
真っ赤なガウンの襟から豊満な乳房が見える。
「はい先生。私もシャワーを浴びて仮眠します。」
ジェーンはシャワールームに行き全裸になるとシャワーを浴び出した。
軍隊で鍛えた筋肉を今もスポーツジムで鍛え維持している。
背中には捕虜に成った時に受けたムチの跡が背中から尻にかけてまだ残っている。
ジェーンが仮眠室のベッドに入った時には通学する子供達の声が微かに聴こえていた。
「ブブ…ブブ…ブブ」
女医のベッドのサイドテーブルに置いてあるスマホのバイブが響き、女医は目覚めた。
外は薄暗く成っていたので夕方には成っているのだろうとユックリと気怠そうにスマホを掴みボタンを押しスピーカーにした。
「先生！大変な事が起こりました。ペニスの復元手術は出来ますか？」
声からミスター傘下の芸能事務所の男と分かった。
「切断状況にもよるけど…どうしたの…」
「ウチのナオの元いたグループの娘が相手のペニスを切断したんです。」
「はぁ？あの時、全員に膣縮小手術をしたわよ。で、言ったわよね。セックスは禁止って！あのギロチンだったら切断よりバラバラよ！とりあえず行くわ。場所はメールで送って」
スグにジェーンに電話を女医はかけた。
「あ！ジェーン、寝ていた？緊急だけど簡易キットを準備していて。ソレと手術室と！」

女医はスグに起き上がると下着を着けてタンクトップを着けるとその上にシャツとパンツを履いた状態で革のジャンパーを羽織りジェーンから、簡易キットを受け取るとクリニック駐車場に有るバイクのシートに付いているボックスに簡易キットを入れバイクに跨った。
スマホに送られて来た場所は都心の高級ホテルだった。
都心の高級ホテルまではバイクだと２０分で着く。
住宅街を抜け高速に乗りバイクを走らせる。夕方の渋滞前で比較的早くにホテルに着いた。
入口に芸能事務所の黒スーツの男とゴツい体躯の男がいる。
胸のバッチでＳＰとスグに分かった。
「先生！コチラです！」
女医は芸能事務所の男とスグにエレベーターに乗り込み最上階のスィートルームに上がった。
フワフワとした廊下の絨毯がホテルが高級で有ろう事を物語る。
所々に間接照明がありホテルの部屋のドアとドアの間隔は長い。
「先生！こちらです。」
慌てた顔の芸能事務所の責任者がドアから顔を覗かせている。
ベッドの上には下半身をタオルで押さえた三十代の男と股からは血が滴る女がいた。
「ちょっと見せて！」
男のペニスは根元から切断されている。
スグに簡易キットから止血剤が入ったクリームを無くなったペニスの切断面に塗りガーゼで押さえた。
「彼、アタシのクリニックにスグに運んで！」
「先生…ここでは無理ですか…」
「簡易キットでペニス切断を治せるわけ無いじゃない。この男もワケアリなんでしょ！早く運ばないと失血死するわよ」
ホテルの授業員が用意したストレッチャーに男を乗せタオルを被せてから事務所の黒スーツとボディガードが部屋から出ていった。
「アンタも行くのよ！アソコにペニスが残っているでしょ！」

女医は少し苛立ちながら言った。
「社長！この子もアタシのクリニックに連れて来て！アタシはバイクだから先にクリニックに戻るから！」
「ミスターには…」
「あなたの管理不十分でしょ！アナタから連絡をして！」
ホテル最上階の廊下を早歩きしてエレベーターに乗り込んだ時に同乗者が女医の手を見て驚いていた。
手は真っ赤に成っている。
先に乗っていた男女はエレベーターから降りた。
…コレを見たら普通はヒクわね…
一階に降りて女子トイレで急いで手を洗い流すと胸ポケットに有るハンカチで手を拭き駐車場に向かった。
女医が乗って来たバイクに跨り、スピードメーター横のボタンを押すと赤色塔が後部座席から現れた。
赤色灯の下には赤十字のマークが付いている。
「ウー」
赤色灯が周り出すと同時にサイレンも鳴り出す構造に改良している。
辺りはもう真っ暗になり高速で渋滞しているテールランプが綺麗に伸びている。
その横を赤色灯を廻しながら一台のバイクが走る。
女医のバイクの方が先にクリニックに着いた。
「ジェーン！緊急手術よ！ペニスの切断。手術室の準備、お願い！」
「あと…人工ペニスのストックは有った？」
「有るには…有りますが…明日、ペニス改造依頼のマダムの特殊ペニスですよ。」
「仕方ないからソレを使うわ。切断後、直ぐでないと人工ペニスも機能しないから」
「先生！お願いします」
「コチラに寝て下さい。」
病院に着いて安心したのかペニスを失くした男は担架の上で気絶し

た。
「ジェーン、急ぐわよ。」
手術室横の更衣室で上着を脱ぎシャツ、パンツを全て脱ぎ捨て手術着に着替えると手を洗い流し消毒すると手術室に入った。
手術台には男が横たわり、股間だけ開いたシートをかけ全身麻酔をかけられて仰向けに横たわっている。
股間には真っ赤なペニスの断面が消毒されていた。
「ジェーン、ありがとう…」
頭に着いたルーペを降ろして患部を除く。
尖端の小さなピンセットの先で切断面の白い神経、赤い海綿体、尿道口を触る。
「ジェーン、人工ペニスを持って来て。」
「先生、この大きさを着けるのですか?」
「仕方ないわ。黒人タイプ、３０センチ用。ロリコン好きには酷なペニスね。ヤリ●●には悦ばれるわ」
メスで切断面から下に肛門迄、ありのと渡りと呼ばれる場所を切開して体に残るペニスの根元を剥き出しにする。
人工ペニスには色々な管が付いている。
アメリカのバイオ研究所が試験的に作ったものなので外国人サイズしか無い。
綺麗にペニスの根元の海綿体を全て取り除き数本身体から出た小さな管に人工ペニスから出る管を全て小さな管、神経を縫い合わせる。
開発国でも数例の成功例しかなく、アメリカから取り寄せたのもマダムが買った美少年用に取り寄せた物だった。
人身売買の男と明らかな政治家の男、何方が金になるかは言わなくともわかる。
また、ミスターにも恩を売れるしペニスを切断した男も与党の若手の売出し中の議員であることはスグに分かった。
全て手術が終わったのは８時間後に成っていた。
手術室から出るとガウンを羽織り震えている少女がいた。

ナオの事件に巻き込まれ性器に暗殺器具を付けられた少女だ。
たしか…17?だったような…
「先生…」
「あ、ガウンを開いて股を少し開いて。立ったままでいいから。」
薄い陰毛が生える土手よこの脚の付け根を女医が押すと恥骨横にボタン状の物が指の先に当たる。
「カチ」
女医がボタンを押すと…
「ボト…ボト…ボト…ボト…ボト」
肉片に成ったペニスの残骸が少女の股から床におちた。
「ヒャァー」
ガクリと膝が崩れ少女は失神した。
「社長、ミスターには連絡をした?」
「はい…先生にかけ直して欲しいと…」
「わかったわ。電話、貸して」
「はい…はい…そうですね…野放しにしたらミスターにも隠せないですよ…はい…来週なら…5人分の人工女性器を輸入しておきます。はい…秘密の売春クラブなら性器が人工でも悦ばれでしょう。はい。」
「社長、ミスターから…」
電話を社長に渡し手術室に入るとジェーンが後処理をしていた。
「ごめんねジェーン。また、朝だね。アタシが後を見るから貴女は仮眠して。来週は毎日、手術だから…今日のサナエが戦力になると少しは楽になるからね…」
「わかりました先生。」
ジェーンは手術室から出て更衣室に入り全裸になるとシャワールームに入った。
「シャ〜」
お湯が身体にかかると体中に疲れと眠気が遅いシャワールームからスグに出て身体を拭き、全裸にガウンを羽織ると更衣室から出た。

廊下では倒れた少女と電話をしながら青ざめた顔の男が電話をしながら頭を下げていた。
…アタシには関係ないか…
ジェーンは廊下の先のエレベーターに入り寝室の有る４階のボタンを押した。

クランの災難　人工ペニス試運転

「キュイン！キーン！」
手術室に場違いな金属を切る音が木霊する。
やっと最後の一人を今日、手術して性器に仕込まれた対暗殺用ペニス切断器を全て外す手術をしている。
巧妙に性器に設置されていて廻りの神経を傷つけ無い為には女性器自体を機械諸共、取り除かないといけない。
人気絶頂のアイドルグループを解散させての手術。
先日のようなペニス切断事件が何件も起こればミスターの存在、政治家との癒着、そして自分のような裏の医師の存在が世間にバレる。
ネット時代には致命的になる。
昔の記者が嗅ぎ取り動くなら記者だけを消せば良いがネットで拡散されると都市伝説が本当の話になる。
今日、手術しているのはミキ。
先日、代議士のペニスを切断した子だ。
乳房に数カ所、ヤケドの跡がある。
芸能事務所の人間に聞いた話だとメンバーのリンチにあったらしい。
「まぁ他のメンバーからしたらとばっちりもいいとこね。」
「ジェーン、ユックリとギロチンの左右の突起を持って持ち上げて」
少女の下腹から銀色の光を放つ筒状のものが出て来る。
女医が膣口付近をメスで丁寧に削ぎ落とす。
外性器は残るがクリトリスに触っても、肉ビラに触れても舐められても感覚は無い。
天才的な手術の腕を持つ女医にも神経を一切、傷つけないでギロチンを取り除くのは無理。
人工性器を付け普通に歩ける迄で良いとミスターから言われている。
何とか膣周辺の神経は無理だったが肛門の筋肉と神経は機能する。

彼女達はコレからの一生を組織が管理する南の島に有る売買宿で過ごす事になる。
昨日迄、スポットライトを浴びて踊っていた少女達が来週からは南の島に行く。
事務所の損害は計り知れない。
一人のセックスがグループの将来を変えた。
言う事を聞きセックス断ちをすれば彼女達は性器に暗殺器を埋め込んだままでもアイドル活動が、終わり組織の庇護の元、活動が出来ていた。
ソレを思えば他のメンバーがリンチをするのは当然か…と考えた。
しかしコレだけの器械を埋め込んむには自分以上の手術の手腕がいる。
他のアルファベットのメンバーがしたのかと、ふと思った。
「彼女達は南の島で売春するだけですか？」
「組織の管理する島で食事にセックスだけなら天国じゃないの。あの島には、裏オプションが有り殺す以外は女の子や男の子に好きな事が出来るの。ハードＳＭマニアも集うし猟奇趣味な男女が集まるわよ。彼女達には、もう予約が集まってるわ。三ヶ月後には彼女達の身体の一部は欠けているけどね。」
「何故ですか？」
「ご贔屓客に黒百合姉妹ってレズビアンがいるのよ。前はレズビアンパーティをするからと女の子を十人、予約してパーティが終わり組織の人間が入ると、全員の乳首とクリトリスが切り取られて女の子達は気絶していたの…
姉妹は平然とテーブルに座ってパンとアイスティーを飲んでいたの…パンは普通のロールパンが出されるんだけどパンに干しブドウがみえたんで組織の人間が聞いたら女の子達から切り取った乳首を入れて自分達でパンを作り食べてたの。アイスティーに入っているタピオカ状のモノはクリトリス。
」

「組織は注意しないのですか？」
「3億円、払ったと聞いたけど…その金を借金返済に廻し彼女達は島から開放。彼女達に聞かないと組織も勝手に出来ないわ。あの島を抜けるには身体を売るしかないの…」
「彼女達もそうなると…」
「そうね…組織にも今回の件は落ち度が有るから乳首を売れば開放されるんじゃない？乳首と性器の性感帯は無くなるけどね…」
「まだ若いんですか？」
「見た目は未成年のゴスロリファッションに幼女体型。でも、小さな成人もいるから整形も若返り手術があるから分からないわ。」
「何故…その…女性の乳首やクリを…」
「あ！彼女達、ドラキュラ信仰者なの…中世の女王が若い女性の生き血を飲んだり、風呂に浸かったり…あれと同じ…女性の性のシンボルを身体に取り入れる事で若返りを信じているの…世界には猟奇異常者は何人もいるわ。男女、問わず。まぁ、その恩恵で私達が儲かるけどね…」
「ジェーン、跡の処理はお願い。コレから代議士の所に行くわ。明日の女の子は？」
「芸能事務所のツテでセクシー女優のクランって娘を呼んでます。ロリコンビデオ中心で作品を撮っているから大丈夫かと…後、黒人とのセックス経験も有ると…」
「まぁ…仕方ないか…サナエのアソコも小さくしたからね…じゃあ病室に行くわ。」
「コンコン！先生、良いですか？回診です。」
特別室に横たわる代議士の男に女医は声をかける。
「先生、前を開けてペニスを見せて下さい。」
横になったまま、代議士は下半身のパンツをずらしペニスを出した。
「排尿は出来ますか？」
「はい…」
女医が人工ペニスに触る。

「感じますか？」
「まぁ…感じます…」
「オナニー、しましたか？」
「はい…先生、サイズはコレしか無かったのですか？」
「先生、アメリカ製のモノです。このサイズはＬですが…Ｓの輸入を待っていたら先生のコレは元には戻りません。一生、サオナシです。」
デロンと横たわるＬサイズの人工ペニスに女医は顔を近付け真赤に塗った唇から伸びた舌が人工ペニスのカリクビをペロッと舐めた。
「あっ…」
若い代議士は顔をしかめた。
人工ペニスが少し鎌首を持ち上げた。
「明日、先生の性の相手が来ますからセックスをして下さい。」
「誰が来るんですか？」
「セクシー女優のクランってご存じですか？彼女に相手をして貰います。」
「クランですか！」
一瞬、声が上ずった。
「ご存じですか？先生。なんか…ロリ爆乳で売り出し中の娘で…好みの娘なら存分にセックスをして下さい。」
「先生…その…行為は先生に観られるのですか？」
「ん…見ないと医学的に人工ペニスが身体に馴染んでいるのかの実証実験ですからね。あ…気にしないで下さい。映像としては見ませんよ。赤外線と低レベルレントゲンですから白黒の影が絡むのと赤い人形が絡む映像ですから。アメリカの製造会社に提出する契約なので…」
「では…明日に…」
女医が外に出ようとすると…
「あの…彼女はどうなりました？」
「あぁ…先生のペニスを切断した子ね…彼女は５千万の借金と芸能

事務所の借金の計一億を背負い南の島で生きたセックスドールです。」

「い…一億の借金ですか！」

「ええ、先生の人工ペニスと手術代も入っています。当然ですよね…先生のペニスを輪切りにしたんですから…」

「はぁ…」

女医は芸能事務所の人間から拒むアイドルの子を襲った事も聞いている。

敢えてどんな反応をするか見ている。

「あ…彼女、人工性器に変えましたから先生の専属性処理にします？詫び代で5千万にプライスダウンしますけど…」

「いや…」

女医はワザと代議士の男に言ってみた。

ギロチンをした少女は禁止されてるから、拒んだらしい。

ソレを押し倒し無理に挿入して自分のペニス切断に至っている。

確かに少女を診察した時に狭くしている場所が切れていた。

代議士でなければ、芸能事務所の会長のミスターも女医には言わない。

セックス映像と芸能事務所少女からの証言と女医が書いた診断書で代議士生命は終わらせるられる。

代議士はミスターの意のままに動く政治家の一人となるだろう。

翌日、セクシー女優のクランがマネージャーと共にクリニックを訪れた。

「ねぇ整形しろって言うんじゃ無いわよね。」

「違います。撮影です。有る男の方とセックスをして貰います。」

「え～言ったよね！枕はしないと！」

「本日、1日のギャラは5百です。」

「え！そんなに！」

二重の手術をして眼を大きくしたクランの目がより大きく見開いた。

昔は単体女優として売り出したが、今ではＳＭモノや黒人俳優との

絡みがメインとなっている。
「ビー！」
「ガチャ！はい」
「今日の撮影の女優を連れて来ました。」
「わかりました。鍵を開けます。お入りください」
クリニック駐車場横には鉄製の入口が有り駐車場シャッターは普段はしまっている。
来客者は普段は第2駐車場に車を停め正面玄関よりクリニックに入る。
裏口はシャッターで閉まり女医の特殊オートバイ、クリニック用救急隊、真っ赤なスポーツタイプの女医の車を停めている。
普通のサラリーマン風のマネージャーとゴスロリタイプの服にピンクの髪、タレ気味な2重の大きな目に少しダンゴの鼻。
タプッとした肉感の唇をした幼さが残る少女がマネージャーの後を付いて歩いて玄関ドアに入る。
「うぁ！フェラーリ！スゲェ！」
女医の車を見て驚いている。
「いらっしゃいませ」
自動ドアが開くと長身の女性がたっている。
上下、ナース服に包まれているが胸と尻の大きさは十分にナース服の上からでもわかる。
栗色のショートカットにハーフ特有の彫りのある顔。
普通にモデルでも出来るジェーンを二人は見惚れている。
「先に性病検査証を提出して下さい。スグにドクターが来ますからそちらのソファでお待ち下さい。」
「こんにちは。今日は宜しくね。そちらのお嬢さんが女優さんかしら…性病検査は見たわ。後はこの誓約書を読んでサインを頂戴ね。マネージャーさん？〇〇芸能の社長が宜しくと言っていたわ。」
「あの…この…秘密厳守って…。」
「あ、それは今日の相手の方の身分や身体の事は秘密と言う事。」

「秘密の破棄は違約金1億と有りますが…」
「ギャラの十倍だけど…秘密を守れば良い事よ…どうする？
辞める？」
「やります」
マネージャーと女優クランが連名で誓約書に署名した。
「契約成立ね。ジェーン、彼女を男優さんの所に案内をして…」
「コチラです。付いてきてください」
「はい…」
クランはジェーンの後を付いて行った。
「マネージャーさんはどうします？明日の朝までの拘束ですから彼女は撮影が終わったらウチのスタッフに自宅に送り届けます。」
「分かりました。お願いします。」
そう言うとソファから立ち上がりマネージャーの男は帰った。
「シャー…バシャバシャバシャ…」
…何よ、一回の契約一千万、私には２００しか入らないのよ、あの事務所取り過ぎだわ。事務所、替えようかなぁ…
憮然としながらクランは頭を洗い流すとボディソープで全身を洗い出した。
特にアソコは集中して念入りに洗い流した。
クランはロリコンで売っているので下の陰毛は全て永久脱毛をしている。
縦のスジのアソコは前から見れば赤褐色のビラが少しとびだしている。
セクシー女優になっての経験人数を物語っている。
髪を乾かし、身体を拭くと脱衣所の籠にはスケスケのベビードールが置いてある。
着ても着なくても同じ裸にガーゼを纏った姿にクランは全裸より恥ずかしくなった。
「シャワールームの右のドアを入って。相手の方がお待ちです。」
シャワールームの天井に付けられたスピーカーから声がする。

言われた通りに右のドアを開けて中に入ると、眼の辺りにマスクをした男がベッドの上で横になっていた。
「あ！アジア系なんだ…日本人かな？」
スッと部屋の照明が暗くなる。
ベッドの周囲だけわかる明るさはある。
クランは自分から男に唇を合わせて行った。
「アムッ、アハッ」
ペチャクチャと舌を絡めそのまま唇を首、胸、乳首を舐めながら男の股間に手を伸ばす。
「！なに？凄い大きい！」
過去に経験したアメリカ一番のペニスの持ち主の黒人男優と同じ大きさが有る。
「え！」
クランは男のブリーフを下げた。
「パチッ」
男のペニスがクランの顔を叩く。
「うぁ…入るかな…」
以前、黒人男優とした後は3日は股間に何かが挟まった感じが取れず膣が傷んだ。
…お金の為…
長さ３０センチのロング缶の先を割れ目に当て腰を降ろした。
「ん…いったぁ…あ、あ、あ…」
半分殆ど入ったところで男がクランの腰を持ち自分のペニスに近づけた。
「あっ…いた…さける…」
男は構わず腰を振り出した。
「アギャ！サケル！」
快感が無くなりクランの股間には激痛しか無い。
「ああ…イヤ…お金…要らないから辞めて…」
膣が裂けて人工ペニスに血が滴っていた。

人工ペニスの実力と残虐性

「ギイ…グェ…」
「ハァハァハァハァハァハァハァ」
ギシギシとベッドが揺れる。
クランは涙を流しながら体から力が抜け気を失いダランと頭を振っている。
「はぁ〜」
男が急に力尽きたかのように後に倒れた。
「ジェーン！スグにベッドに行って脈をとって。」
ジェーンが特殊撮影室に入ると男の顔が青い。
「ウッ何て大きさ！」
クランの膣は裂けて太い人工ペニスが脈打っている。
男の首に手を当て脈を取ると脈が弱い。
「ジェーン、結合部位の動画を撮影して。スグにアタシも行くわ。」
「ガチャ」
女医が男の身体を引っ張りクランと引き離した。
脈を打っているペニスをメジャーで測る。
全長３２センチ、直径亀頭部１１、他は１０。
２リットルペットボトルサイズは有る。
人工ペニスの上部に有るペニスの付け根を触りヘコんだ場所を押すと怒張したペニスは萎んでいき男の顔に赤みがさしてきた。
「ジェーン、止血は出来そう？出来たら彼女を手術室に運んで、緊急手術しないと膣周辺筋肉と神経が損傷してるわ。」
膣が拡がった穴にガーゼを詰め込み、腕に輸血をしながらストレッチャーに乗せてジェーンはクランを部屋から出した。
ストレッチャーは音を立てながら廊下を進み手術室の自動ドアが開いたと同時に入って行った。

スグにクランに全身麻酔が施され手術が始まった。
「ベチ！ベチャ！」
真っ赤な血を吸い込んだガーゼが何枚もクランのポッカリと開いた穴から取り出される。
銀のトレーは血の滴るガーゼで一杯になった。
先に女医は膣の下、肛門側から再建する手術に取り掛かる。
膣と肛門の間の数センチしかない場所が裂けて膣側から肛門壁が見える。
先に縫い合わせないと肛門周辺や直腸の雑菌が傷口に入れば肛門は人工肛門にしないといけない。
傷口と肛門壁内を洗い流すと特製の止血剤を傷口に塗り傷口に見える神経を極小の針で縫い合わせる。
８時間掛かり膣、肛門の再建手術は終わった。
「はぁ…ジェーン、代議士先生は？」
「まだ眠ってます」
「あの人工ペニスはマダムが自分の飼い猫の処刑用に購入だからアソコに入れてピストンするとこうなるのよ。話をして生体間性器移植で普通のペニスに戻すわ」
女医は手術室から出るとマスク、手術衣等を脱ぎ、手術室横のシャワールームで身体を洗い全裸にガウンを羽織っただけの姿で若い代議士の部屋に入った。
代議士の男は大の字になりイビキをかいている。
首の脈を取り健康状態を確認して男の身体を揺さぶる。
中々、起きない。
手に在る激痛のツボを女医は押した。
「アデッ！」
「先生、起きました？」
黒いショートヘアに細い眉と二重の切れ長い眼。鼻筋が通った鼻と真っ赤な肉感的な唇が男の顔の前に有る。
ガウンの胸元からは大きな胸が見える。

「アッ…」
男のペニスが反応して次第に大きく成りだす。
「クリニック院長のタンです。」
「はぁ…」
「先生、ペニスはどうですか?」
「最高だよ!女が涙を流しながら辞めてと叫ぶんだよ!初めての事だよ!」
「先生、気に入ったんですか?」
「気にいったね!最高だよ!」
「では、相手をする女性は先生が探すと…」
「え!コチラで探してくれるんじゃ…」
「ウチは斡旋はしてません。彼女は芸能事務所からの紹介です。彼女のアソコは裂けて8時間の手術をしました。芸能事務所に連絡をしたら今回は休業補償、手術代は芸能事務所が負担するとの事です。」
「毎回、1億のお金を払えますか?無理ですよね。今週中にペニスの取替え手術を行います。」
男はしょんぼりと肩を落としているがセックスの度に1億の金は払えない。
「明日、手術をしますから今日は絶食して下さい。」
翌日、大きめの帽子にサングラス姿の小太りな中年女性とプロレスラーのような巨体の男、スーツ姿のボディガードが二人、女医のクリニックを訪れた。
「マダム、御足労ありがとうございます。今日はこの方に人工ペニスを…」
「そうよ。映像、見たわよ。あれだけの大きさなら良い御仕置用になるわ。」
「ジェーン、彼を性病検査とシャワールームを案内して手術室に…」
「マダム、助かりました。あの人工ペニスが無かったら代議士先生のペニスは無くなるところでした。」

「ミスターに言われたら仕方ないわ。あの元アイドル達、人気よ。でも来週にはどうなるか…」
「例の姉妹ですか？」
「５人全員、購入よ。解放される金額で自分の身体を売るのはあの娘達の交渉だけどね…。で、人工ペニスの付け替えは何時間かかるの？」
「手術自体は６時間位で入院が２週間です。射精は求めないのですね？」
「あの男は生殖機能より拷問機能のみの男よ。ザ～〇〇より濃硫酸が出るようにして欲しいわ。」
「マダム、濃硫酸は人工ペニスも溶けます。では、２週間後に…」
「頼んだわよ」
「はい、お気をつけて…」
マダムはクリニックの裏口からボディガードを連れて帰って行った。
マダムと呼ばれる中年女性が南の島に有る売春島を管理している。
島には男娼、娼婦、奴隷等を百人規模で住ませている。
表向きはダイビング目的のリゾート地だが裏は性産業と裏カジノで儲けている。
年に数人、逃げ出そうとする男娼、娼婦がいる為、処刑人が男は性器切断、女性化させて安く売り、女は女性器破壊でワンコイン売春に廻す。
歯は自害防止と客の陰部を噛まない為に全てを硬化ゴムに変えられ性器は人工性器を埋め込む。
動くラブドールのような物になる。
「さて…手術をするか…」
女医は独り言を言いながら手術室横のシャワールームに入って行った。
代議士の男とレスラーの男が並んで手術室に横たわっている。
先にレスラー風の男から性器を取り出す手術をするために足を折り睾丸下の蟻のと渡りにある海綿組織からメスを入れて行った。

褐色に成った皮膚にメスが入り赤い血が流れ出る。
ペニスのサイズは17センチぐらい、平均のサイズより少し大きめ。
股から陰嚢を避けて切り左右からペニス上部に切れ目を入れて慎重に身体からペニスを剥がす。
人工ペニスは皮膚との接続部は殆どが特殊ボンドでしている。
特殊な剥離剤で皮膚と剥がし人工ペニスに接続している神経、海綿体、血管と切り離す。
30センチの人工ペニスは代議士の身体から外れた。
体力的にレスラーから外れたペニスを代議士に付けて行く。
細かい作業が数時間過ぎ、レスラーに人工ペニスを付けて手術は終わった。
二人を二階にある病室に運ばなければならない。
代議士を乗せたストレッチャーを押して廊下に出ると黒服が廊下の椅子に座っていた。
「マダムに言われ手術終了迄、待っていました。」
…マダムは細かいところに気が利く。
「ありがとう。彼を運ぶのを手伝って。女の体力じゃあの体重はキツイわ。」
二人を病室に運びペニスの交換手術は終わった。
「はぁー。貴方もありがとう。彼、2週間で勃起、性交渉実験をするからとマダムに伝えて。処刑したい女を寄こすと思うから。」
「ジェーン、後片付けは簡単で良いから、休みなさい。アタシは寝るわ…」
2週間後にマダムから連絡が有り部下に女を1人、送らせたから人工ペニスの実験に使うように言われ撮影室の準備をしているとサナエがノックして部屋に入ってきた。
「先生、マダムの部下の方がお付きになりました。」
「あ、そう!サナエ、顔の筋肉はどう?引きつる?後、アソコは?大丈夫そう?」
「はい、アソコに痛みは有りません。顔は笑ったらまだ…」

「そう、時間が経過したら引きつりは取れるわ」
代議士の性の相手は治療経過も兼ねてサナエに3日前にセックスをして貰い代議士も交換したペニスから射精が出きたので昨日、退院していった。
一階に有る応接室にマダムの部下と若い女が座っている。
男はスーツをきているが若い女は首から下は布に穴を開けただけのポンチョのようなモノを被っできるだけだった。
「先生、コレが相手です。」
「わかったわ。で、膣の治療はどうするの？裂けるのは確実よ。」
「マダムから人工性器に変えてくれと言われています。」
「裂傷は手術でなおるけど…いいの？」
「はい、絶命したらしたで先生に遺体処理を任せると言われています。」
「わかったわ。じゃあ来て。」
「ジャラン…」
マントで隠れていたが鎖で繋がれている。首輪は見えない。
一階に有る映像室の横に有るシャワールームに女を入れ部下の男はマントを女から剥がした。
「え？」
ジェーンが驚く。
鎖の先は首輪では無く女の鎖骨にボディピアスのように繋がり小さな南京錠が鎖を留めている。
「ホラ！」男はペットに水を浴びせるように女にシャワーの水をかける。
「股はちゃんと洗えよ！」
バスタオルで雑に拭き南京錠を外してジェーンに渡す。
普通には扱わない。
「じゃあ来て。」
女は一切、喋らないし返事もしない。
尻には丸いヤケド跡が数個、有る。

映像室に女を入れると人工ペニスに付け替えたレスラー体型の男が準備万端にペニスを直立させて座っている。
「コレからセックスして貰うけど映像として残すから…」
「先生、マイクを良いですか？」
「おい、ウルフ！マダムからだ。全ての機能を試せとのことだ…頼むぞ」
…全ての機能？勃起するだけじゃ無いの？…
ウルフと呼ばれた男が女を引き寄せるとペニスの根元のボタンを押した。
「ブィ～ン…」
３０センチは有ったペニスが萎みサイズが１７センチに変化した。
普通に女の股間の割れ目にペニスを押し当てると腰に手をやり自分のペニスに突き刺した。
「あっ…」
普通に腰をグラインドさせる。
「あっあっあっ…」
普通にセックスをしている光景。
男がペニス根元を、触る。
「ハギャー！」
「え？何？」
尋常ない叫びが映像室に響く。
「アギャ！アギャ！アギャ！」
「どうなっているの？」
女医は素直にマダムの部下に聞く。
「あ～先生、全て機能は知らないんですね。今はペニスの先端、尿道横の穴からニードルが飛び出し女の子宮を串刺しにしています。」
人工ペニスを伝わり女の血が流れ出す。
「はぐっ！」
ピストンを辞めて止まった男女の結合部分から白い煙が立ち昇る。
「あれは亀頭部が発熱して中を焼いてます」

ペニスの付け根をウルフがいじる。
「ギュウィー」
「ゴゴ…ウゴ…」
人工ペニスの膨張が始まった。
「イギ…イビ…」
「ミチミチ…ビチ…」
半径１０センチを超えまだ太くなる。
「アギャ！」
膣が肛門と一つになる。
「最後の締めじゃ！」
最大級に勃起したペニスが少し縮むと魔羅を刺した女の腰を持ち上下に動かした。
「ギャー！」
動かす度に膣から鮮血が噴き出す。
女の意識が無くなり身体の力を抜きダラリと腰を掴まれた腕を起点に上半身裸前方にガクリと折れ口からは泡を吹き、眼からは血の涙を流して白い眼を薄っすらとあけている。
「ウリャ」
ウルフが女からペニスを抜きベッドに放り投げる。
股からはおびただしい血が流れ出す。
「ちょっと…死んだんじゃない？」
女医が女を診察した。
脈は触れるが弱い。
股間の割れ目に眼をやると膣癖が削れている。
「え？」
ウルフと言われる男のペニスを見ると小さな突起がペニス全体に有る。
膣に丸いヤスリを入れて小さな壁を削った状態になり奥の子宮は穴が無数に空き普通ならピンクの子宮が白く変色している。
「マダムも凄いモノを作らせるわね。確かに女としての機能は無く

なるわ。で、どうするの死にかけだけど蘇生して人工性器にかえる？」

「先生、とりあえずは治療してくれ、マダムから言われている。」

「ジェーン、スグに手術室に運んで！サナエも手術室に入って！」

…助けてもこの娘の人生は地獄だけど、しかたないわね…

女医も急ぎ手術室に向かった。

ウルフは愛おしげに人工ペニスを拡大したりしてベッドでたのしんでいる。

黒百合姉妹。クリトリスを狩る姉妹

「シャキン！」
「アグッグッ…」
「まだ1個よ！後、左とクリだからね…猿轡外す？」
コクっと女は頭を下げた。
「お姉様、叫び過ぎて自分の舌を噛まない？」
「でもリリカ、叫び声、聞きたくない？」
「そうよね！リリ。外しなさい。」
乳首を切られているのは女医Tが性器に埋もれた殺人器具を取り出し人工性器に変えた元アイドルグループの女達だ。
一月、島にいて待遇の悪さから乳首とクリトリスを売り島から出る交渉をしてリリ、リリカの黒百合姉妹に痛ぶられている。
４人分では足りない金額は代議士のペニスを切断した最年少メンバーが全て被る。
彼女は自分の身体を売った。
島での身体を売る意味は命を売る事。
他のメンバーからリンチを島でも受け組織に自分の身体を売る事を承諾した。
メンバー最年長でリーダーのアヤから乳首の切断が始まっている。
真っ裸になり口には猿轡をされていたが今は外されている。
手脚の固定も無い。自分の意思で手脚を伸ばし苦痛に耐えている。
「ガンバったねぇ。次は頑張れるかな？」
「ヒャイ！冷たい！」
リリが氷をクリに押し付け氷でクリトリスをコロコロと転がす。
キュンと小さくなり固くクリは勃起する。
先が平らになったハサミのようなモノでクリをはさみリリは引っ張る。

「ああ…いやん…痛い…」
「リリカ、クリの廻りを切り込みを入れて！」
リリカが小型のメスで器用にクリトリス廻りを切る。
クリの付け根に血が滲む。
「リリカ、引っ張るわよ！手伝って！」
小さな手が二本、クリトリスを挟んでいる器具に添えられる。
「せーの！」
「ビチ…ビチ…ビチビチ…」
「アギャーアガー！」
クリトリスが細い神経を伸ばしながら身体から離れる。
「アギ～」
ズルズルズルっと赤い血と白い神経等のヒモが恥骨下から伸びる。
「ブッツ！」
「この瞬間が好きだわ。この切れる音、興奮するわ。」
ガクガクガク…
クリトリスを抜き取られた女は気絶しながら痙攣をしている。
他の４人も部屋の隅に身体を寄せ合いリーダーの女の惨劇を見て震えている。
クリトリスが抜き取られた穴を特殊止血剤入りの絆創膏を貼り一人目の作業が終わる。
リリは抜き取ったクリトリスを薬品の満たされた容器に入れる。
容器に入れられたクリトリスはユックリと底に落ちてゆく。
同じように乳首も薬品が満たされた容器に入れる。
真っ赤な干しブドウが底に2粒、落ちてゆく。
「次は誰かな？う～ん…ソコの巨乳！牛！お前だよ！」
グループ1、胸の大きなメンバーが震えている。
「イヤ…売るの辞めます！」
「はぁ…ウザイ…お前等が売るって契約したからこの島迄、ヨーロッパから来たんだぜ！オイ！違約金と旅費交通費とで1億払えよ！リリカ、主催者に連絡をして！」

「うぇ…えぐっ…」
全メバーがすすり泣いている。
先に乳首、クリトリスを取られたリーダーはグッタリと横たわり動かない。
「コン！コン！」
「どうかされましたか？リリさま。」
「こいつ等、今になって嫌だと…私達、こまるんですけど！」
リリが組織の人間に声を荒げる。
「嫌だと言っているのは？」
「この乳女！」
「分かりました。」
ツカツカと胸の大きなメンバーに近付き笑いながら乳首の先端を指で持ち上げると腰に隠し持っていた鎌のような歯の付いた刃物で下から上に乳房をすくい上げるように持ち上げると…
「サクッ」
「ギヒッ！」
風船のように乳首を起点に乳房が男の指先で左右に揺れている。
「リリさま、コレでいいですか？後は残りの乳房、クリトリスは私達で切り取りますが？」
「見事だね。そのナイフさばき。アタシたちが嫌ならアンタに任せるよ。」
「アギャアギャアギャ…」
「やかましい！」
乳房を切断され床でもがくメンバーの腹に男の尖った皮靴の先がめり込む。
「がはぁ…ぐげ…」
胃を蹴られ内容物を吐きながら喘ぐ女の床にダラリと垂れて広がる乳房の根元を目掛けてナイフを下ろす。
「カン！」
「アギャー！」

「スミマセンね。普通はお客さまがする事ですが…級粗猫を噛むっていいますから…ウチで処理します。次はクリトリスで？」
「カスン！」
「グフッ」
鎌の先が脚の付け根、大陰唇よこに突き刺さる。
「シュー…シュー…」
性器を中心に廻りを切り取る。」
人工性器に指を入れて穴と土手部分を掴んで身体から性器を剥がす。
「がはぁ…」
「お客さま…コレでこの娘は御勘弁願います。」
床にダラリと置いた乳房二つと剥がした性器をリリカが一つずつ大き目の瓶にいれ特殊保存液を瓶に流し入れ蓋をする。
「オイ！医療班、臓器提供だ！早く特別室に来い！」
「オイ、お前達、一人は身体を売った。残りの人数で乳首とクリトリスを売れば島から開放する。大人しく取られろよ！まぁ、ウチは身体を売ってくれたほうが儲かるがな…」
「なに…はぁ…興醒め…残りのコ、そこに並んで…」
「ねぇ…この性器に付いている人工性器の縫合…Tじゃ無い？」
「あ！本当だ！この独特な縫合はTだわ！」
「この子達、何処から？」
「オイ！お前、ドコから売られたんだよ！」
「に…日本です…」
「やっぱり東洋系だから香港か日本と思ったんだよ…リリアの仇、コレで討てるよ」
「リリ、乳首を切って行って！アタシはクリを抜くから。」
横一列に並んだ元アイドル達を壁に付いてる首カセに固定して横に並べたままにして手は横のメンバー同士を手錠で手首、足首を壁に並べ固定した。
「リリ、乳首を落として、アタシは下を切るから」
「分かりましたわ、お姉様」

リリの手には裁ちばさみ大のハサミが握られている。
リリカは半円のカップが着いたシリンダーをクリトリスにカップを押し当てるとシリンダーの底を引っ張る。
「あっ…クリが引っ張られる。」
「いい！リリ。」
「何時でも！」
「せーの、ハイ」
「シャキン！シャキン！」
「アギャ！」
「サクッ」
「ハグッ」
流れ作業のようにリリ、リリカは、乳首とクリトリスを切断する。
「リリカ、一度、ヨーロッパに帰るわよ。」
「あ、終わったから…チェックアウトの準備をして…早くね」
リリは床に落ちた乳首を瓶に入れ、違う瓶にはクリトリスを入れた。
「アグッググ…」
壁に固定された女達は涙を流して痛みに耐えている。
「コン、コン」
「あ！入って。」
「おかえりですか？」
「そう！違う目的が出来たからスグに帰るわ。後の事は宜しく。支払いは請求を送っていて。」
「リリ、行くわよ」
「お姉様、着替えないの？」
「機内で出来るでしょ。早くヨーロッパに戻り準備をして日本よ！」
「アタシの乳首とクリが疼くわ…。リリアの仇も取らないとね」
バタバタと裸にベビードール風の少女達が部屋から出て行った。
姉妹の手にはジュラルミンに、入った5人分の乳首とクリトリスを入れて…。

売春島の組織の人間が壁に繋がれた４人の手脚の拘束を解く。
医務官が来て特殊止血薬を乳首とクリトリスの切断面に貼る。
「今日で解放です。貴女達は日本に帰れますが所属は元の芸能事務所です。全て事務所の指示で行動して下さい。とりあえず、私物が有るなら準備をして下さい。１時間後にプライベートジェットが東京に向けて飛びます。希望者は島で稼ぐ事も出来ます。ジェットに乗らない方は島で雇用とします。」
「乗ります！乗ります！」
全員が裸のままで自分の私物を取りに廊下に出ていく。
動き出したプライベートジェット内ではリリが瓶に入った乳首とクリトリスを眺めている。
「あの女の乳首とクリトリスはアタシが噛みちぎってやるわ。」
「アタシは子宮を掴み出してやる！」
リリ、リリカ、末のリリアはドクターＴと同じ組織で訓練を受けた。
最終試験でＴはリリ達、三姉妹と対戦した。
勝敗は相手の乳首とクリトリスを奪う事。
リリ達は三姉妹の三つ子。
身長はＴより２０センチも小さい。
ハンデとして１対３の戦いになった。
黒百合姉妹の得意分野は薬学。
二人がＴの脚を捕まえもう一人が顔に催眠薬を投げる作戦を取っていた。
合図と同時にリリア、リリがＴの脚にしがみつき作戦通りにリリカがＴの顔に睡眠薬の袋を投げた。
「バフンッ」
「ゴハァ！」
袋の薬を顔で受けたのはリリアだった。
「チキショウ！」
リリカがナイフを投げた。
「カハァ！」

ナイフはリリアの胸に刺さりバタバタともがいているリリアをリリカに投げつけるとリリの首に強烈な手刀を入れて気絶させた。
3人が目を覚ました時にはTの手の平には、3人分の乳首とクリトリスが入った袋を司祭に渡す所だった。
3人は救護員に運ばれたがリリアは胸のナイフと高濃度の睡眠薬で絶命していた。
一年間の留年を経て黒百合姉妹、ドクターLとしてヨーロッパに赴任した。
一年間は自分達で開発した筋肉増強剤を飲みながら全身に筋肉の鎧を付けTに復讐を誓い特殊訓練施設を出た。
筋肉の鎧の為に成長期に高くなる身長も小学生並で止まっている。
リリ、リリカで島で乳首。クリトリスを調達しても縫合が難しく出来るのは日本のT、南米のRとアメリカのBだけが神経と筋繊維の縫合では組織で上位だった。
アメリカのBは手術費が莫大に高い。
南米のRはイタズラ好きで乳首とクリトリスを反対に付けて喜びそう。
まともなのはTだが姉の仇と自分達の乳首とクリトリスを切り取った女には手術はして欲しくは無いが幾ら自分達で繋げても繋がらない。
「もう！アタシが電話する。金を払えばしてくれるでしょ。そして空きを付いてアノおんなを殺るのよ！」
「あ！日本支部に電話を繋げて…ヨーロッパのLよ。あ、Tに仕事を頼みたいんだけど…そう…。」
数分後、L達の元に電話がかかった。
「支部から言われたんだけど…仕事？それ、拷問？え？違うの移植手術？うん…アナタ達の乳首とクリトリスを元に…ん…まぁ、良いわ。手荷物を持って日本に来なさい。アタシが切ったからね…なおしてあげる。乳首とクリトリスはコチラで用意するから…カバンだけで来なさい。日程は日本支部に連絡を入れて調整して…あ、日本

は銃器の所持が厳しいからね。ナイフ、銃器は空港で捕まるわよ。」
「お姉様…悔しですわ…」
「アタシも…でも、リリアの仇を取るチャンスでもあるわ」
二人は日本支部に再度、連絡をして来週の頭に日本に行く事を話した。

「イッイギーッ！」
「はぁ…気が散るわ。リリ、もう気が済んだ？」
「い…良いわ…」
「じゃあ…寝なさい…」
「はいアンタも寝てね！」
猿轡をされ眼を見開きフーフーと鼻から息をする乳首を切断された女に麻酔を打つ。
「余り煩いと手術中は気が散るわ。」
乳首は入輪から切開をして乳首に延びる神経繊維、筋肉、乳腺と乳首に集まる全ての組織を乳房から切り取る。
左右の乳首を切り取った後、リリの乳首後を入輪から切り落とし傷口に残った神経、筋肉、乳腺を一本ずつ縫合していき乳房に埋め込む。
乳輪からモッコリと盛り上がるが日にちが経つと馴染んで普通の乳首になる。
左右の乳首を移植して最後のクリトリス移植に移る。
まだ、移植される外道の女は眠っている。
下手に起こし騒がれるのも面倒なので麻酔を掛けたままでクリトリスを身体から離す。
包皮を捲ると真っ平らなツルツルのピンクのヌメった肌にピョコんと米粒大の肉芽が飛び出ている。
クリトリスと尿道の間に針を刺し特殊シリコンでクリトリスを浮かせる。
浮き出た所で周囲を大きく切開し丸い肌にクリトリスが飛び出ている形にする。
ユックリと身体から離しながらクリトリスから出でいる神経を長め

に切開しながら小さな海綿体も切除する。
次にリリのクリトリス跡を切除して神経を見える迄、穴を開ける。
神経細胞が見えたら一本づつ縫合していき海綿体も繋げる。
全ての作業を終わらせリリを覚醒させる。
リリの眼が薄っすら開く。
「リリ?触っているの分かる?分かったら指を動かして。」
リリの指がユックリと曲がった。
同じように左右の乳首も神経が繋がったか確認をしてクリトリス周辺を縫合して余分な肉は削いで形にして行く。
一人に8時間もかかる。
元々は女医は脳神経外科医が本職で有ったが体力の消耗が大きいので美容系に変えている。
「さて…感じるかな?」
「ジェーン、覚醒させて…」
呼吸器に小さなガスを付ける。
リリが薄っすらと眼を開けた。
「聞こえる?今から乳首とクリトリスを触るから感じたら指で合図して。」
リリが頷く。
右乳首をピンセットで突く。
リリの指が動き親指を立てた。
左乳首。
指を立てた。
最後は一番、繊細なクリトリス。
ピンセットでピンクの肉芽を触る。
リリの指が動き親指を立てる。
「はぁ…ジェーン再度、麻酔を…」
後は周辺組織の縫合と余分な組織を取り除き再建手術が終わった。
「はぁ、ジェーン事後処理はお願い…」
手術室から出ると黒いスーツ姿の男とリリカが不安そうに女医を見

ている。
「あ、マダムのトコの人？一人は取ったから連れて帰って…あと、リリの手術は終わったからね。無事に付いたわ。貴女は明日、するから寝なさい。」
「先生」
「あ、ジェーン、その乳首とクリトリスを取った子はマダムに返して」
「ごめんなさい。重いけど持ち帰って」
そう言われた黒いスーツはヒョイっと乳首とクリトリスが無い女を荷物のように肩に担ぎクリニックから出て行った。
「ジェーン、術後はどう？」
「脈、心臓全て正常です。」
「そう、後はサナエに任せて休みなさい。明日もあるから。明日の子は？」
「半睡眠状態で寝かしています。」
「そう、足の健を切っているから逃げる事は無いけど…喚くとご近所迷惑だしね。じゃあ、明日もアシスト頼むわよ」
「ほら、リリは大丈夫だから寝なさい。」
まさか自分が切り落とした乳首とクリトリスを自分が付ける日が来るとは思わなかった…。
三姉妹の長女のリリアとは良く喋った仲だ。
ソレを見ていたシスター連中が最後の試験に対戦相手を彼女達、三姉妹にした。
リリアは毒手の使い手で武術も女医とは互角。
だから最初に手に掛けた。
手加減をしたら女医が殺られていた。
あの施設が異常なだけだ…。
それからは仲間は作らないようにしている。
「ハグァーア！」
「コレで満足？リリカ？麻酔を掛けるわよ。」

昨日と同じ事をしている。
ジェーンは一度した事をスグに吸収する。前にいたマオとは大違いだ。
「よし、ジェーン覚醒させて…」
薄っすらとリリカが眼を開ける。
「今から触るから感じたら指で合図して」
右乳首からピンセットで触る。
親指をリリカが立てる。
左も立てる。
最大の難関、クリトリス。
肉の突起をピンセットで挟む。
リリカが指を立てる。
「はぁ…終わったわ。ジェーン、再麻酔」
リリと同じように形成して無事に手術は終わった。
クリトリス、乳首を取られた女を乗せたストレッチャーを押して廊下にでる。
「ありがとう。マダムに伝えてて…近々、直接に御礼に行くって」
軽く女をストレッチャーから肩に乗せてスーツの男は外にでる。
女は裸のままで尻がプリンと男の肩で揺れている。
「ジェーン、術後は大丈夫?」
「はい。」
無事にリリとリリカの乳首、クリトリスの移植再建手術は終わった。
１０日後…
「どう?痛みは?」
「軽くなった…」
「クリトリスが痒い…」
「そう?歩ける?」
「歩ける…」
「じゃあ、着替えて。御礼をしにマダムに会いに行くよ。
組織の東アジアの売春、人事売買組織のトップなんだから…それに

改造マニアで貴方達と同じで収集家なのよ。色んな物を見れるわ」
リリカ、リリは着替えてゴスロリスタイルに、なった。
金髪に青い目。
長い睫毛。
フランス人形が人間になったような感じがする。
二人とも手は黒い特殊な手袋をしている。
「用意、出来た？」
黒いドレススカートにピンヒールの女医が病室に入ってくる。
胸元は開き胸の谷間が見える。
「お前は何時もその格好だな」
「貴女達もね。」
クリニックの駐車場に高級セダンが止まっている。
運転席にはジェーンがのりその横に女医が乗り込む。
後部座席に姉妹が乗り込んだ。
「何時でも襲って構わないって言ったけど走行中は辞めてね」
「そんな約束は知らないが…」
リリが手袋に手をかけた瞬間、
「カチャ」
「な…」
ジェーンの胸に隠していたオートマチックの拳銃の銃口がリリに向いていた。
「コイツ何もんだよ」
「手術室で見なかった？ウチのナース」
「動きが軍人じゃねえか！」
「そう？じゃあ引き金を弾いてもらう？」
「チッ…」
口を鳴らしリリは手袋をはめた。
数時間走ると横浜の高級住宅街に総合病院が見えて来た。
病院の門をくぐり抜けると別館に車は走っていきボディガード風の男に止められた。

「タオクリニックのタオです。マダムに会いに来ました。」
別館横の駐車場がせり上がりエレベーターが姿を現した。
「どうぞ」
「なぁリリ、日本って銃の所持は禁止なんだよな？」
「そうよ。リリカ、あれは麻酔銃のような物じゃない？」
「貴方達もアルファベットを貰った組織の人間よね。
組織にその国の法律が適用される？ここは組織の建物よ」
地下5階分降りた所でエレベーターは止まった。
「着いたわよ。ジェーン銃は預けてね。」
入口には執事がいて銃器、刃物を置く事になっている。
「ゴトン、ゴト、ゴト」
ジェーンは銃を2丁、ナイフを一つトレイに置く‥。
「貴女達もよ。毒針とワイヤーソーを隠しているでしょ」
リリカ、リリが服から暗器を出しトレイに置く。
「コチラの部屋に成ります。」
通された部屋は壁がガラス張りに成っていてガラスの向こうには裸の女が裸で大の字になり、両手と両足の位置に鉄のパイプが天井から床まで通っている。3人の女がパイプの中間地点で両手で、パイプを握り両足でパイプを踏んで滑り堕ちないように踏ん張っている。
「ハグッグッ…」
首には番号の書いた首輪が巻かれ、モニターにはオッズらしき数字が変動している。
「ジリリリ…！」
「締め切りです」
「スタートします」
中の黒い頭巾にプロレスラーのような体躯をした男に達が女の尻の穴にフックを挿し込み、膣の穴にもフックを刺す。
尻のフックは天井に固定され、膣のフックの先は丸い輪が有る。
「先ずは1キロ」

膣のフックの先の輪にオモリを付ける。
「アギャ！」
「イギ！」
尻のフックを撮すカメラが尻の穴と膣を拡大して撮す。
尻のフックで尻の穴は天井に向かって延び、膣の割れ目は下にオモリの重さで縦長に拡がる。
「ハフッハフッハフッハフッハフッ」
3人の女達は必死に鉄のパイプを手で握り脚を踏ん張り落ちるのを阻止している。
床は鉄板が敷いてある。
ボタボタと女が流す汗が鉄板に落ちると瞬時に消える。
「何なの？コレ？」
「あぁマダムが時々開催する賭け事よ。1から3の三連単のみを当てるの…オッズで見れば1の女は一度、助かっているわね。後の二人は初めて…だから1から売れているわね。アタシは2．3から1にしたわ。」
「先生、賭けているんですか？」
「そうよ。何故、1が最初に落ちるって？」「スグにわかるわ」
中の大人が乳房に釣り針状のフックをかける：
「アギャ…」
「アガ…」
「ギャン！」
かけられたと同時に1の女の手が滑り熱された鉄板に、落ちる。
「ギャー」
「あら…あの娘、解体か試し切りね…もう賭けには買ったわ…いくわよ」
マダムはガラス張りの賭けの部屋の奥に有る重厚なドアの中にいた。
壁には標本が飾ってある。
額に肌色やベージュ、黒い蝶のようなものが奇麗に並べて有る。
良く見ると女性の肉ビラをクリトリスから肛門を切り取り蝶のよう

に飾っている。
「はぁ…これ、欲しい。」
リリが溜息を付く。
其の横には脚が絡まった標本。
脚は綺麗だが、尻から腰まで奇麗に切断面が見えている。
それが左右に開かれ飾られている。
上の尻は男性。
下の尻は女性。
セックス中に切られたんだろう。
膣の奥まで入ったペニスの切断面と女の膣から子宮までペニスを包んだ切断面が奇麗に見える。
「T、見覚え有るでしょ。」
「ええ…マオデスね…」
「そうよ奇麗な切断面だから特殊な工法で剥製にしたの。」
「で、そちらの少女達は…?」
「あ、彼女達はヨーロッパ支部のアルファベット付きです。」
「こんにちは、マダム。Lです。同じくLです。」
「まぁ…貴女達が薬の百合姉妹?お若いのね…」
「いえ、Tと余り変わりません。昔から自分の体で薬物の効果を調べていたら成長が止まりました…」
「あ…そうなの…それで日本には?」
「卒業試験時に切り落とし下さいされた乳首とクリトリスの再建に…」
「まぁまぁ…」
「ゆっくり、私のコレクションを見て行って…後で食事を用意させるわ。」
リリカは棚に陳列されたペニスを眺めていた。

新たな暗殺器具ゴクモン

「ガシャガシャガシャン」
「フガフガフガ…」
「パンパンパン！」
「さあ、新商品の試作を発表するわ。
皆、ソファに座って」
豪華な革張りのソファ。
その前に有るレンガの壁が左右にズズズズ…と移動する。
「オーン！オーン！」
口に何本もの鉛筆を加えさせられた、裸の２０代後半の女と冊束を加えさせられた２０歳前後の女とが真黒な黒衣姿の女に首に巻かれた麻紐を引っ張られて立っている。
女と達は共に乳首に銀のシールを貼られ股間にも剃り上がった土手の真ん中に銀のシールが見える。
頭は剃り上げられて青白く光っている。
「この子達…」
「そうよ、貴女達の乳首とクリトリスをくれた子達よ。」
「右の鉛筆の子は何処かの雑誌の記者。左は組織の金を横領した子。」
「これから開発途中の武器のデモンストレーションをするわ」
「試作持って来て」
全身黒装束の女らしき身体のラインをした人物が液体が満たされたトレーに白いタマゴ状の物を載せて処刑待ちの女がいる部屋に入り部屋の片隅に有る小さなテーブルに乗せた。
「先に泥棒猫にして！」
女が液体のタマゴ状の物を手に取り丸坊主に成った女の脚をバンと蹴り無理に開かせた。

ハンドカメラを持っている黒装束が女の股間にカメラを構えとピントが自動的に合ってガラス上部に備えつけられたモニター数台に女性器が自動的に映る。
残りのモニターには眼をキョロキョロとさせて落ち着きなく辺りを伺う顔、もう一台は全身を映している。
「入れて、奥までよ」
黒装束の女が液体の入ったトレーに手を入れて、タマゴ状の物を摘み上げた。
白いタマゴに亀裂が入り液体が垂れるのが白身が垂れているようにも見える。
股間に近づけピンクの亀裂に押し当てる。
肌色の肉ビラを押しのけたまごはニュルンと膣奥に入り込んだ。
「サン…ニィ…イチ…」
「カチャ」
マダムの手の中のリモコンのボタンにスイッチが入った。
「ドムン！」
「ブッ！」
下半身が一瞬、大きく膨らんだ。
眼は半分、飛び出し
股間からは白い風船状の物が飛び出しでいる。
「う…ん。失敗ね。腹が妊婦さんのように膨らまないと駄目なのよ。だからあの子、まだ死んでないわ」
確かに眼は半分飛び出して口から血の泡を吹きながらヨタヨタと生きている。
「その子、連れて行きなさい。道場に試し切りで渡しなさい」
「マダム、その試作品は下半身内で風船を膨らませて殺す仕様にですか？」
「そうよ。アイデアでも有るの？」
「はい…計算します。」
リリカは懐からスマホを取り出し何やら計算をしだした。

「ちょっといいですか?中に入っても…」
「良いわよ。」
ツカツカと歩き処刑場の中にリリカは入り
「それ、いいですか?」
卵を受け取るとポケットからナイフを取り出しタマゴにキズを付け出した。
「あと…針と糸、無ければ安全ピン…下さい」
「コレしか無いけど…」
リリカに１０本程の安全ピンを渡した。
キズを付けたタマゴを茶褐色の肉ビラを押し広げると膣に押し込んだ。
「ォオー!オー!」
少し垂れ下がる肉ビラを合わせると安全ピンを右から刺して斜めに通し左右の肉ビラを針で固定していった。
「アゴ…ゴゴ…」
リリカは安全ピンで肉ビラを全て合わせてピン留めした。
「よし…」
部屋の隅に移動すると手を入れて合図をする。
「サン…ニィ…イチ…」
「ドムン!」
「アガッ!」
口を大きく開けた為に口に差し込まれた鉛筆がガシャガシャと床に落ちる。
「ガハッ!」
塊のような血を吐き、眼がグルンと白く変わる。
下半身が妊婦のように膨らみ、肉ビラの隙間から白い煙が立ち上り恥骨が外れた下半身は上半身を支える力も無い…
処刑室から出て来たリリカはマダムに幼い声でアドバイスをした。
「マダム、妊婦のようにして処刑したいのでしょう。リリ、あれ持って来て!」

「ハイ、あれですね。楽しみですわ」
リリは銀のペンを持って来た。
「マダム、実験の女はいますか？」
「パンパン！昨日の売れ残りを一人、持って来て」
手を叩く合図で処刑室に一人、頭から布を被った女が入ってくる。
「汚いわね。布を剥いで水をかけて綺麗にしなさい。陰毛も多ければ処理しなさい」
「ビリビリ！ビリ！」
小振りな乳房が揺れる・・・
「シャー」
泡と水が混ざった状態で全身が泡にまみれる。
柄のついたデッキブラシで女を擦る。
「あっ！痛い！」
再度、水をかける。
「拭くのが手まね。下の毛はバーナーで焼きなさい。」
リリの手に簡易バーナーが渡される。
よくキャンプの火起こしに使うタイプ。
「ガチャ！ゴ～ゴ～…ゴー…シュー」
音が小さく成り炎は赤から黄色、白と変わり半透明になる。
「ジュ…」
チリチリと黒く縮み床にゴミのように陰毛は落ちる。
「ボーッ」
透明の炎は赤に変わり踊りだす。
「ほら、脚を拡げる！」
「シェービングクリーム」
アシスタントの黒衣がリリに渡す。
「シュシュシュワシュワ」
股間が真っ白にシェービングクリームで覆われる。
「アギャーアッアッアヅイ！」
股間から炎が立ち上がり股を炎が覆い尽くす。

「ハガ！ハガ！」
ムースの泡の可燃ガスに火が移り行っ旬でパイパンのツルツルになった。
陰毛後は軽いヤケドで紅くなっている。
「さて、試そうかな♡」
そう言いながら手にしたボールペンを肉ビラを掻き分け膣に差し込み自分の幼女のようなても膣にねじ込んだ。
「あれ？あ、これだ！」
子宮口にペンを指しペンの尻を指で押した。
「パチュン」
「わ！速く抜かなきゃ！」
素早く膣から腕を抜くと女は下腹部を押えてしゃがみ込む。
「アギャギャギャ…」
しゃがみ込んだ女が今度は床を転がり出す。
下腹部が見る見る内に膨らみ初める。
「ガァー」
瞬く間に臨月の妊婦の腹になる。
しかし腹以外は萎んでいく。
Dは有ったパンと張っていた乳房に皺ができる。
「お…お…ぉ…」
乳房だけで無く身体全体に小さな皺が出来る。
比例して腹だけは膨らんで行く。
「ガバ…ハレッッス…」
「バチンッ」
下腹部の腹の皮が破け腹から赤い玉が腹の皮を破り飛び出した。
真っ赤な血のゼリー状の玉。
「ハガ…ガハ…」
まだまだ皮膚は干乾びて行き眼はヘコみミイラのような状態の骨と皮の遺体が処刑室に横たわる。
「これ…吸水ポリマーの粉末ね。少量で一人の人間をミイラにする

のは凄いわ。でもミイラは美しく無いわ。腹が裂けて玉が出るぐらいで止めれる？」
「ポリマーの吸水力と量を調整して一粒の吸水限界を調整してみれば…」
「頼んだわ…屋敷で研究して！幾らでも女は居るから…Tも良いかしら？」
「姉妹が望むなら…」
「あなた達、研究したいわよね。女は使い放題よ！」
「やらせてください！」
リリ、リリカ共に目がキラキラと輝いている。
「じゃあ、マダム。宜しく。あなた達もマダムに無理を余り言わないでよ！」
「先生、いいんですか？」
「構わないわ。」
「アギャー！ギェー」
館全体から悲鳴が響き渡りだした。
「アッ！」
小さな胸に小振りの乳首がチョコんと乗っている。
その小粒なブドウ大の乳首に極小の針を刺す。
「プッ」
赤い血玉が出来る。
「あ…あー！あー！」
小さなブドウは次第に大きくなり巨峰並みになると乳首の皮を破り下に落ちる。
「うわ～ん！乳首が落ちたよ！」
「パン！」
「やかましわ！もう一つ行くよ。リリカ、青の針」
リリカからリリに針が渡される。
「ブッ」
「イダイ…イダダダ！」

乳首は急激に肥大化していきゴルフボール大になり乳房から落ちた。
「コッチは急激かぁ…」
「リリカ、黒い針！」
「バン！脚！拡げる！」
「あわわわ…」
リリの小さな指が陰毛を掻き分けドテしたに有るピンクの肉芽を覆う肉の皮をムキ、針先で刺した。
「リリカ、あのステックも…」
リリカがチョーク状のピンクのステックをリリに渡した。
肉ヒダを指で拡げてステックを膣に差し込む。
「あ！ぎっ…いいい破裂する！」
ピンクの肉芽が勃起しだして子供の勃起したペニス大で勃起が止まった。
「ノギス？くれる？」
器用にノギスで勃起したクリトリスをはかる。
「いぎ…ぎ…」
「リリカ、シリンダーくれる？」
リリがシリンダーを膣に差し込むとポンプを押した。
「お…お…おご！」
膣から下腹を真っ直ぐに棒状の物が身体の中を口に向かいモコモコと登る。
「ゴ、ゴハッ…ゲハッ！」
「ガバババ…」
口からピンクの槍が歯をへし折り飛び出す。
「ドン！」
床には膣から飛び出した槍の先がめり込む。
「ガゴ…ゴ…」
口から槍を出し膣からも槍を突き出した姿は魚を囲炉裏に刺して焼いているような姿をしている。
「へー面白い物を造ったわね。どうしたの？」

「コレはと「特殊伸縮形状シリコンに吸水ポリマーを入れて膣内で水を含ませて槍に変えた物です。」
「プールサイドとかの水際の暗殺に使えるわね。子宮内のボールは？」
「今、やっとポリマーの比重が分かりました。クリトリスが破れずに小指大で泊まってますので計算して子宮内で止めます」
「そう！そのステックの名前は？」
「普通にランスにしようかと…マダム、良い名前は有りますか？」
「そうね…戦国時代の処刑に似ているからゴクモンってのも良いわよね」
「ピシャン！パチャン！」
太陽が照り注ぐ２５メートルのプールサイドに裸の女が７人並んでいる。
全員が身体にアザや斑点等が有る。
プール内には魚が泳ぎ回りプールの横には地下に降りる階段が有り椅子に座りプール横からプールを泳ぐ魚を見ているマダムとリリ、リリカの姿が有る。
「そろそろ初めて！全て撮影するのよ。暗殺道具としてのデモンストレーションと殺人ショーとしての配信だからね。」
プール横に数台のカメラ。
プールサイドにも固定カメラとマダムの部下が持つハンドカメラで女達を写す。
「ピー」
水泳大会で使うようなホイッスルが鳴り響く。
「アン！ヤン！」
あちらこちらから膣にステックを入れられモジモジと股をくねらす女はと、細い腕を入れられて子宮内に吸水ポリマーを入れられる女が声をあげる。
「ピピー！」
「あん！」

「やだ！」
「ドポン！ドパン！」
女がマダムの部下の女にプールに蹴り落とされる。
落水の衝撃で魚達はプールの底に固まる。
「が…がぁ…」
「ビシュ！ドン！」
黒い槍を口と膣から飛び出し絶命する女
「あぎ…グルじい…」
「パン！」
腹が膨れて破裂をした女が水面に漂う。
血のニオイを感じた魚が一斉に水面に浮かぶ女達を襲う。
「クチュクチュ…クチュクチュ」
「あぎ…ぎぎ…」
透明な水面が見る見る赤くなる。
「ハガ…ァガ…」
ある物は尻に魚が潜り込もうと銀の身体を光らせヘビのようにくねらせている。
鼻の穴、眼球に魚が叢がりビクビクと動く者。
「この光景が最高ね。」
マダムが真っ赤なワインを口に近づけて口に含む。
リリカ、リリの姉妹も目の前の惨殺劇を見ながら自分の手を陰部に入れて自慰にひたっていた。

ピンクの霧

「ガン！バス！バス！」
「もう～何なのよ！急に撃って来るなんて！」
車のボンネットが銃撃で捲れる。
ドクターTとジェーン、中東担当のドクターM、撮影クルーの５人が乗ったランドクルーザーが狙われた。
「ギャギャギャギャ…！」
一台のクルマが現場を去って行った。
荷台の男がレディT達のいる方向に対戦車ロケットランチャーを構える。
すかさず、ジェーンが男を小銃で撃つ。
「ガッ！」
「アガ！なんだ！脚が膨らむ！」
「バシュン！」
「アガガガ！脚が爆発した！」
「ドパーン！グワン！ガラン！」
乗っていたジープはランチャーの直撃で宙に跳ねて地面に落下して砂煙と黒煙を吐いた：
「ジェーン！銃弾は足りる？」
「先生、小銃は後少しです。ハンドガンには特殊バレットが５０程！」
「ジェーン特殊バレットで敵の身体を狙える？」
「分かりました！」
ジェーンは小銃を背に廻し小銃で敵に照準をあわせて撃った。
「バスッ！」
「オゥ！オゥ！」
敵の胸に当たった玉は体の体液を吸いながら肥大していく。

クロユリ姉妹が作ったゴクモンの応用でハンドガン用に変えた特殊銃弾。
「アタシの胸が破裂…パン！」
風船のように膨らみ軍服のボタンを飛ばしながら膨れた乳房は弾けた。
「ワアアア！」
黒い布で顔を隠した兵士が銃を置いて逃げ出した。
ズリズリと履いながら逃げる尻が左右にプリプリと揺れる。
女性兵士だろう。
ジェーンのサドっ気に火が着いた。
銃をプリプリと揺れる尻に当て引き金を引いた。
「パスン！」
「アゲ！」
玉が当たったのは尻では無く股間に命中していた。
軍服で威力が、弱まりズリズリと膣奥で止まっている。
「アギャ！」
玉は少量の液体で膨らんでいく。
「アギー！アソコが膨らむ！刺さる！」
悪い事に球体に剣山のようにスパイクが伸び膣壁、下腹部の皮を引き裂きながら巨大化している。
「オーン！オーン！」
獣のように女は叫ぶが下腹部が
「ベリッ！」
「ベシャベシャベシャ…」
滝のように内蔵と血をばら撒き女は息絶えた。
「ジェーン、一人！助かりそうなの捕まえて」
「ババババッ！タン、タタン！」
どうやら友軍が来たようだ。
「遅くなりました！」
軍服姿の男がTに敬礼をした。

「二人、拉致されたからこれから奪回しに行くわ。貴方達は残党の掃討をお願いするわ。あと、弾丸を車に乗せてて！」
友軍の男達が車に弾丸、ランチャー等をのせる。
ジェーンは右乳房が破裂した女に特殊な止血剤を塗りテープで簡単に押さえる。
「ジェーン、乗せて！」
ジェーンが後部座席に捕虜の女を押し込み乗り込んだ。
「先生、連れ去られたＤｒ．Ｍと特派員の女の居場所は分かるのですか？」
「私達、アルファベットの者たちにはＧＰＳが埋め込まれているの。」
「二人は生きていますか？」
「う…ん、Ｍから襲っていたら敵の男は死んでいるわ。プレスの女からだったら、その女は生きていないわね。」
「生き残ったらプレスの女に運が有るってことね。」
ゲリラグループの隠れ家は潰れかけたホームセンターに有った。
電気は自家発電が生きているようで照明は付いている。
「アマンダは？マリアンは？」
「アマンダは乳房が破裂した。マリアンは腹が裂けて死んだ！」
「このクソアマ！」
「ガッン！」
Ｍの顔に男が蹴りを入れた。
「ガバッ」
口と鼻から血を流しながらも顔が紅く火照っていく。
「駄目だ！コイツ、蹴られて喜んでいる。コッチの金髪女を痛ぶるぞ！」
「いやー！」
シャツを引きちぎるとブルンと真っ白な乳房が飛び出した。
「ほりゃ！」
ズボンをパンツごと足首までずり下ろす。

「ああ…いや…」
「どうする?」
「アマンダの敵だ!その乳房を右に寄せてくれ」
「ドドドドド…」
「バシュン!」
「アギャ!」
「ガン!」
乳房の右から左に釘が貫通して壁に刺さっている。
「次はコッチの乳房だ!」
「プシュー」
コンプレッサーが動き空気を吐き出す。
「パスン。」
「アゲッ!」
「ガン!」
釘が壁に刺さる。
「ゲヘヘヘ…この乳房の穴にワイヤーを通して」
赤い傷口に銀色のワイヤーを押し込む。
「ガァーイギイギ…」
特派員として初めて戦地に来たジャスは昔、仲間に聞いた話を思い出した。
ゲリラに捕まると死の拷問と凌辱が有る。
直ぐに自死が出来るように奥歯に毒のカプセルを仕込めと言われていた。
…もう…嫌だ…なぶり殺しは…
鼻を香水のような甘い香りが匂ってくる。
「なんだ?この香りは…」
男達はＤｒ．Ｍの身体から匂い立つ甘い香りに誘われ男達はフラフラとＭに近づく。
「黒髪の東洋女は初めてなんだよ」
一人の髭面の男が唇を吸った。

「はぁ…俺は下だ！」
パンツごとズボンをずり下ろすと真っ白な下半身に産毛も無いパイパンのアソコのワレメが目に飛び込む。
ムワッとメスの薫りを撒き散らしている。
男が脚を掴み股を広げる。
ムワッとしたメスの匂いが部屋に充満する。
ジャーナリストの女の乳房をワイヤーで繋げた男もMに群がる。
Mには男が5人集っている。
一人、脚を撃たれた男だけ銃を持ち入口横にいる。
風が入るので入口の男迄は匂いは届かない。
「たまんねぇ」
ズボンをずらしイキリたったペニスを挿入して腰を動かし始める。
食虫植物のような肉のヒダがまとわりつく。
「あ…溶けそうだ…」
「アグっ…」
口付けをしていた男が女から離れ地面をのたうち回る。
「ガハハッカハッ！」
何かが喉に詰まり窒息している。
「あ！ああ…ああ…儂のペニスが！」
男はズキンとした痛みで膣からペニスを抜いたが股間に怒張したペニスはなくロウのように溶けたペニスと睾丸が垂れ下がっている。
「このオンナ！」
側で見ていた男が女に銃を向けた途端に股間を触った女の掌から愛液が男達の顔に飛んだ！
「ぎゃ！」
「目が！」
出口付近にいた男がMに銃を向ける。
「ターン！」
「ベシャン！」
男の頭がバラバラに吹き飛んだ。

「大丈夫？M？」
「あたしはね。あのジャーナリストの子は？」
「あの子はオシッコ漏らして泣いてる…」
「泣いてるなら大丈夫ね。T、ソコでのたうち回る男達、始末して。」
「ジェーン、あの泣いてる娘を助けてあげて。」
ジェーンが乳房をワイヤーで縛られた女に駆け寄り地面に転がるニッパーでワイヤーを切断した。
「ターン！ターン！」
Tは淡々とゲリラの頭を撃ち抜く。
「貴女にしては優しいわね？」
「最近、ハンドガンを使わないから練習がてらよ。」
「ビリビリビリ！」
頭を撃ち抜かれこと切れたゲリラのシャツをナイフで切り裂き布を股間に当て愛液を拭き取ってゆく。
集めのシャツはボロボロの布に変わっている。
「相変わらず貴女の愛液は凄いわね。」
「本当…普通のセックス出来ない体よ」
Ｄｒ．Mの愛液は強酸性。鉄でも数秒で溶かしてしまう。
特性のパンツを履き倒れている男のジャケットを剥がし羽織ると飛散している工具を落ちている布製の袋に入れ出した。
「ジェーン、その子を車に乗せていてアタシも工具類を集めて戻るわ」
「T、捕虜の女は生きているの？」
「片方の乳房は破裂させたけど生きているわ。」
「じゃあゲリラのアジトを吐かせないとね…」
楽しそうにMは工具やワイヤー等を集めていた。
「ジェーン、お待たせ」
「ガシャン！」
工具を車の荷台に乗せてTとMが車に乗り込む。

Mは運転席、ジェーンの隣にTは後部座席に人質の女、捕虜と乗ろうとしたが
「この子、邪魔ね。後ろに積むわ」
捕虜の女を担ぎ出して荷台にのせ股関節に手を当てると
「ゴキン！」
「イギー」
「ガコン！」
「ガバ！」
肩の関節と脚の関節を外した。
「バン！」
車に乗り込むと敵のアジトから車は遠退いた。
「ドカーン！」
後方で爆破音が聞こえゲリラのアジトは吹き飛んだ。
Ｄｒ．Ｍの拷問
「アオーオオオ…」
「まだよ…まだ言わなくて良いから…」
「ジョキン！」
「アグっ」
連れ帰った女ゲリラを拷問にかけるMの顔は紅く火照り、眼はキラキラと好奇心旺盛にハサミで切り落とされる女ゲリラの小陰唇からビラんと出たヒダを見ている。
「ジョキン！」
「ほら、綺麗に切れた。言う？私は別にまだ聞きたく無いけど…」
眼に涙を溜めて頷く女ゲリラに地図を見せて自白させる。
猿轡を外すとハァと息を吐き、座標を言う。
「T、北西へ１０キロ、赤い屋根のファミレス」
「わかったわ！M」
「Tから制圧したわ。でも人質はいない。」
「パン！はぁ…アナタね！ちゃんとした情報は無いの？人質の少女達を教えろって言ってんのよ」

M達が依頼されたのは中東の小国の元首から。
国家元首の孫がゲリラに誘拐され政権を渡し国外逃亡しろと脅されている。
ゲリラの後ろに大国の特殊部隊も付いている
大体、誘拐は２４時間で解決しないと人質の生存の可能性は低くなる。
昨日の夜に東京のホテル最上階でディナーが翌日には砂漠で銃撃戦をしている。
「いう？言わない？」
「そこから西の小学校…」
「T、そこから西の小学校に向かって」
学校の近くに車を止めて小型ドローンを飛ばすとリモコンカメラに屋上にスナイパーが３人居るのが確認された。
コレまでの施設よりも厳重でスナイパーの姿も中東のゲリラの格好とも異なる。
「M、ビンゴよ。貴女来れる？貴女と腕利きが５人位。カノ国の特殊部隊もいるわよ」
「行くわ！」
「司令官！見つけたわ！飛び切りの兵隊を５人！それだけで良いわ！」
ドカドカと銃器を各々が持ち司令部の有る建物から出て行く。
「あ、司令長官。アタシの大事なペンダント…預かって」
首に手を廻しペンダントを司令長官の首に巻く。
司令長官の鼻にムァっとしたメスの匂いがまとわりつく。
「ザザザザザザ…」
装甲ジープがL達と合流する。
屋上のスナイパーは４人。
「ジェーン、ドローンからの狙撃は頼める？」
「ラジャーサー」
リモコンにスコープ画像が出てスナイパーの頭に照準が、向く。

リモコンのスイッチを押すと「パシュ」
身体をダラリとしてスナイパーは息絶えた。
本部特製の暗殺用ドローン。
情報は世界には出回っていない。
スグに屋上のスナイパーは全員が沈黙した。
「T、透視スコープで建物内を見て」
一階の屋内プールの建物に人が多いわね。
「アタシとT、ジェーンが屋内プールに突撃するわ。後の者は建物を装甲車で突き破り陽動して！」
「我々も…」
「貴方達が来たら貴方達も死ぬわよ。男が吸い込んだら死ぬガスを使うから…」
「わ…わかりました。」
「準備は良い？5．4．3．2．1ゴー」
装甲車、2台が学校に突撃し壁を破りながら校内を走る。
「ドクター、人が減ってます。」
「M．出せる？」
「ン…アッ…アッ…」
Mの股からピンクの煙がモクモクと出て来る。
「ジェーンは敵を撃ちながら入って！アタシはMを肩にして中に入るわ。」
「パシュ！パシュ！」
天窓に付いている開閉器を銃撃で潰し屋内プールを密封する。
「T！ズボンを下げるわ」
「ズルん」
とズボンを下げた途端にプール内はピンクの煙に覆われた。
赤外線ゴーグルを付けてジェーンが小銃で女の特殊隊員と女ゲリラを撃っていく。
「なんだこ…」
入るなり男は倒れて絶命する。

少女が裸で椅子に縛られている。
足首と爆弾が手錠で繋がれている。
「ちょっとまってね。Mが股間を弄る」
「クチョクチョと音がして愛液がしたたる。」
その愛液を手に受けて手錠にかけるとロウのように溶けていく。
「T、プールに投げるから撃って」
Mが爆弾を手にしてプールに投げた。少し水に浮いた状態の爆弾をTが銃撃する。
水柱がたちプール内での戦闘は終わった。
「T、ちょっと待ってね」
「ドボンとMが全裸になりプールに飛び込む。」
Mの周りはピンクに水が染まってゆく。
「タオル貰える?」
ジェーンがタオルを渡す。
股間を念入りに拭き特殊ズボンをはいて倒れている特殊隊員の上着を脱がし裸の上半身に着込んだ。
「彼女は大丈夫?」
「眠らされているだけだわ」
校舎内ではまだ銃撃戦が繰り広げているが校庭に止めてある車に乗り込むと司令部に車を走らせた。

恥骨切断と電撃責め

「ガラガラガラガラ…」
「やっと着いたわね。」
「誰の迎えも無いけど…」
「貴女は装甲車から出ては駄目よ！」
救助した少女を装甲車に乗せたまま、Mらは装甲車を降りた。
司令部入口の守衛もいない。
「L、何かおかしいわ」
「ジェーン、狙撃を警戒して…」
司令部の木のドアをそっとはいると部屋の片隅に裸の兵士達が縛られ黒い軍服の特殊隊員が銃を向けている。
司令官はニヤケながらM達に銃を向け
「お前たちも全部、脱げ！」
と命令している。
「バサン！」
Mが率先して服を脱ぎだした。
「ホントに…面倒！」
Lもジャケットを脱ぎ地面に置いた。
Mが目配せで奥でジャーナリストの女に銃を向ける女ゲリラに目で合図した。
ジェーンは太腿に付けているガンホルダーから特殊バレットの銃を抜いた。
「はぁ…」
Mが股間に手をやる。
少し残った愛液を指先に付ける。
「カチッ」
司令官に付けたMのネックレスが高速で閉まる。

「キュキュキュキュキュキュ」
「ハガッガバッ」
銃をMに向けた特殊部隊の隊員の眼に愛液を塗る。
「ガァー」
眼から煙を出してのたうち回る：
「プシュ！プシ！」
ジェーンが残りの隊員の身体に特殊銃弾を撃ち込む。
「アギッ！」
「ギャバ！」
「来るな！撃つ…」
言い終わるまでに銃を持つ手首をLの暗器、手に仕込んだ極薄のスチールカッターが切り落とした。
女は手首から先が無く切断面から血を吹き上げる自分の手首を不思議そうに見ている。
「あばばば…」
「ジェーン！一人は生かしていて！」
「ラジャー！」
ふくらはぎが爆ぜた男の脚をサバイバルナイフで膝から切り落とし傷口に特殊止血剤を塗る。
「グッ…グェ…」
「M、コイツどうする？」
「あーいたぶってバラバラにするわ。」
「アンタもよく縛られているわね。」
「乳房の傷は痛く無いんでしょ！アンタ、街に帰りなさい。ジェーン、少女とジャーナリストの女を街に送って。それと街の郵便局から姉妹から届いた武器が有るから取ってきて」
「わかりました。先生」
自動小銃を肩にジェーンは司令部から出て少女と女性ジャーナリストを乗せてジープに乗せた。自分も運転席に込むと車を出した。
「ビーン！」

ジープの上空を小型ドローンが飛んで追跡する。
政府の建物に着くと少女を政府の人間に渡し女性ジャーナリストも車から降ろした。
「大統領からメッセージが…」
「あ！それは直に先生に伝えて！」
ジープに乗り込むと郵便局に向かった。
「◇◇◇▽▽▽」
「あ…スピークイングリッシュ？」
「違う流暢な英語を話す局員にフランス〇〇のレディＮからの荷物が無いかの聞いた。」
ヨーロッパ支部は主に後方支援が重点。
レディＬの姉妹が武器の薬剤、素材を研究してレディＮが武器化、薬剤化する。
実働部隊はアジア、アメリカのアルファベットが動く。
Ｍは東洋系の顔立ちをしているが目鼻立ちがハッキリして中東寄りの顔をしている。
サイドミラーをジェーンはチラッと見る。
ジープには自動小銃、ランチャー、特殊銃弾のハンドガン。
それとヨーロッパからの新しい武器。
「キュラキュラ…キュラ…」
ビルの横、自動車一台がギリギリの場所から戦車が出て来た。
まだ砲身はこちらに向いていない。
ジープを止めてドアから出るとランチャーを砲身に向けた。
「ガガガガ…」
「パシュン！」
ロケットは砲身の先の穴に向けて白い煙を出しながら飛んで行く。
「ガスン！」
ロケットが砲身に挟まったと同時に戦車の砲身が膨らみ吹き飛んだ。
詰った時に砲弾を打ち砲身は破裂し中の人間も全員が絶命しただろう。

「アレも邪魔ね」
肩の自動小銃をオートに変えて小型のドローンも撃ち落とした。
「ブロロロ…キッ！」
「ガチャ」
「先生、少女とジャーナリストを届け荷物を持ち帰りました。」
「貴女、交戦した？」
「はい…」
「顔が欲情したように紅いわよ」
「先生、武器ですが…」
「ベリリリリ…！」　テープを開けると中に3本の刀の柄が入っている。
「Mは紅い奴？」
「そうよ」
「ジェーン、渡して来て」
ジェーンは箱から紅い柄の棒を取り出しMに渡した。
「さぁ…もう聞く事も無いし…」
捕虜のゲリラの女は腹は溶け乳房も豚の脂肪のように溶けていた。
中空を見つめてうわ言を言っている。
肉のビラが無くなり、ポッカリと空いた穴に刀の柄を差し込む。
無造作に膣が柄を包み込む。
「カシャ」
「ギャーアガガガ…」
ヘソの上、鳩尾部分から青龍刀の赤い刃が飛び出す。
「はい。実験よ」
女医がMの肩を叩いた。
「カシュ」
黒い柄を女の膣に入れる。
「ガシャ」
「アゴー！」
女ゲリラの目がひっくり返り白目になる。

「ジェーン」
ジェーンが白い柄を入れる
「ガカカン！」
「オボ…」
口から白い槍先を出して震えている。
「アゴゴゴ…」
「ジェーン、そのツバを押して見て」
鍔はおうとつが有り、その内の1つを押した。
「ジャキン！」
「ザグッ！」
口が裂けて鋭利な刃が頬を切り裂くと顎の骨も絶ち女の頭は後ろにゆっくりと倒れた。
「ジェーン、軍隊で銃剣術は習ったでしょ。槍も似たような物よ」
「ギーン！」
「ドカーン！バラバラバラ…」
「バカーン！」
「T！自爆ドローンの攻撃よ！ジェーンも爆撃時の退避は知っているわね！」
「ガチャガチャ…ターン！ガラン！ターン！」
「おい！この女達だろ海外からの傭兵は！」
「3人共、傷は大した事は有りません。」
「3人共、東洋系の女か…」
Mの体臭が男達の性欲を掻き立てる。
「男達はいらん！全て処刑して女の兵士は連れて行け」
T、M、ジェーンは手首と足首に結束バンドで縛られ黒い軍服の男達に装甲車に載せられ連れて行かれた。
「おい！コレを嗅がせろ！」
3人は薬品を嗅がされジェーンは深い眠りに着いた。
「パシーン！パーン！ピシーン！」
「アギャ！アウッ！」

ジェーンは薄く目を明けた。
タバコをふかしながら銃を拭く兵士。
パンを貪り食う兵士。
奥の鉄格子の部屋の中では天井から吊るされた政府軍の女性兵士が裸にされて吊るされ尻や背中に鞭を受けている。
「ん～」
自分も全裸にされて椅子に脚を椅子の手摺りに拘束されアソコを見せた状態で拘束されている。
手は後で拘束。
横にドクターT、ドクターMと同じ状態で拘束されている。
違うのはドクターMだけ口に拘束マスク。
アソコには革の貞操帯を着けられている。
敵にドクターMの身体の特異性がバレているのだろう。

「ジャララ…ジャララ…」
「オウ！オオ！」
奥の鉄格子の部屋で鞭で打たれていた女が見悶える。
中東特有の褐色の肌に黒い髪を揺らし尻を振る。
男を誘っているのか抵抗しているのか？
恐らくは鞭を打っていた天井から吊るされた鎖の先に鉄のフックが見えたのでもがいているのだろう。
「パン！」
手首の鎖を緩め尻を出すように四つん這いになるように指示をする。
フックは赤黒い錆らしき物が見える。
「アグッ！」
フックの先が女の尻の穴に深々と刺さる。
全てが尻の穴に入り鉄の錆だらけの鎖が尻から垂れている。
「ジャララ…ジャララ…ジャララ」
「アグッアギャ！」

丸い尻に空いた穴が縦に伸びてその下の大陰唇も縦に伸びてベロンと肉のビラビラがはみ出す。
「ギャイーン！ガガガガ…ガガガ」
兵士の一人が手持ちのハンドソーを持って来た。
「ガガガガ…」
動画等ではシリコンやプラスチックのハリ型が付いているが
兵士が持って来たのは何も付いていないハンドソー、電気ノコギリ…。
ノコギリの刃が上下に動いて木を切るタイプ…。
「アァアー」
鉄の刃を尻のフックで縦に伸ばされ少し肉のビラから顔をだした膣に入れる。
「アァ…」
「ガ…ガガガ…ガガガガガガガガガ」
「ヒギャー」
女の絶叫が特殊部隊のアジト内にこだまする。
「ガバッバババババ…」
「アッハッハッハ」
男達は皆、笑いながら膣から恥骨、恥丘を切られた女を嘲笑う。
横の政府軍の女兵士はシャーシャーと漏らしている。
切られた女は小刻みに震えている。
「はぁ…堪能した」
拘束された椅子から立ち股間からピンクのガスを出すMがポツリと言葉を発した。
テーブルの上の紅い棒を持ちスイッチを入れる。
「カシュン」
「T、大丈夫？」
「パスッ」
Tの手首の拘束を切る。
ピンクのガスが特殊部隊員のアジトに充満して行く。

「ジェーン」
手が自由になったTがジェーンの手足の拘束を切る。
ガスの特性を知っている何人かの男達はガスマスクを着けて銃を取るために動く。
「ヒュン！ビュン！」
「カヒュ！」
「カハッ」
喉を切られて数人は倒れる。
少しのガスでも動きは悪くなる。
「ぐくっ！」
機銃を持ち上げるが
男の腕から持っていた機銃の重みが消える。
「ガシャ！ガラン、ガラン」
「おおお…」
腕ごとTに叩き切られる。
「オガッ！」
喉を突かれて倒れる。
「ジェーン、入口を開けて」
ピンクの煙は入口ドアから外に出て行く。
「あっ、あうん…」
「あら、女の特殊部隊の隊員もいるわ。この子達で本元の基地の場所を聞けば攻撃出来るわね。」
「あ！遭ったわ私のズボン。アタシの愛液は鉄や皮なら飴のように溶かすから…この特殊繊維入りのズボンしか駄目なのよね。」
ズボンを履きながらニコニコとしている。
これから女を拷問出来るのが嬉しいらしい。
「先生も特殊能力が有るのですか?」
「アタシはないわ。強いて言うなら鍛えた手刀と抜手かな?ドクターMはアルファベット付きでも特殊よ。」
「さぁ脱ぎましょうかね～」

敵の女性隊員の軍服を嬉しそうに脱がす。
「なになに～まだ眼がトロンとして股から汁をだしているわ。」
プリンと張った真っ白な乳房にピンクの乳首に電極を近付ける。
「バチン！」
「アギャ！」
トロンとした目が大きく見開き、手で胸を隠そうとするが既に後ろ手に縛られている。
「オマタの豆ちゃんもしようかなぁ…」
「ノゥノゥノゥ…」
「母国語じゃねえだろ！」
「バジュ！」
「アギャ！」
「シャー」
漏らすわねぇ。
「次はこの娘かな？」
「パン！」
鉄格子の部屋で銃声が響く
「楽にしてあげた？」
「ええ…恥骨を切られて内臓が垂れ下がっていた…苦しむだけだわ。
ジェーンの肩に捕まり助かった捕虜の政府軍の女兵士がMに近付く。
「貴女がする？」
「コクリと頭を下げた。」
「特別！バッテリー2個連結！」
「バチンバチバチ！」
電極を近づけただけで電極間に蒼いイナズマイが走る。
「乳首？アソコ？」
何も言わずに電極を小さな肉の芽に近づけた。
「バチン！」
「ギャハァ！」
「アワワワ…アワワワ！」

電撃でガタガタ震えている。
ユックリと電極をピンクの乳首にちかずける。
「〇〇〇〇〇～」
「やっと母国語しゃべったじゃない…ごほうび！」
女兵士の肩を叩く。
「バチン！」
「ギェー！」
ガタガタと床に倒れジャージャーと床を濡らす。
「朝まで時間は有るしね…じっくりね」
端正な顔から笑顔が洩れるがMの眼は笑っていない。

内線とゲリラ娘の拷問　膣焼き

「カン！カン！カン！」
「オウ！ウグッ！」
ダラリと机に伸ばされた乳首に釘が打ち込まれる。
白い乳房は伸びて乳首に銀色に鈍く輝く釘が金槌で打ち込まれる。
「カン！」
「オウゥ！」
左右の乳首に釘を打たれた女は裸で椅子に拘束されている。
釘を打つのは捕虜になっていた政府軍の女性兵士。
「貴女達の指令部は何処？」
椅子の背もたれを持ちMが椅子を後ろに倒す。
「ヒャギー痛いです！」
「じゃあ喋れよ！」
「アタシは末端の兵士で知りません」
「アナタ、アソコの肉の豆にも釘を打ち込んで」
Mは大国の言葉、中東の言葉を流暢に話す。
Mは特異体質の為、格闘術は体得していない。
それ以外の薬学、医学は習得してドクターの称号は貰っている。
残バラな髪の女が釘を片手に持ちユックリと乳房を机に打ち付けられた女に近付き太股を両手で開こうとするが抵抗して脚を閉じている。
「イィー」
「ザグッ！アギャア！」
脚が緩むと股の間に手を入れたが乳房が机に釘で固定されている為に身体を入れにくい。
「少し離れて！」
「ガヒュン！ゴドン！」

乳房を釘で打ち付けた部分を残してMが机を切った。
「ザグッ！」
「ググッ！」
左右の太股を刺され脚が緩んだ。
すかさず女兵士は股の間に身体を入れた。
目の前には机片の重さで伸びた白い乳房と産毛のような陰毛の身体が有る。
「どう？話す？」
「フグッ…しら…ない…」
「あ、そう：構わないからオマタに釘を打ちなさい。」
グイッと褐色の肉のビラビラしたヒダを引っ張り釘を肉のビラに当てる。
「アンタ！そんな事をしたら！ころ！」「カン！」
「ヒャギ！」
銀色の釘が肉のヒダを巻き込みながら木の椅子に打ち付けられる。
「カン！カン！カン！」
「ウグッッッ…」
女兵士がもう一方の肉のヒダを引っ張り釘を打つ。
「カン！カン！カンカン！」
「アグクッ！アンタ！絶対に殺してやる！」
女兵士はユックリと立ち上がり道具箱かはドリルとハンダコテ、簡易バーナーを持ってきた。
「アグッ！グ～ウ！」
油を拭いた布切れを捕虜の女の口に押し込む。
工具をジッとみてハンダコテを手にした女兵士は転がっている延長コードを捕虜の女の近くに置き、ハンダコテの電極をコンセントに差し込んだ。
「イヤ！言うから！言うから！」
「で！何処なの？」
捕虜の前に地図を置く。

「ココから西１０キロ壊れた鉄塔から北に２０キロの場所…。
アタシが案内するから…」
「ジェーン、その裸の捕虜は動けそう？」
「はい！、鞭打ちで数発叩いただけなのでまだ元気です。」
「パン！」
白い尻に紅いミミズバレが何本も入っている。
「その子に道案内をさせるわ…この子は…拷問して終わりね」
騒がないように猿轡をして裸に男物のジャケットだけ羽織らせる。
ぎりぎり、下の毛は隠れる。
「ジェーン、ゴクモン王、入れていて！逃げないように…」
ジェーンが紅い玉を取り出し道案内の捕虜の膣に押し込んだ。
「へ～アソコをそれで焼くんだ…アンタ、拷問師の素質、有るね…」
「ハグッアグク…」
釘を打ち付けた肉のビラは動かない。
脚も椅子に拘束されている。
ハンダゴテを手にした女兵士が半開きの膣にハンダゴテを押し込んだ。
コンセントを入れて電線のスイッチに手をやり捕虜の女の眼の前でスイッチを入れる。
「フ～フ～フ～」
最初は冷たかったコテも段々と熱を帯びてくる。
「ガチャガチャガチャ」
「ブイーン！」
手にはサンダーを持っている。
普通は錆取りのヤスリを円形の円盤にしている。
「ギュイーン！」
コンクリートの柱に当てるとズブズブと入っていく。
女兵士は刃をコンクリートカッターに変えていた。
「アグッノー」
膣からは白い煙が出だした。

「グチュグチュグチュグチュ…」
下腹部から何かが煮込む音がする。
「ブギーー！」
豚のように叫ぶ。
ユックリとコンクリートカッターを乳首に木の付いた垂れた乳房に当てる。
「プップップップップシャー」
豆腐に箸を置くようにスルリと回転する円盤の刃は乳房に滑り込み乳房と肋骨の境を切り裂いた。
「バーバーバー」
膣に押し込んだハンダゴテの金属部分は膣を巻き付けてジュージューと音をたてている。
もう片方の乳房にはを女兵士は近付けた。
…つぎは？…
「あの建物です。」
戦場にさ不似合いなビルが建っている。
装甲ジープを止めて先に裸の捕虜を外に出す。
「久しぶりね！M！T！」
何度か聞いた声がする。
「アタシだよレディCだよ。作戦変更。政府側からゲリラと大国側に付くよ。本部からの命令！」
「サー！」
「ギャビ！」
膣にゴクモンを入れられていた道案内の女兵士の下腹部が吹き飛んだ。
「あれは？」
「あれは、ヨーロッパ支部のレディL、レディNが製造した形状記憶炸裂弾です。
」
「へ…ぇ…」

「こうして元に戻ります」
ビクビクと動く女から赤いトゲが何百も生えた球体の一部分のトゲのない箇所を押すと元の小さな球体に戻った。
「へー面白い物を作るね。」
「で、アタシ達は？」
「政府軍の拠点の地図は？」
「は！」
「おい！この地点に自爆ナパーム弾」
「お前達には大統領府に…男は抹殺、女は売り飛ばす…」
「ヤー」
3人は装甲ジープに乗り込み大統領府に向かった。
…ギャイーン…
「アガガ…ガガガガ…」
両乳房を切り落とされ口からは泡を吹いてる。
アソコは焼けて膣癖、肛門と焼いて椅子をこがしている。
「キーン」
「ギュン！ドパーン」
建物が炎に包まれた。
捕虜は椅子に座ったまま、女兵士は乳房を手にしたままで炎に包まれた。
条約では禁止されたナパーム弾だが燃焼の際に廻りの空気を一気に吸い込み真空にするので人間は即死する。
違う考えをすれば人道的な武器とも言える。
大統領府に着いた3人は装甲ジープから降りて大統領府に入った。
少し違うのはいつもは特殊パンツを履いたMがスカート姿だと言う事。
「アハ～アァァー」
ジェーンがMに付けたバイブレーションが動き出す。
喘ぎ声と一緒にピンク色の煙が股から吹き出す。
「ガハ！グバッ！」

男達はバタバタと倒れる。
女は欲情して股を押さえてしゃがみ込む。
「バタバタバタ…」
「本部の大型ヘリが来たわ。男は全員始末して」
「パス！プシュン！」
大型ヘリの格納庫が開きゾロゾロとガスマスク姿の男達が降り最後にレディBが降りる。
「女は空港で貨物飛行機に載せて！」
ドカドカとマスク姿の男達が政府庁舎に入り頭に頭巾を被せた制服の女性、軍服の女性、スーツの女性を肩に担ぎ庁舎から出て大型ヘリに載せる。
「T、老女は始末して後、大統領夫人と令嬢を連れてきて」
「ジェーン、行くわよ」
簡易マスクを付けたTと防護マスクのジェーンが政府庁舎に入って行った：。
「M、次はゲリラと大国の特殊部隊の殲滅よ！」
「あの大国の依頼では？」
「いま、別の大国から倍の額で買うと有ったのよ。ゲリラの若い娘と特殊部隊の若い娘よ！」
「パン！パン！」
「ガチャ」
「パン！パン！」
銃を持った老婆を数人、絶命させて大統領の脇に倒れ身悶えている身体に縋る娘を抱き抱えてTは大統領室を出た。
Mは大統領婦人に袋を被せ肩に担ぎ上げた。
「お疲れさま。その足でゲリラのアジトと特殊部隊のアジトを壊滅させて」
「新たな買い主が決まったのですか？」
「そうよ。ココに基地を置きたい世界の警察よ。」
「Mとジェーンは特殊部隊のアジト。」

「Tはゲリラのアジト。もう中東系は良いから殲滅して来て」
「Mは女は生け捕りだから男だけ殲滅」
「M！エアバイクがあるからそれで行きなさい」
「T、これが地図。一気に小型核でもいいわ。」
「バリバリバリギギュン！」
白煙と砂埃を上げてゲリラのアジトに向かった：
「ココだわ。」
バイクに付けたスマホのＧＰＳが眼の前に有る学校を示している。
「小型核…バード型で良いかな？」
バイク後部にあるケースの中には鳥型のドローンが有る。
真っ青なボディ。
ケースから取り出して専用スコープで目標を定めてスイッチを押すだけで自分で飛び目標で爆発する。
建物に旗がひらめいている。
「アレかな」
スコープを覗き旗に標準を合せて鳥型ドローンを飛ばす。
スグにバイクに跨りその場をTは離れる。
入り口に銃を持った兵がいたが気付かない。
「パタパタパタパタ」
ハチドリを模したドローンは音を立てない。
旗に当たった瞬間
「パン！ドドドドーン」
数キロは離れたTの体にも震度は伝わる。
「こちらT、目標殲滅」
「ビリビリビリビリ…」
バイクのサイドミラーが爆風で揺れる。
超小型核が出来て戦争が変わった。
計算されビルを一棟だけ消し去る事も出来る。
勿論、除染はビルの跡のみ。
「バリバリバリバリバリ…」

「レディC！作戦終了です。」
「そう、もうスグ、オスプレイが着くわ。貴女と貴女の部下は女をマダムに…」
「ガラガラガラガラガラ…ギキッ」
「ブルブルブルブルブルブル」
「Mとジェーンが装甲車から出て来た。」
「Mはこの少女を本部に渡して…」
「では、作戦終了！解散！」
Tとジェーンはヘリに乗り込み空港に向かった。
巨大輸送機を改造した人身売買専用機内は操縦席の後に簡易手術室、その後ろに天井から鎖が吊るされ手錠がぶら下がる部屋。そして格納庫を改良した特殊室。
特殊部隊では数人のナースがアラブ系の女達を裸にして四つん這いにし、尻の穴に先が尖端から根本にかけて数珠が連なった形のホースを入りれホースの蛇口をひねる作業をしている。
「ジェーン、ゴム手袋をしてソレを尻の穴に突き刺して蛇口を撚るだけだから。」
ジェーンは言われるがままに数珠が繋がった謎のホースを手にして四つん這いの女の褐色の尻に少しピンク掛かった尻の穴に先を当てて押し込んだ。
「おおおお…おお！」
ズズズズズっと根本まで数珠が回転し簡単に入っていく。
「がはぁ…あぁ…」
腹が膨れ上がると眼をトロンとさせて口からはヨダレを垂らす。
「あ！おお…おお…」
「ズズ…ズ…ズズズズ…」
膨らんだ腹が萎んで行く。
「先生、これは？」
「あぁ…自動内容物の排泄機と体臭改善機。アラブ系と白人とは食事、生活衛生等は違うでしょ？だから腹の中を全て出して奇麗に掃

除と特殊な薬剤で体臭改善」
向こうの白人は日本に着いてから。
大型輸送機は夜の空を日本に向けて飛行した。

お歳暮　豊胸手術と脂肪吸引

「ぎ…ぎぎぎ…」
「ガチャン！」
「うぐっ…破裂する…」
裸の女が天井から吊るされ両脚首と後ろ手に縛られて横から見れば腹を中心にくの字に折れ曲がり吊るされている。
女の背中には龍の彫物と牡丹が散りばめられている。
白い太腿にも牡丹の赤い彫物。
うめき声を上げても涙を見せずに女はレディＴとジェーンを睨んでいる。
眼は血走りレディＴを見る。
「その眼、アタシは好きよ。睨まれるともっと虐めたくなるのよアタシ…」
「あっ…！」
針が長い注射器を吊るされた女の乳房の付け根から刺すとズブズブと針が乳房に入っていく。
「あ、ここね。」
「キュッ」
Ｔが注射器のシリンダーを引くと空の注射器に透明な液体がみるみる貯まる。
「ポン！」
シリンダーを抜くと乳房の中の液体は注射器を通りバシャバシャと床に落ち水溜りを作る。
「カシャン」
乳房の下に置いている秤の針が上に上がって行く。
「あら…アンタ、何リットル胸に入れたの？」
「ああ…やめて…」

「さっき迄の威勢は？男達がいないと出ない？」
「ジェーン、そちらの胸にもはじめて」「はい。」
左側の乳房にも同じように針を刺し乳房の中の水を抜く。
「バシャバシャバシャ！」
萎んだ乳房が秤の上でたらんと垂れている。
「次はコレを入れて上げるわ」
銀色の液体が入った容器を注射器の中に入れだした。
「な…なに…怖い…」
「大丈夫、ただのシリコンよ…特殊なね…」
「カチン…ジューッ」
「ガシャン！」
「え？何？何を入れたの？」
「はい、次ね。ジューッ」
「ズン…ギシッ…」
「なんか…オチチ…引っ張られる…」
「もう少し…ジューッ」
シリンダーを押す。
「ガシャン…ギキッ」
「何よ！何で胸が下に引っ張られるの」
「それはね。このシリコンは水銀と特殊シリコンを混ぜた物なの…今で8キロかな？でも…Cカップよ！まだまだ入れないと前のEカップには成らないわよ。オッパイ好きな会長に嫌われるわよ」
「え！それ駄目ぇ！」
「じゃあ次はコレね！」
「また！何なの！」
緑色の液体を注射器に入れシリンダーを押す。
「あ！あ！あー膨れる！膨れる！」
乳房はグングンと膨れメロン大の大きさになる。
はちきれんばかりに膨らみ乳輪は伸びで乳首も伸びで乳輪に少しの膨らみに成っている。

「ガシャン…」
「あら…片方で１０キロも有るわ。…これ、下の秤を外すとどうなると思う？」
「豊胸手術した乳房の付け根の皮膚は薄いですから胸が身体から離れますね」
「ジェーン、正解！」
「もう辞めて！言うわ！」
「長野県軽井沢町…」
「わかったわ！」
「Ｒ、住所を聞いた？」
「Ｐ、敵は何人だろね。たくさんいればいいなぁ」
黒いセダンには運転席に金髪の真っ白な肌の黒いサングラスの女。
横の助手席には黒い服に赤い髪の少女。
夕暮れの山道を巧みに飛ばし住所の場所についた。
軽井沢の駅前から少し離れた旅館。
「ア…ン、ヘヤハアイテマスカ？」
フロントでＲがカタコトの日本語で聞く。
旅館は会長が来た時は貸し切り状態にしている。
「え、え～本日は貸し切りで…弱ったなぁ…」
「女将！」
着物姿の老女が暖簾をくぐりＲに近付いた。
「頭…外国の方が２人、一人は少女と一人は２０代後半、親子と思うんだけど…一泊、よろしい？」
「一応、身体検査に応じれば構わんよ」
「身体検査と持ち物検査に協力してくれれば良いわよ」
流暢な英語で話かける。
「オ、ＯＫ！」
女将がＲの身体を触り調べる。
次に金属探知器で身体を調べる。
次にＰの持っているクマのヌイグルミを金属探知器で調べる。

「何も異常は無いわ」
「こちらの部屋に成ります」
女将が部屋に案内する旅館の本館から離れに掛かりる橋に黒いスーツの男達がたむろしている。
「アチラは貸し切りですので…近付かないでください。」
PとRは部屋に通された。
「部屋に食事はお持ちします」
流暢な英語で終始、案内をして部屋から女将は立ち去った。
PがTに連絡をする。
「あ、その女の情報に間違いは無かったわ。連絡はもういいわね。始末しても良いわよ」
「馬鹿ねP、彼女はマダムに渡すのよ。そちらも若い女が居たらさらってね。殺しちゃだめよ」
「わかったわ。お歳暮ってやつね。」
「そうね…そんなもんよ」
「さて…ジェーン、向こうはコレから全て片付けるわ。アタシたちも子を梱包してマダムに送りましょう」
「ジェーン、ニードルに吸引機を付けて」
「はい。先生！」
鉛筆のように太い針が女医に渡された。
普通は麻酔をして脂肪吸引に使う機械を麻酔をせずに吊るされた女のパンパンに膨らんだ乳房に突き刺す。
「ぎえ！」
ズブズブとメロン大のパンパンに膨らんだ乳房に入れると機械のスイッチを入れた。
「ズ…ズズズ…ズ…ズズズ」
みるみるうちに乳房は萎み吸引タンクにはグリーン、銀色、赤、白の液体が溜まる。
「ズイッ」
吸引機に何かが詰まった。

乳房内の豊胸のパックのビニールが詰まった。
「ジェーン、滑車を廻して女をおろして」
「ガラガラ…ガラガラガラ」
眼を泣き晴らし、髪を振り乱した女が床に横たわる。
胸からは血がでている…。
特殊止血剤を傷に塗り大きめの絆創膏を貼る。
「どう？出来た？」
女医が大型の布団圧縮袋を持って来た。
「ジェーン、脚を持って」
女の手脚を持ち袋に入れるとチャクをして…
「あ、コレを咥えないと貴女、死ぬわよ」
口にビニールホースを咥えさせてチャクを閉めた。
袋の横に有る空気を抜く穴にどこからか持って来た掃除機のホースの先に当ててスイッチを入れると
「キュイーン」
袋の空気を吸い出し袋が女に張り付き拘束する。
「良いわよ」
店に上下黒の宅配業者の男達が入り女に伝票を貼り、巨大なマネキン用の段ボールに入れた。
「先生、この入墨ならマダムも喜びますよ」
「でしょう。だから生かしたのよ。マダムに宜しく…」
「分かりました。お荷物、預かります」
黒い宅配便は入墨入りの女が入った段ボールを台車に乗せて店から出ていった。
「さて…帰るかな～朝方には旅館に行った娘たちも帰ってくるし朝ご飯ぐらいはね作ってあげないと」
女医は女を拷問した後は上機嫌になる。
暗殺者の仕事はスグに死ぬ為、余り面白く無いそうだ。
…軽井沢・旅館…
部屋に入ると白人の金髪の女が浴衣に着替える。

大きな白い胸が浴衣のあわせた部分から見え浴衣からは乳首の尖りが見える。
「いけるか？」
少女が大人の声色で話かける。
「いつ見てもデカイ乳だなオマエ」
「ブチッ」
クマのヌイグルミのアタマを少女はねじ切り中の綿を抜いた。中から強化プラスチック製の弾丸と中東でも使われたゴクモンの改良型の白い弾が数十発でてくる。
「ベリベリ！」
ヌイグルミの胴体部分を少女の小さな手がポテトチップスの袋を開けるように左右に開く。
同じように中からピンク色のサイレンサー付拳銃と弾が出てくる。
特殊な綿は中身を写さ無い加工をしているので見えない。
後、高反発に成っており握り締めても中身には当たらない。
「さて…行くわよ」
幼い声で少女は言いピンク色のオモチャにしか見えない拳銃を持ち笑いながら廊下に出た。
「チョットマチナサイ」
寸足らずな浴衣に金髪の髪をした女が後を追う。
傍から見れば外国人観光客の親子が戯れているようにしか見えない。
テクテクと歩き離れに向かう少女。
橋に立っていた黒い服の少女に気付いた男達、二人が少女の前に立ち塞がる。
「コラ、ココから先は駄目！」
「何いってるのゴリラ？」
外国語なので男達に意味は伝わらない。「オゥ、アリス！ゴメンナサイネ！」
金髪にＪカップは有る胸を浴衣で隠しても隠し切れていない。
眼は垂れて唇の横にホクロ。

昔のハリウッド女優の感じがする女が現れると男達は立ち上がり鼻の下を伸ばし股間が自然とムクムクと膨れる。
「ああ…良いですよ。怒らなくて！」
「オトコって奴は…」
勃起しかけたペニスと睾丸を左右の手で掴む。
「？手？」
「フン！」
少女の気合いと同時に小さな子供の手がレスラーのような筋肉質の太い腕になり膨らみかけた男性器を引きちぎった。
簡単にズボン、パンツの生地事。
「アガ…」
男達は膝から崩れ股を押えて口を開けている。
「はい！口封じ」
太い腕が男達の開いた口に男性器を押し込むとペニスが喉で詰りビクッと一回して身体は動かなく成った。
「アハキャハ！アハ！」
誰も入れないはずの離れに少女がオモチャの拳銃を持って笑いながら歩いて来る。
「何してんだ！橋にいたやつは？」
その後ろから乳をゆらし金髪の女性が小走りに近づいてくる。
男達の眼は全員が女を見る。
「プシュン！プシュ」
オモチャの拳銃が火を吹き男達の顔に穴が空き倒れる。
「何じゃ！このガキ！」
「パシュ！パシュ！パシュ！」
大きな乳房の下に隠していたＲの銃が男達の頭に穴を空けた。
「鍵は、掛かっているかな？」
「あ…しんどくなったわ…」
少女の身体がどんどんと巨大化する。
身長１８０になると赤い少女の髪の色は緑のボブカットに代わり裸

の身体は女性ボディビルダーのように変わっている。
「何も着なくて良いの？」
「コレから返り血を浴びるからじゃまだよ」
太い腕がドアノブを持つと簡単にドアから引き抜いた。
「あ…あん…いや…」
裸の中年男が裸の成人前の下の毛も生えそろわず、胸も膨らみかけている裸体を荒縄で縛り付け目隠しをして女の股間を舐めるのに夢中に成っている。
音を立てずに近付きアタマを掴むとスグに一回転させる。
「ゴグン！」
「あん…パパ…舐めて…」
小さな口にパンツを詰められ口を塞がれてアタマを振る女。
女の目隠しがズレる。
「…ウ！…」
「あらら…馬鹿だねこの子、さらうの辞めようと思ったけど顔を見られたらさらわないと駄目になったわ」
「R、この女をシーツで包んで、アタシは服を着るから。」
「流石にあのスーツは駄目か…」
廊下に転がる男達の死体からスーツとシャツを脱がす。
「少し小さくかな…」
１８０の身体が１７０に縮まり裸に直にシャツとスーツを着るとRの梱包で人とはわからなく成った少女を抱えると窓に歩いて行き
「R、先に駐車場の車に荷物を積むから部屋の荷物を頼むよ」
そう言うと窓枠を越えて外に飛び降りた。
「ドスッ」
ロビー前を通らず一度、道路までの急斜面を駆け上がり旅館入口から中に入り駐車場のトランクに女を投げ入れた。
鍵を開けて乗り込むとRがドレスを着て車に乗り込む。
「何だそれ？」
「Tにお土産よ。」

「あ…お歳暮か？」
二人が乗った車は旅館を後にした。
「あ！温泉、入らなかったわ。」
無邪気にRが笑いながら言う。車は林道を抜けて都心に向かった。

マダムのペット達　猿姦

「ウキーキーキキー！」
「ワーキャキャキャ」
「ウホーウホウホー」
「ヒギーッ！キャー」
「アブオブアブ…」
猿の叫びと女の叫び、喘ぎ声が木霊する。
「ようこそ、R、P、日本へ」
「マダム、はじめまして…」
「これが類人猿の檻よ。私の夢は猿と人間のハーフ。あの猿、ボノボは脳を改良して人間の性欲だけ入れているの。だけど猿の本能もあるから、あのメスの背中に有った入れ墨は剥がして猿の毛皮を移植したわ。」
「あれ？あの女…確か…先日の組織壊滅の時のクラブの女？」
「貴女、記憶力は凄いわね」
「背中の龍の入れ墨は剥がしてコレクションに太腿は剥がしたら猿が嫌がるからそのままにしているわ。
胸は大振りにして中に硬質シリコンを入れているわ。
猿の握力で揉まれたら普通の胸は潰れるからね…。
後はPの連れて来た女は…アソコよ」
指を指した方向には女が互いに手首と脚を縛られてハシゴのように列なっている。
「ひぎっ！痛い！」
猿が開いた股の女の性器に指をかけてうんていの要領で女体ハシゴを渡り始める。
「いーいやー裂ける」
指をかけた膣口と廻りの肉ビラ、大陰唇、小陰唇などが猿の体重で

下に伸びる。
その女ハシゴに二十歳前の旅館から連れ去った女は使われている。
「マダム彼女は？」
「そう…あの若さで性病持ち。治りにくい奴。普通は娼館の有る島に送るんだけどね。発症する迄はハシゴ。発症したら製薬会社に送り治療薬のモルモット。
あのまま世間にだしたら感染者が増えるだけ…」
「あぎーちぎれる！」
重力により垂れた乳房に猿が捕まり休憩している。猿が揺れるたびに伸びた乳房と背中の皮膚が突っ張り張り裂けそうになる。
「あぎゃ」
猿は身体を振りとなりの女の股に手を突っ込んだ。
「あぎゃ！」
猿の手がズッポリとフィストファックのように女の膣にメリ込み、もう片方の手で垂れた乳房を掴む。
次はあの時の若い女だ。
顔立ちを見れば清楚な顔をしているが悪い男に騙されたのか自ら男に付いて行ったのか全裸にされ身体を亀甲縛りで縛られハシゴの一部に成っている。
「ウキャ！」
「あぐっ」
股から下に垂れた荒縄に猿がぶら下がる。
長い髪は頭の後で団子に結んでいる。
「あの子、掴む所が無いから、あぃして補助で縄を垂らしてんの。髪は猿が掴んで体重を掛けたら頭皮ごと抜けてバイキンでも入ればスグに弱るから、ハシゴも１２時間交代。あのまま、ハシゴにしていたらスグに死ぬわ。」
「イダイ！痛い！乳首噛まないでよ！」
一人の裸の女に子猿が群れている。
「あ！いだだだ！噛んでる！噛んでる！乳首取れるー」

「マダム、アレは？」
「あ…母乳用の女だよ。自分の乳飲み子を放置して死なせた。旦那がどうにかしてくれと売りに来たからかったのよ。ほら、もう一人、来た」
「何ーいやーサルキライー！」
手足に拘束帯を着けられ肘と膝でしか歩けない。
「ウキャ！ウキャ！」
母乳のニオイで子猿が女に群れる。
一匹が背中に乗り顔を引っ張ると若い女は豚鼻になりアタマを上げる。
そのスキに乳首から滴り落ちる母乳のニオイで乳首に噛み付く。
「ぎゃーかんだー」
「あぎゃ！」
両乳房の乳首に子猿が噛み付き揺れている。
余りの痛さに女は跪く。
「アガアガアガアガ！」
先程の猿に犯された女は正常位でバンバンと猿に腰を振られて眼は焦点が合ってない。
「ウギャ！」
猿が果てて女から離れる。
「マダム、あの猿のペニス…でか過ぎません？」
「あははは！よく分かったね。ゴリラのペニスは立っても３センチ、ボノボは人間と同じ位の１５．６だけどアレは改良して黒人並みの２５センチにしてるのさ。普通のサイズなら女が気持ち良いだけだろ？アレは慣れるまでアソコを引き裂く痛さだよ。ほら、あの女のアソコを見てみな全部がめくれて出てるだろ？」
確かに女の穴は拡張しビラも捲れ膣口も外に捲れている。
「ゴラァ！アタシを誰だと思ってんだ！」
「ほら、ボノボの新しいセックスパートナーだよ。もうスグ、泣くから」

「何す、ウギっ！」
女の手足に拘束具をはめて肘膝を固定する。
女は四つん這いになりながらもまだ喚いている。
「てめぇら全員、殺すからな！あたしの…」
背中に毛皮が掛けられ拘束具と繋ぐ。
「ホレ！」
ボノボの尻を叩くと女に駆け寄り濡れてもいないアソコに黒人並みのペニスを当てて突き刺した。
「いたい！いたーい！」
「おマンコに木の棒！入れた！」
「あぎゃー裂ける…辞めて！」
濡れてもいないアソコをボノボのペニスがズブズブと入る。
「あんな硬さある？」
「猿のペニスには骨が入っているんだよ。確実に一度の交尾で妊娠させるように」
「あぎゃ！あぎゃ！ざげるー」
女の穴は裂けて鮮血が滴る。
「ガフ！ウギャ！」
「グゲーギャーガー！」
女は獣のような咆哮を上げる。
「ガガガ…」
「ギャフ！」
女の身体から力が抜けた。
てを床に拡げて顔を床に付けて猿の腰の動きにあわせて顔が床を滑る。
「あら～気絶しちゃった。コレで猿が果てるまであの状態よ。」
「マダム、あの状態で猿の後尾は何時間、有るんですか？」
「あの猿で１２時間かな？気に入った穴で最高２４時間。
その女は１日で股間の筋肉、筋が切れて壊れた。まぁ道場流しだけどね。」

「この檻の中でマシなのはハシゴのコ、達だよ。病気が猿に伝染るのも怖いしね。」
「隣りの海獣の檻も見るかい？」
「海獣？」
「オットセイやトド、アシカよ。ここは獣姦物でネット配信が中心」
「アオ！アオ！アオ！」
「ヒギヒギ…イギ！」
鉄の箱からは頭と尻だけが出ている女が3人、並んでいる。
セイウチが女が閉じ込められた鉄製の箱に近づく。
女の尻の匂いを嗅ぐと股にあるペニスがムクムクと膨らんだ。
「なに？有れ！腕ぐらいは有るわよ。」
「あれで６８センチ。最高は８０センチは有るわよ」
「ほら、入れるわよ」
飼育員が女の股に有る銀色の蓋を抜いた。
真っ黒な穴。
薄っすらと奥に赤い肉の壁。
「ガブッガブッ！」
「ビダン！ビダン！」
身体を波打ちならがトドが動きポッカリ開いた穴にペニスを入れようとするが入らない。
ペニスを飼育員が手に掴み女の穴に誘導する。
「ガブッフッ！」
トドがペニスを女に突き刺す。
「ギャー！ゲー！」
叫びながら口から反吐を吐く。
７０近いペニスが身体を貫く。
固定された身体は動かず、内臓が口に向って突き上げられる。
子宮が腸を押し上げ、腸が胃を押し上げる。
胃の内容物が口から外に出される。
「オゲー！ゲー！」

「オブッ」
口から赤い肉の塊を吐き出した。
赤い塊を出した途端に女は動かなく成った。
トドも１０回、腰をグラインドさせて果てた。
「ガフ！ガフ！ガフ！」
「そのメスを水槽に入れなさい。まだ、びくついているから生きてるよ。」
「ギュイーン！ガシャン」
女が固定された鉄の箱の頭上に丸い円盤が付いたクレーンが止まり
円盤が下に降りてきて女の鉄の拘束箱に降りてきて天井に付いた。
「ガチン！」
電気磁石の円盤は箱にピッタリと付き女を持ち上げると移動をし、
側面が透明のプールの上で止まると…
「ガジン！」
箱をプールに落とした。
「ドブン！」
プールの底まで一気に鉄の拘束箱の中の空気を出しながら沈む。
キラキラ！キラキラキラ！
金色に光る金魚のような魚が女の股のポッカリ開いた穴、口、眼、
に群がる。
「カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ」
女がもがくが魚は狂ったように女の穴から体内に入る。
「マダム、あの魚は？ピラニアにしては小さいし肉食の金魚は？」
「あ…あれね。改良して作ったミニピラニア。体長は金魚大だけど
食欲はダイヤモンドピラニア並みに有るわよ。牛なら一時間、人な
ら１５分頭ね。鑑賞と処刑用を兼ねて売れるのよ。」
「あぎゃー！」
「マダム今日、連れて来た女が子猿に乳房をもぎ取られました。」
「え？子猿だよ？成人した猿が混じってないかい？子猿に乳房をね
じ切るまで力は無いよ」

「ウギャ！ウギ！」
「成人の猿が紛れてました…」
「乳房が無い女は使い道無いじゃない。貴女、水槽に放り込んでおいで！」
飼育員の女が乳房をもがれて胸から血を流す女に肩を貸して水槽上部にエレベーターを使い上がって行った。
むき出しの昇降機にメッシュの金網の業務用のエレベーターで水槽上部に有る水槽を縦に走る橋の上に肩に女を貸した飼育員が橋の上を歩く。
女の血が水槽内に滴り落ちて水面がキラキラと光りながらバシャバシャと水しぶきを上げている。
「ガチャ」
橋の両サイドに有る扉を開けて女を落とそうとした瞬間、プカリと鉄の拘束箱に入れた女の頭の骨が浮いて来た。
「アギャーイヤー死にたく無い！」
女は肩を貸していた飼育員の女をガシリと掴んだ。
「何するんだい！この女！」
「あ！」
二人は縺れながら水槽に落ちた。
「ドポン！ドブン！」
「アギャアギャアギャー」
「ビチビチビチビチビチ…」
「カチカチカチカチカチ…」
「ペチャクチャペチャ！」
「ガボアボアボアボガボ…」
乳房をムシられた女にはスグにピラニアが集り傷口から女を食べはじめた。
「あ！あー！イヤー！助けて！助けてよー」
「あぎゃ！噛んだ！噛んだ！助けてー」
「あ～アレは助かんないわ。プールサイドにハシゴは無いしね。自

分で振払い泳いで逃げるしか無いわね。２０メートル泳げば浅瀬があるからそこまで泳げればね。」
「カチカチカチカチ…クチャペチャクチャペチャ！」
「あがが…口に入って来る～！ギャー乳首、噛まれた」
「あがが…ガボッ！」
飼育員の女も水中に消えだ。
「マダム、電話が入ってます。」
「誰から？」
「中国、東南アジア地区担当者です。」
「はい…はい、はい。で彼女は？そう…」
「貴女達、スグに香港に行ってくれない？」
「何か有りましたか？」
「レディMが殺されたわ」
「え？彼女が毒霧は？」
「効かなかったから相手は女でしょうね。穴は全て焼かれて塞がれていたそうよ。」
マダムがスマホの画面を見せた。
画面には口を焼かれ、股を焼かれ火傷により塞がれた焼豚のような女性器が画像に写る。
「Mの任務は？」
「香港に有る人身売買組織の壊滅よ。」
「でも…相手にも貴女達観たいな特殊能力者が居るわね。貴女達で香港の組織の壊滅を命令するわ！」
「P！一度、ヨーロッパに帰国するわよ。Tは？」
「アタシはクリックに帰り先に香港に乗り込むわ。ジェーン、武器庫で特殊バレットとサイレンサー付銃、後は解毒剤をお願い。」
「ハイ先生」
ジェーンはスタスタとマダムの館に有る武器庫に歩いていった。
「久しぶりにたぎるわ。」
自分の乳房を握り唇をチロリと舐めた。

「アギャギギギ…」
「へー流石にアルファベットの付いた女だね。無理しなくて叫びなよ。」
「あがが…」
銀色の指がパンティの縁を弄り肉のヒダを押しのけ女の肉の穴にズブズブっと入っていく。
「あず…あず…い…」
「まだ６０度よ…１００度にして穴を焼いてあげるわ。」
「いがぎ…」
女がスカートに手を入れてペンをガーターベルトから抜き、顔を抑えている女の太腿に近づけ、ペンのノックを親指で押した。
「パシュ！」
「アッ！何？コレは？悪あがき？」
「バチバチッ」
「あがが…何よ！」
そのスキに押さえられた女は逃げた。
「チッ！」
「ブチッブチッ！ズボッ！」
「変なオモチャを使って！」
「ボッ！」
手に握られたゴクモン（特殊形状記憶弾）は女の手の中で燃えた：
「カイ！あんた、下手したね。」
「なに？イプシロン…」
「自分じゃ手術、出来ないでしょう。」
「車、回して。」
黒いワゴン車が表通りに止まり、中にカイ、イプシロンが乗り込ん

だ。
「あの…女も顔とアソコを焼いたから遠くには逃げられ無いから…部下に探させて…」
「バチャ…バチャン…ジャボン…」
「はぁ…はぁ…はぁ…」
フラフラと下水道を通り、朽ちた鉄のハシゴを登り、マンホールをズルズルと横にずらしエージェントEはふらふらに成りながら中華料理屋の裏口から店内に入り、入口直ぐ横の階段をズルズル…ズルズルと摺り降りた。
鉄の扉を開け中に転がり込むとジェーンが駆け寄る。
「ジェーン、スグに服を脱がして治療よ。」
唇から頬に火傷が有り喋れなく鳴っている。
服を脱がすと掌の形に火傷の跡が有り、右の乳首は炭化して取れかけている。
「ジェーンは身体の火傷の跡と炭化した乳首の切除と焼かれたアソコの処理。早く処置しないと危ないわ。」
頬から口にかけて焼かれた跡を女医はメスで削ぎ落とすと太腿の皮膚を切り抜き頬から唇に移植する。
ジェーンは炭化した乳首を乳輪から切除して人工の皮膚を張る。
身体の掌の皮膚も切除して人工の皮膚を張る。
3時間後に焼かれたエージェントEの手術は終わった。
「アグ…」
何か描くジェスチャーをEはしている。
てま
麻酔で朦朧としながらEはメモに走り書きをした。
「ギリシャ文字の女…Mを始末した…掌が高温…手袋もしていない…」
「ギリシャ文字の女なの？」
一通り書くとEは眠りに就いた。
「もしもし、ヨーロッパ支部？情報局は？あ！情報局？アテネの淑

女って復活したの？」
「え？ヨーロッパ支部のエージェントが何人か消えてMが調査中に殺られた。何か少女誘拐とか女性の失踪は？多数頻発？ヨーロッパ支部からアルファベット付きは何人か派遣出来る？コチラも東南アジアから呼ぶわ。特異体質同士の戦いだからエージェントは下げなさい。」
…香港湾上タンカー内…
「ヒギー！」
「貴女の組織は？名も無き医師団？」
「違います！違いますぅー」
「普通の拷問では口を割らないか…」
カイが女の服を持った。
手が紅くなっていく。
「カイ！駄目よ！貴女の高体温は微調整出来ないでしょ！アタシがするわ」
イプシロンと呼ばれていた女が捕まったエージェントの女の服を触った。
「パリン！パリペリ！」
布地が凍り卵の殻のように着ていた黒のスーツが崩れ落ちる。
「あら…可愛らしい下着…」
ブラ紐をつまみとペキン！と割れた。
「ヒャ！冷たい！」
「パキン！ペキン！ペリ！」
ブラ紐が切れたブラジャーは下に落ちパンティの横の紐が切れたパンティは股の間にヒラヒラと落ちる。
「さぁて…アタシの指でこの小さな乳首を摘めば…どうなるかな？」
小さな乳首をイプシロンは指先でつまむ。
指先の血流が減り白い指先が青く変色して来る。
「アヒャ！冷たい！」
「パキン！」

乳房の先でプラスチックの棒が割れる音がした。
「イヤー乳首が折れた！」
ピンク色の球が床に転がる。
「まだ…いわない？」
イプシロンがしゃがみ込むと女の股を拡げさせてチロリとクリトリスを舐める。
「ヒャイ！」
感じて声が出たのではなく舌の冷たさでエージェントの女は声を上げた。
「ふーっ」
エージェントの恥丘にフサフサと生える陰毛に息を吹きかける…。
黒い毛が白く変色して行く。
「邪魔ね」
「バラバラパラパラ…」
手で陰毛を撫でただけで全てチリのように床に落ちる。
「ヒャイ！」
「貴女、そこに座りなさい。」
「ほら！早く！嫌ならアノ女にアソコを焼かせるわよ！」
大事な場所を焼かれるのだけは嫌だ！スグに女は座った。
M字に開脚した股にはツルツルの土手と土手の下に赤貝のように肌色とピンク、ベージュでグラデーションされた肉ビラにピンクの凹凸のある女の秘所がイプシロンの眼の前に有る。
「綺麗な色をしているわね。余りセックスもしていない…クリが包皮から顔を出しているからオナニーは毎日かな？」
短い金髪に蒼い眼で見つめられエージェントの女が興奮している。
ピンクの肉ヒダから乳白色の愛液が垂れる。
「あなた？何人？東洋人はわかるけど…」
「わ…かんないです…」
「そう…じゃあ凍らせて…考えるわ！」
「もう一度、聞くわよ！アジトは？」

「あ…あたしは…したなので…しりません…」
「はい…わかったわ…」
「スーッ…フゥーッ」
「アギャ！イタイ！コオルーツメタイ！」
垂れてた愛液が凍り
下に落ちる。
女の秘所に白い霜が付く。
イプシロンが赤いリップを塗った唇を女の股間に近付けて膣口に吸い付く。
「ふーん！ブーッ」
鼻で空気を吸い込み膣内に冷気を吹き込む。
「あ～ああ！チメタイ！イタイ！おマンコ！凍る！」
「ドサッ」
膣内と子宮を凍らされた女が横たわる。
イプシロンのハイヒールがヘソの下、子宮を踏みつける。
「パリッパリッパリッ」
腹の中からコップのような物が割れる音がする。
「最後よ…本当に知らない？」
「ほ…ほんとうれす…しらない…」
「わかったわ。」
真っ赤な唇がエージェントの女と重なると鼻で息を吸い込み、イプシロンは女の体内に零下３０度の冷気を入れる：。
「ビクッ」
エージェントの女はガクッと頭を下げると動かなく成った。
イプシロンがカイに路上のマンホールの蓋を開けるように言うと面倒くさそうに片手で２０キロはあるマンホールの蓋を開ける。
「はい、さよなら…」
マンホールの穴にエージェントの遺体を投げ込む。
「バガン！」
カイが蓋を閉じる。

「どうするイプシロン？小物しかいないよ」
「バシャバシャバシャ！」
「いたわエージェントDよ。」
「何？この殺され方！胸が凍っているわ。」
「早くメスを出して！」
黒いスーツに身をまとった女がエージェントDの首の辺りを髪を掻き分け、メスを入れる。
「コレに録画されていたら相手は特定されるわ。」
「Dは？」
「そのままよ。下水なら小動物に食べられ痕跡は無くなるわ。」
…香港某所別荘…
「アギギギャー」
乳房の掴まれた所が焦げて煙が立ち昇る。
「イプシロン！お前が付いていて相手の情報も聞き出せずに一人、殺したのか？」
「オメガさま…殺した女は身体から毒をだすので…毒にビックリしたカイが高温に…申し訳有りません」
「貴女も電流を流したいけど防衛本能で冷気を発するからね」
「後、2日後に3人が合流するわ。」
「え！シータさまは…」
「勿論、来るわ。貴女をお仕置きは彼女しか無理だから…」
イプシロンの体が小刻みに震えている。
「何を震えてるの？シータがくるから？だって…貴女のお仕置きはシータしか出来ないじゃない」
「ねぇカイ！」
「バリバリ！バリバリバリバリバリ！」
「アガハァ…」
両乳房からユラユラと煙と紅く発熱した蜃気楼が乳房から立ち上がる。
…香港・某所…

「カチャ」
「おい！カイ！俺にやらせろ！」
「相変わらずだなぁ」
「これ…ギリシャ語だね。ギリシャならアテネの処女？」
「あの組織は１０年前に壊滅させたのでは？貴女、作戦に参加したわよね」
「したけど…最終の後始末はヨーロッパ支部のＢ達がしたの…」
「１０年前には４つの組織が世界中に有ったわね。南米のアマゾネス、ヨーロッパのアテネの処女、中東の黒い魔女、私達、極東の名も無き女医」
「アマゾネスと中東はあたし達も参加したが大したことなかったが…」
「アテネの処女はあたし達と同じ…特異体質の集団だから手こずったわ。エージェント、ドクター…何十人か殺られた」
「ボスのアテナはやったケド…何人かは逃げたわ。」
「Ｗ、あの時は高熱を発する娘、いた？」
「いないわ。冷気の娘も…」
「じゃあ、建て直して特異質を育てた？」
「そうなるわね。」
「Ｗ、高熱は貴女で対処出来るけど冷気ね…日本からＱを呼んで、マダムの所で修行と称して試し切をしてるわ」
…日本・某所の竹林…
「アグッ…アガ…」
竹に何人もの男女が裸で吊るされたり竹と竹の間に足首を繋がれＹ時でぶら下がっている。
股を大きく開きＹじでぶら下げられたアヤの前にはＭ字開脚された若い女がいる。
「アギャ！グァ！ゲヘ！」
遠くの叫び声が段々と自分に近づく。
「ハギャ！」

眼の前でM字に開脚された女が頭からユックリと裂けて行く。
「バシャン！」
竹が戻る反動で女は左右に別れ竹からぶら下がって揺れている。
…次は…次は…あたし…
「ジリリン！ジリリン！」
「何なの？あらW久しぶり。え？Mが？
へ～相手は女なのね」
アヤの前には巨大な薙刀を持った少女が立っている。
真っ黒な黒髪を後ろに結び腰まで長い髪をたらしている。
少女の眼は涼しげで純日本風な横顔に唇に真っ赤な紅をさしている。
アヤは働いていた風俗店から金を持ち逃げして捕まり横浜に売られ性病検査に掛かり竹林の有る屋敷に売られた。
その三時間後には逆さまに吊るされ恥ずかしい場所を少女にさらしている。
「W、で？アタシは？今日の夜にそっちね。わかった！うん！じゃあ」
まるで少女が友達どの遊びの約束をしている感じで話をしている。
「あ！」
アヤと眼が合った‥
「た…」
「ビュン！」
「す…」
股から入った刃は真直ぐに腹の中心から頭まで一直線にアヤの身体を切り裂いた。
「バサバサ！」
ビクビクと半分に成ったアヤはまた動いている。
「夜かぁ…着くのは朝かな？朝食は朝粥かな？」
まるで旅行気分で長い薙刀を肩に担ぎ竹林を歩いているが笹を踏みしめる音はしない。
竹林の笹がザワザワと風に揺れ切り裂枯れた骸が揺れる。

香港夜曲

「シャー…シュィーン」
「ごめんね。これ貨物室に入れて」
1メートルぐらいの棒状の物　がはいる革のバッグを男に渡す。
「え！」
荷物を渡された整備の男がよろける。
「ぉ！重…」
小さな１５０センチも無い少女が片手で軽々と持ち、もう片手に日本刀を持ってる。
「コレは機内に持ち込むから…」
二人を乗せたジェット機はゆっくりと滑走路に出て両翼下のジェットエンジンから青白い炎を吐きながら暗闇に飛び立った。
「あ～お腹空いたわ～」
「今の時間なら夕飯、少し過ぎには香港に着くわ」
「Uは軽装だね。武器はダガーナイフとハンドガン」
「そうね…アタシの武器はお腹の子達だから…本格的な戦闘は貴女達に任せるわ」
別段、妊婦の様に腹が膨れている訳でも無いがUは下腹部を擦った。
他愛ない会話をしていたら眼下に波間に光る帆船、艦船の灯りが見え光は海から山に反り上がっている。
ビルぎりぎりに香港国際空港にジェット機は降り立った。
「う～ん…いつ来ても山椒の匂いはするね香港って…」
香港のエージェントが黒い小型バンで滑走路迄、迎えに来ている。
入国管理局も通らずそのままバンに荷物を積み車は滑走路横のゲートから外に出ると市街地に向かい走り去って行った。
…香港高級住宅街…
「ガチガチガチ…ギチ…ギチ…」

「ねぇ！U、アワビを食べてんのに！目の前に赤黒いアワビが見えるんだけど！どうするの？
邪魔だから殺すよ！」
吊るされた白人女性には日本語は通じない。
「わかったわ！今、動かすから！」
「何、探してんの？」
「クスコが…無いのよ！」
「え！それ探してたの？コレで代用出来るよ」
真っ赤な上海蟹を摘む銀色のトングを持って眼の前に有るアワビのヘコんだ中心に先の紅いトングを付け少女は手に力を入れトングを白人女のアワビの中心に捩じ込む。
「ガガ！ピギャー！」
「あ～暴れる！U！早くこの人、うごかして！暴れだした！」
「貴女！何をしたの？」
「クスコ変わりにトングを押し込んだ。」
「あなたねぇ…そりゃ暴れるでしょ…その紅い色、唐辛子とかジョロキアよ…」
Qはクスクスと笑ってる。
「何でクスコ、いるの？そのまま注射を子宮に打てば？」
「駄目よ！この子達、デリケートなのよ！子宮内で成虫にして活動させないと駄目なの」
「ふ～ン…要はその子達が脊髄液を泳いで脳まで行き乗っ取ったら良いだけだよね。脊髄に直に打てば？」
「もう！其れが出来てたらするわよ！アタシの専門は薬学よ！貴女も解剖学よね！二人とも脊髄注射、出来ないじゃない！」
「だね…Uに任すよ」
「ホントに貴女って…」
Uは手にした注射器を両手持ち吊るされた白人女性に近付く。
ジョロキア等の影響でピンクな肉の中は紅く腫れてきている。
「邪魔ね！」

トングの柄の部分を手で下げた。
「アグっ！」
膣の奥にぷっくり膨らむ山のような子宮経口が見えるん。
先に尿道のようにへの字口の穴が見える。
銀色の針先がへの字口の穴にあてがわれズブズブと針先が子宮内に沈んで行く。
「ハガッアガッ…」
「ジュ～ッ」
「アグッ」
シリンダー内の液体は全て子宮内に入って行った。
「あれ？もう一本入れるの？」
子供のような無邪気な声でUに聞く。
「もう一本は膀胱に打つのよ。膀胱から腎臓を抜けて体の血管から脳に行けば体の負担は少ないわ。でも腎臓を抜けれるかが心配なのよ。だから2本目の子達は時間差で孵化させるの。最初の子達が仕事を終わってからね。失敗しても彼女達が死ぬだけだから…」
シリコンゴム製の針を尿道口に当て針先をズブズブと尿道に押し込むと直に膀胱に到着した。
「ジジュ～ッ」
シリンダー内の液体は膀胱に全て入れられた。
「ねぇU！後の女は？使わないの？」
「あ～要らなくなった。あんたの試し切りにでも使いなさい」
「やったー！久しぶりの白人女性切り！日本ではいないんだよね…骨太だから対外人用に練習が必要だし暗器の練習台にしたかったし…ありがとう！U！」
喜び方は幼子がペットを購入してもらった感じだ。
「ねぇ！この女、試し切り用に処理していて！腹の中を空っぽに頭髪以外は全ての毛は剃って！頼むわね」
「ア～ア～…」
「動かないでよ…動くと心臓に刺さるよ」

少女の小さな手が操る銀色の糸は真っ直ぐに白人女性の豊満な乳房の頂にあるピンク色の乳首に刺さっている。
少女は髪より細い針を小さな手で動かしている。
少女の手が止まった。
「ふぅ～ここが心臓ね…次は決水の秘孔を突こうかな」
乳首に刺さっている髪の毛程の針を一気に引き抜いた。
「アゥン～」
女が生暖かい溜息を漏らす。
Qの扱う髪針は痛点を避け快楽点を通って体に入るので刺された人間は全員が悶る。
「よし…心臓迄の距離は分かった…次は新しい秘孔点を試そ！」
「ズルズルズル…」
乳首から長い銀色の髪針が出て来る。
長さにして５０センチは乳房内にはいっていたことになる。
「さてと…オマタから水を噴出させようかな…」
少女の手が金色の産毛の下のピンクの亀裂と褐色の菊のアナの間、蟻の戸渡りに伸び細い指で何かの窪みを探している。
「お？ここかな？」
銀色の毛髪を窪みに当て針先を突き刺すとズルズルと窪みに針が入っていく。
「ん？う…ん～ん！よし！」
「ビクッ」
白人女性の全身がビクッと硬直した。
下腹部がブルブルと震えている。
「ホレ！咬め！」
Qが女が履いていたパンティを女の口に詰める。
「アガッアガッ…アァ！アァアァアァ！」
震えてと共に膣口からドロンとカスタードクリームのような物を出すとタラタラと愛液をたらすと…次第に粘着性が無くなりサラサラの水のような愛液を流し始めた。

「アオ！オオオオ！」
「ブシャブシュブシャー」
噴水のように膣口から水が吹きだす。
「アオ～オオ～」
肛門からも水のような液体をダラダラと流しだした。
「この感じなら後、１０分かな？」
「ふゃ～たすけて～とまらない～」
「何か言ってるけど…アタシ、ギリシャ語は知らないし…。
」
「Ｑさま、後は？」
「あ～暖炉に入れるか店で出汁に使えば？ギリシャ女の出汁が出るんじゃない？」
「これ、連れて行って！後、一人、練習の女、いる？」
ガラガラと台車に載せられ白い金髪のミイラが修練場から連れ出された。
「くそ！何だよ！何すんだい！素裸にしてさ！」
暴れながら首に鎖を巻かれた女が入って来た。
「何だよ！この日本小鬼は！クソガキ！」
「元気だね…何処まで耐えれるかな？」
流暢な北京語で話す。
「お前！同胞か！助けろ！」
「僕の多節棍を試すのに丁度、良い人形だよ！ね！」
「一節！」
「ビュン！」
「バシン！」
「アギャ！」
「痛えじゃねえか！クソガキ！」
「まだ、元気だね！」
「二節、三節！」
「バシ！バァバン！」

女を叩くたびに節が増えて行く。
「ほら！」
「ビューッ！バシーン！」
「アガッアガーガハガハカハッ！」
背中から尻にかけて赤い血の筋が真っ直ぐに伸びている。
まるで鞭で叩いたような跡が背中に付いている。
「おい！その女！磔から外せ！」
「おい！お前！アタシに勝ったら解放してやるよ！それに金もやろう、どうだ？」
白い羽織袴の少女がドスの効いたキャピキャピした声で平気に金とか解放とか言う。
縛り付けられた女も地元では喧嘩が強いと評判だった。
「ホントだな！小鬼！」
「あぁ…勝てたらね…」
「カコン！カシュ！」
数珠のように別れた多節が一本の長い棒に変わり先から長い糸が垂れている。
「ほら！ソコの棒でも使って構わないぞ！」
全身、紅い筋だらけの女が落ちた棒を拾うと少女に棒を頭の上にかざし振り下ろそうとしていた。
「ヒュヒュン」
少女の棒が女の胸の辺り乳房の先で八の字を横に書いた。
「ビャン！」
簡単に女の棒の一振りを少女は避ける。
「ペチャ…ペチャ…」
「あぁ～～アタシの乳首が無い！」
「アンタの脚元に落ちた紅いグミみたいなのが乳首だろ！今なら医者で縫い付けられるぜ」
「あぁ～～アタシの乳首～」
「乳首が大事なら人のシマで売春するかね」

「カン！カシャン」
棍棒の反対側から槍がシャキッっと飛びだした。
女は夢中で乳首を拾おうと少女に尻を向けひざま付いてる。
「無防備だね…戦い中に尻を敵に向けるとは…」
「ヒュー…フン！」
「ァ！」
小さな声を上げ女はよつん這いで事切れている。
少女の股への一撃は膣口を裂きながら子宮を貫き、内蔵を裂きながら食道から口に抜けていた。
「アハハハッ！上手く貫通したよ。コレもしたの店で出せば？頭と肘、膝から下を切断すればブタの丸焼きだろ？」
「私の剣、持って来てよ」
部下が少女に剣を渡す。
「その槍、抜いてよ」
一人が女の身体を抑えもう一人が股から突き刺さる槍を握って引くが抜けない。
「駄目？ちょっと剣を持ってて」
スッと剣を部下に渡す。
「ウッ！」
ズシリと腕に剣の重さが伝わる。
「駄目だよ！両腕で持たないと！落としたら殺すよ」
少女は尻から突き出た槍を握って槍の柄を廻す。
「カチッ」
槍が数珠のようにバラバラに成る。
其れを片腕でグンと引くと膣口から数珠がズルズル…ズルズルと出て来る。
「ガコン」
槍先が床に落ちると柄を廻す。
「ガシン」
長い槍に数珠が変形する。

「カシュ」
槍先が棍棒に納まる。
「さてと…打首は久々かな…」
部下に持たせた日本刀をスラッと抜くと鈍く光る刃先が鞘から抜け出す。
「シ……フン！」
刃先が女の細い首を一瞬、すり抜けた。
「ズッズルズル…ゴトッ」
床に女の頭が転がる。
「ちょっと腕を左右に拡げて」
「はい！はい！」
「次は両足を拡げて！」
「てい！やー！」
まるで大根を切るように女の肘、ひざを切るとよつん這いの肉のブタらしい物が出来た。
「まだ裏メニューで出してんでしょ？厨房に持って生きなよ。」
台車に載せられ肉の塊に成った女は厨房に運ばれた。
厨房に女の肉塊が運ばれると厨房が慌ただしく成った。
マネージャーが電話を掛け始める。
調理師が二人がかりで女に粘土質の物を塗りたくる。
横にいるコックは粘土質の物を追加で作っている。
小麦粉を中心に薬膳、漢方薬、色々と混ぜている。
尻にいたコックが股に切れ込みを入れる。
膣口を上に斬り上げて次に下に斬り下げる。
ポッカリと尾てい骨から恥骨までの大きな穴が空いた。
其処に手を入れ内蔵を手で書き出す。
大腸、小腸、胃、子宮、血が流れ出すとホースを穴にいれ血を流す。
ズッズルズルズル…
心臓が取り出されると出血は徐々におさまって行った。
内蔵をだすと朝鮮人参等の食材を穴から腹の中に入れだした。

全ての薬膳を入れ巨大な蒸釜で肉塊を蒸す。
約一日がかりで仕込みが終わる。
夕暮れ時には肉塊の周りの小麦粉を落とし巨大な網に肉塊を載せ巨大な寸胴の油を肉塊にかける。
「ジュ～ジジュ～ッ」
その後に巨大なハケで肉塊に蜂蜜を塗る。
油をかける。
その作業を繰り返す。
厨房からエレベーターに乗せて中華飯店より小高い丘に立つ洋館に肉塊を送る。
中華飯店は香港支部の一、出入り口でしか無い。
丘の上に建つ洋館が組織の香港支部に成っている。
真っ裸のウェイトレスが客の前に食器を並べる。
基本、ウェイトレスは身体に衣類は着けない。
防犯上、ＶＩＰ客に接する者は衣類は着けない。
衣類を付けているのは客と組織の幹部、そしてアルファベットが付いた殺し屋のみ。
「オ！オー！」
香港ダックが運ばれてきた。
「乳房の肉…右」
女性客が札を上げだす。
古い風習で他人の胸を食べれば自分の胸が大きく、肝臓なら肝臓が良くなると信じられている。
「カン！右の乳房は１８番の女性に！」
「慈善事業以外は全てに手を出すな…ウチの組織は！」
少女が吐き捨てるように言った。

香港夜曲（後書き）

５６７などで本業が忙しく執筆が疎かでしたが一月に一話を目指し執筆再開します。

皆さま、宜しくお願いします

香港湾上の死闘

「ホ…香港支部の場所は…香港湾コンテナターミナル南１２区全体。」

「何！区画、全体だと！」

「はい、コンテナの山に見えますが、区画自体が建造物です。街中の中華飯店、占い館、娼館は全て連絡所になります」

「？なに…アタシは何を言っている？

相手のアジトは香港湾を見渡す丘の上に有る洋館だろ？　何故、口から出ない？」

アテナの処女、連絡員のマリアは頭の考えと口からペラペラと出て来る嘘に戸惑いを隠せなかった。

…駄目だ…嘘しか出ない…

腰のガンホルダーから銃を抜くと自分の頭に当てた…

しかし本当に銃を向けていたのは報告をしているイプシロンに銃を向けている。

「おい！おい！何か言ってる事と行動が違うぞ！」

「カヒュン！」

「バラバラバラバラ」

マリアの後頭部の髪が真横に切れ床に散らばる。

「ガシュン！」

横に裂けた髪の毛のしたから頭皮がめくれ白い頭蓋骨が見える。

「カッ！」

頭蓋骨を突きサーベルをユックリと動かす。

マリアの後頭部の脳が見える。

脳の一部に白い物が付いている。

サーベルの先を白い物体に当てると

「バチンッ」

サーベルから稲妻が走る。
白い物体は後頭部の脳から剥がれ床に落ちる。
「アポロ！来たのか！」
「イプシロン…お前、マリア５４号が操られてるの分からなかったか？」
「嫌～香港は暑いからさ…熱中症かな～と…」
「バカ！ホレ、この物体、糸のようにバラけるぞ…」
「何だよコイツ！」
「恐らくは敵の寄生虫だよマリアは操られてアジトに帰って来ている」
「！来るのか！」
「何かはくるだろう…」
「ヒューン！」
「ほらきた！」
アテナのアジトに大量のロケット砲が撃ち込まれた。
「何よ！あいつら軍隊を持ってんの！」
「ペガサス！あいつらのとこに行ける？」
「アタシと一人なら連れて行けるわ」
「アレス！行って貰える？」
「わかったわ」
ペガサスと呼ばるた女がアレスを抱えると深夜の空に飛び出すと姿は消えた。
「ほらほら！全て撃ち込みなよ！残した部隊はシゴクよ！」
部隊を率いるのは香港支部のレディG。
「ドカン！」
Gの眼の前に有った装甲車の屋根がへこむとタイヤが砕け炎を吹き出すと爆発した。
「おい！その女を撃て！」
Gの命令で数人が女を自動小銃で撃つ。
「ガガガッガガガッガガガッ」

女が着ていた白い着衣は破れても中の肉体には傷が一つも付かない。
「おい！ロケットランチャー撃ち込め！」
「パシュ」
ランチャーが女に向かって飛ぶ当たる寸前に横に交わすとランチャー自体を手で掴み砲丸投げのように身体を廻し軌道を変えた。
ロケット砲が真っ直ぐに装甲車に向かって飛んで行く。
「ボシュン！」
「ドン！」
装甲車のハッチが吹き飛び炎を上げる。
中から火まみれの女達が飛び出す。
２０人の部隊は一人の女に壊滅させられた。
「G！聴こえる？」
「お前が香港の親玉か？」
見知らぬ女性の声がレシーバー越しに聴こえる。
「アタシはアテナのアレス！アテナの処女で神の名を持つ者…この意味が分かるな！香港はアテナが貰う。
この女はアテナの供物にする！ちまちまと戦わずに明日、深夜０時に香港島の沖合に有るタンカーゴルゴダに来い！お互いに十人！この女のような奴は連れて来るなよ。」
「Gだろ！お前が連れているのか？」
「ああ、顔を捕まれぶら下がっているよ」
「先にお前が死んでろ！」
「ピカッ！」
Gの身体から閃光が走った。
「ドドドッドーン！」
「おい！アレス！何が有った！」
「ケッ！この女、爆発したよ。規模からしたら超小型核だな…街が一つ吹き飛んだよ！」
「お前は？大丈夫か？」
「あー光る瞬間に自分の腕は切り落としたよ！アイツ、気絶したフ

リして爆発時にアタシの右腕を掴んだからな…」
「後は…」
「あ？右乳房を焼いたよ。」
「ソレよりもペガサスは？」
「アタシは天空に逃げたから大丈夫だよ…」
「しかし…フザけた連中だな。街が消し飛んだぜ！」
「確かにこんな事が再三、有れば香港から経済は離れるし人も離れる」
「明日の決戦で勝負を付けないと駄目だな…ペガサス！神の名を持つ者は後、何人が来る！」
「後３人です。奴らギリシャ本部も攻撃していて戦力は割れてます。」
「仕方ないな…おい！下に降りてアタシを第二アジトに運んでくれ！血は気合ではとまらん」
「分かりました」
ペガサスが地上に降り立つと肌がチリチリとする。
「おい！放射能だよ！早く離れよう」
アレスを両腕に抱いたペガサスは天空高く舞い上がり消し飛んだ街から離れた。
～香港国際空港～
「キュン！キュキュッ」
「ギーーン！」
香港国際空港にＦ－１５が降り立つ。
西側の戦闘機が香港に降りるのも珍しいが国の識別番号は何も書いていない。
複座の戦闘機の操縦席から真っ黒いヘルメットを被った人物が戦闘機のタラップを降りる。
後部座席のタラップからも同じような出で立ちの人物が降りる。
前を歩く操縦席のパイロットが黒いヘルメットを頭から脱いだ。
空港のサーチライトに金髪がキラキラと反射する。

彫りの深い中東系の顔に金髪。
Tの助手が戦闘機を操縦していた。
後ろを歩く人物がヘルメットを取ると黒髪がサーチライトに照らされる。
レディZが香港に降り立つ。
スグに組織の車が滑走路脇に待機していりる。
ジェーンが先に車に乗り込む。
レディZもその後に後部座席に乗り込む。
高級車は護衛の車に挟まれ丘の上にある洋館を目指す。

「X！来たのね！」
「久しぶりだわT、この子の操縦も上手いしアメリカから経由して横田から香港よ…で、相手は？」
「昔、ヨーロッパに有ったアテナの処女よ…」
「あそこは壊滅させなかった？」
「教祖アテナは殺したけど…ほかは逃げたわ。」
「…こちらの犠牲者は？」
「Mとさっき Gが死んだわ」
「アテナは神の称号の女を呼んだのね。スグに南米、ヨーロッパ支部から上位のアルファベットの女を呼んで！」
「自動小銃の弾丸を弾く女…アレスだね。」
「特異体質？」
「あぁ硬化系…Tと同系だね。」
深夜、香港国際空港には世界各国の戦闘機が降りてくる。
ヨーロッパのユーロファイター、ロシアのスホイ、アメリカからF－16
…各国が開発した戦闘機が飛来したが国の識別番号は書いていない。
国旗も無い。
降りて来るパイロットも白人、黒人、アジア系、南米系と多種多様な人種と中年女性から小学生位の子供迄。

年齢は同じ位だが過酷な訓練と多種に渡る薬品の摂取により成長が止まったり進んだり…。
ただ言えるのは全員が医師であり暗殺者。
「みんな聞いて！」
「ザッ！」
Xが一声掛けると全員がXに対して敬礼した。
TはXの横で頭をビシッと下げる。
「相手はアテナの処女の残党…でも香港のGと応援のMが殺された。アテナの神の名を持つ者も香港に来ている。此地は本部からも近い。本部からは奪われるな殲滅しろの司令だけ…相手のアレスが明日の夜に対抗戦での決着を希望している」
「レディX！アタシ出たい！」
「こら！Q！みんな仇を取りたいんだよ！」
「Q！Mの仇討ちか？」
「ソレも有るが私も敵と対戦したい！」
「T、Qは実戦は無いのかい？」
「マダムの所で処刑人をしていましたから…」
「良いんじゃない？
デクばかり斬っても実戦経験が少ないと使いものにならないわ。それに異能体質者との対戦は経験にはなるわ」
「分かったわ。QはカイとMを殺した女と…」
「後…アレスは外側からの攻撃には効かないと思う…U、貴女に頼める？貴女の虫を身体に入れれたら勝機はあるわ。」
「後は敵の分かっている戦力からコチラの異能体質者を充てる。明日の決戦時には本部から司祭も見に来るわ…この意味を理解してね…」
香港国際空港には深夜迄、軍用機の飛来が続いた。
…香港湾入口タンカーゴルゴダ…
「バラララ…」
軍用ヘリにアルファベットの女たちが各機に二人ずつ乗っている。

タンカーの上に八角形の特殊リングが出来上がっている。
高さ五メートルのフェンスと上部には有刺鉄線に高圧電流。
「アテナ！カイ！」
「アタシが先に行くわ。」
Qは真っ白な羽織袴と薙刀、腰に長短の日本刀。
上空からタンカーのヘリポートにヘリが降りる。
ヘリの風圧でQの黒髪が風に靡く。
白い着衣に真っ黒な髪を後で束ね顔には般若の面を付けている。
「何だよ～何だよ～虚仮威しか？なんだい！子供じゃないかい！」
先にアテナのカイがリングに入る。
続いてQがリングに入る。
「ガシャン」
鉄の檻の鍵が降りる。
「さぁ行くよ！その身体を焼いてあげるわ」
身に纏っていたガウンを脱ぎ捨てるともう身体は紅く熱を帯びてた。
カイがQの袖を掴んだ。
「ボッ！」
一瞬のうちに羽織は袖から燃え上がる。
Qは羽織を脱ぎ捨てると袴も脱ぎ捨てた。
少女の身体に少し膨らんだ胸をサラシで押さえ下着は褌を履いている。
短刀を褌に差し、棍棒を構えた。
海風がQからカイの方に流れる。
棒の先からは髪針が伸びている。
紅いカイの右腕に絡むとQは瞬時に棍棒を引っ張る。
「ザシュ！」
棍棒はカイの右腕の先を飛ばしたが左の手で握られている。
握られている棍棒が炭化する。
「ガシュン」
カイに握られている部分の棍棒が瞬時に外れる。

「チッ！」
炭化した棍棒を投げ捨て切断された切り口を左手で握る。
「ジュ！」
「変なモノだすね！腰の刀は飾りか？」
カイがQに抱きつこうと動きだすとカイの身体が止まる。
紅い身体に薄っすらと赤い血の線が浮かぶ。
「鉄髪針！地獄蜘蛛！」
「バシ！バシュン！」
カイの四肢が飛びカイの身体がストンとその場に落ちる。
「兜割り！」
「ゴキキ…」
四肢が無くなったカイの頭を短刀で叩き割る。
短刀にしては肉厚の刃はカイの頭蓋骨を切り裂き一気にヘソまで刃先がズブズブと入った。
Qが刃先を抜く。
「バダ…オバラナ…」
「しつこい！」
短刀でQが首を横に払った。
鉄格子のリングにカイの頭が転がる。
白かったQのサラシ、褌は真っ赤な血に染まりカイの亡骸を後にリングから出た。
「おい！片付けろ！」
アレスが語気を荒らげ部下にリングを清掃させる。
バケツに入れられたカイがリングから運び出されリングにモップがかけられて血の後は無くなった。
「次はアタシが行くよ」
リングにアレスが入る。
「U、行けるか？」
「硬化系は体内からつぶさないとね…行くわ」
バスローブ姿のUが股間を弄りながら返事をする。

Uは血を見ると興奮する体質でバラバラのカイを見て発情している。
先にリングに居るアレスは吹き飛んだ右腕は義手に変え胸は銀色の乳房型をしたプロテクターで覆っている。
西洋系には珍しい黒髪がヘリの風圧で靡くと髪を逆撫でたライオンにすら見える。
方やUはバスローブ姿で火照った身体をくねらせてリングに入る。
誰が見てもUが秒殺されるかに見える。
「ガシャン！」
リングの扉が閉められた。
「スルスル…」
Uがバスローブを脱ぎ捨てた。
「？何だ！お前は！ココは風呂では無いぞ！」
苛立つアレスは語気を荒らげた。
Uの姿は真っ裸。
恥ずかしそうに胸と股間に手をやりモジモジとしてる。
「お前の姿…お前は軟体系だな！」
「軟体動物は引き千切れば良いんだよな」
アレスがUに掴み掛かる。
「ズルん」
身体に油を塗ったUは簡単には捕まえる事が出来無い。
「チッ！チョコマカと小細工をして！」
義手がUの脚を掴んだ。
「ギャア！」
義手から生えた無数のトゲがUの脚に食い込み血が脚から流れる。
「やっと捕まえたわ。この脚から引き千切ってやる！」
もう片方の脚を掴もうとするアレスの腕を脚に絡ませて自分の股間をアレスの口に当てた。
「フグッ！」
義手のトゲがUの脚から抜けない。
Uが脚に力を入れトゲが抜けないようにしている。尻はアレスの顔。

もう片方の脚でアレスの頭を挟んでいる。
自由に動く両腕でアレスの眼を突き、もう片方の腕は鼻を塞いでいた。
…何だコイツ！私を窒息死させるつもりか？なら！…
「ガブッ」
「ギヒーッ！」
アレスがUの股の肉、性器の肉を大きく噛んだ。
なおも強くアレスはUの股間を噛む。
余りの激痛にUは股間から液体をもらした。
同時に義手のトゲを締め付けていた力も抜けた。
両腕が自由になったアレスがUの両足のふとももを掴み股間を口に押し当てなおも歯を立てる。
…コイツの性器、食い千切ってやるわ。
「グギ…ギャアアー！」
一際、大きな声がリングに木霊する。
上空のヘリに待機中のアルファベットの女達にも聴こえる。
「ベッペッ！」
「ベチャッ」
リング上に真っ赤な肉片がベチャッと落ちた。
「この女！股から割いてやる！」
Uは白目を剥き気絶している。
太いアレスの腕がUの尻の肉を大きな掌で掴む。
「フン！」
「ァガァー！」
尻を左右に強引に裂けられる激痛でUは目覚めたが尻を捕まれただ左右に身体を盛れるのを待つ状態でいる。
「ギャア！」
アレスの太い指がUのアナルに強引に押し込まれる。
「メチ…ミチ…ミチ…」
尻の穴から身体が裂ける音がしてくる。

「ブチ！」
「ガハッ！」
Uの尻がヘソまで左右に裂けた。
そのまま誰もが左右に引き千切ると思ったのだがアレスがUから手を離した。
アテナ側はアレスの勝利を確信して扉を開けて部下が何人もリングに入る。
「ブーン！」
「ゴシャ！」
「部下の頭が吹き飛びフェンスに当たる。」
アレスは手当たり次第に部下達を殺していく。
「おい！アレス！お前の勝ちだぞ！もう暴れなくていいぞ」
アルファがリングに近付くのを止めアポロがリングに入り暴れるアレスの首を持っていた両刃の西洋刀で打ち落とした。
そして虫の息のUの頭に突き刺すとUそしてアレスの身体が動かなく成った。
「この女、軟体では無く虫使いだったわ」
「次は私だ！」
アポロの赤い髪がリング上で海風に靡き炎を上げてるように見えた。

海上の闘い　終結

「早く次の奴！降りて来い！」
上空に待機しているヘリがサーチライトをヘリポートを写しユックリと降りて来る。
まだ着陸迄、１０メートルの所から黒い物体がヘリポートに降り立った。
音も上げずにフワッと黒衣が空から地上にハラハラと落ちるようにヘリポートに降り立つ。
真っ黒な黒衣を頭から被り身体を全て黒衣に隠れている。
「早く入って来い！」
リング内からアポロが大声を上げている。
「よく吠えるシンバだ！」
黒衣から黒い腕が飛び出し物体をアポロに向けて投げた。
「シュンシュンシュン…」
真っ黒な円盤がアポロンに向かって飛んで行く。
「ガイン！」
アポロンの剣が円盤を弾くが回転は止まらず黒衣の女に向かい戻る。
「パシ！」
「たのしいね！狩りは！」
円盤を受け止めると黒衣の女はリングに向かって走り出すとリングの入口から中に入る。
「その布を脱げ！」
アポロンの剣がビュンビュンと黒衣を切り裂く。
「何なんだい！野生のシンバでも落ち着いているよ！」
黒い肌に覆われ髪も漆黒。
顔も黒いドーランを塗り真っ黒。
歯も黒いマウスピースで隠している。

対象的に真っ白な肌に赤い髪。
銀色の胸当てと銀糸の下着のアポロン。
「ココは明る過ぎるね…」
「ヒョンヒョンヒョン」
指で丸い円盤をクルクルと廻す。
指のリングをサーチライトに向かって投げると
「パリン！ガシャン！」
サーチライトが潰れタンカーの上が真っ暗な漆黒の闇に包まれる。
「ヒョン！ヒョン！」
「ガハッ！グブッ！」
簡易式の投光器がリングを照らすとアテナの部下がアポロンの周りを囲み、数人が腹に卍型の刃物が刺さっている。
「へ～仲間を助ける？自己犠牲精神？泣かせるね…」
「アイツ…卑怯だ…」
Qがヘリからリングの映像を見てボソッと呟いた。
「Q！あれがレディKの闘い方だよ。
彼女に言わせれば狩りかな？」
グルカナイフと言われる卍型に柄の付いたナイフとチャクラと言われる円盤の縁が刃の武器を使い踊るように攻撃を仕掛ける。
右手に剣、左手に盾替わりの部下を持ち防戦するアポロン。
部下の遺体はボロボロに切り刻まれてる。
Kが背中に手を廻し剣を部下の遺体事、アポロンに突き刺す。
細長い剣先は部下の身体を貫きアポロに刺さる。
ブリッサと呼ばれる突きに特化した剣。
切先が鋭く鎖帷子や薄い鎧なら簡単に貫く。
「こんな針みたいな剣はアタシには効かぬわ！」
アポロンの腹筋で剣先は止まっている。
「え！アイツも硬化系！」
「嫌、太陽神アポロンなら火炎だろうがアポロンにはもう一つ名前が有る厄災の神。死神だよ。」

Kの剣先を握っているアポロンの手が黒く変色していく。
銀色の剣が黒く変色していく。
「死神の方のアポロンか…災厄…アレは細菌だな。鉄も腐らす腐食菌で攻撃してくるよ」
「な！」
ブーン！
グルカナイフでKは攻撃する。
「ガッ」
掌でグルカナイフを止める。
グルカナイフが変色していく。
「ガッ」
アポロンの太い両腕がKを掴む。
真っ黒なKの身体からポロッポロポロ…
「ザーッ」
真っ白なKの素肌がリングに降り注ぐライトに照らされる。
「何だ！アンタ、肌はしろいのか？
元の黒い肌にしてやるよ」
「ボッ！」
「ギャアーーー！」
Kは一瞬に炎を上げ燃えだした。
「太陽神の名を持つアタシが炎を使えない事、無いだろ！」
真っ黒い炭化したKがリングに倒れた。
「ブフッフー」
「シュゴー！」
アポロンは口から火を吹きKから離れた虫を全て焼き尽くす。
「厄介な女だね…あれは…」
「アタシがもう一度、行っても構わ無いから！」
Qがそう言うと後部座席のTが叱責する。
「１０対１０！闇の組織にも掟は有るのよ！」
「アレは誰？知らない顔だけど…」

「あ…あれね…リリカ！今はレディＶ」
「え！アタシと同じで幼かったんじゃ…」
「そうよ、リリ、リリカの姉妹は薬の副作用で肉体は年を取らなかったわ…でも、今年の実験で自分の体で人体実験したリリカは急に成長した。
」
「其の薬！アタシにも効く？」
「其れは解らないわ。リリカは自分の開発した薬は自分の身体で人体実験していたし…体内で其れまで蓄積した薬が科学反応を起こし急に成長したかも知れない…」
「今日は新たな暗殺者レディＶの初陣よ…」
相手はイプシロン。
身体を冷却させる特異体質。
Ｖ、リリカが手袋を脱ぐ。
白い肌に合わずにドス黒い。
「あの子、毒手を会得したの？！」
「他のアルファベットの女達と違いあの娘は薬学が専門だったからの…でも姉譲りの体術は相当なもんじゃ…
ホレ！体術だけじゃ無いぞ」
リリカが手にした特殊警棒が伸びてイプシロンの腕に刺さる。
「チッ！」
「ゴボゴボッ…ボン！」
「ウギッ！」
イプシロンの刺された右腕が爆ぜる。
「アレは銃器！」
「銃器じゃないわ！特殊警棒の先に針を撃つ装置が入っているんでしょう。爆ぜ方からしてゴクモンの改良の針ね」
イプシロンは自分の腕に冷気を吹き
傷を塞いだ。
近寄れば毒手。

離れても特殊警棒。
「おい！」
部下がバケツに入れた水を持ってきた。
肩から下げているタオルを片腕に持ち部下にタオルに水をかけさせた。
「パキンペキ…パキパキパキ」
瞬時にタオルと滴っていた水は氷に変わり氷の剣が出来た。
「ァァァアァ！身体が凍る！」
「パキン！ピキッピシッ！」
氷の剣を持った手が見る見ると白く氷始めピシッパシと腕が裂けて行く。
「ヤダ！凍るのとまらない～」
「アンタ！何、したんだよ！」
「急速冷凍促進剤！あたしの特製品…」
「あぁあ～心臓迄…凍る…コ…ォ…」
「バタン！バリン！」
イプシロンは真っ白くなりリングに倒れ腕は粉々に散った。
「事前に情報を知った黒百合姉妹には敵わないね…どんな薬も配合する…」
2勝1敗1分け…
半分の試合が終了した。
リングからリリカが出る。
「大丈夫だった？」
「レディTより弱い…」
黒いガウンを纏いリリカとリリはヘリポートに着いたヘリに乗り込んだ。
「第6試合！アテナ側！　ペルセポネ～！」
「ウォーーー！」
アテナ側の部下達が声を上げた！
「真っ黒なローブを頭から被り顔は見えない。」

「ガシャン！ガシャン！」
手にした大鎌が動きにあわせて音を立てる。
「へ～本気できたね…2代目のペルセポネ…」
「初代は？」
「ソコの女がコロしたよ」
後部座席の司祭がTを指差す。
「ヒュンヒュンヒュンヒュン…」
他のヘリがヘリポートに降りて行く。
「大丈夫なの？Tが行かなくて！」
「馬鹿だねQ！アタシより強いアルファベット付きの女はまだいるよ！」
ヘリがヘリポートに着いた。
「ガラッ！」
ヘリのドアが開き中から金髪の長身の女性がバスローブもガウンも着ずに手に銀色の棒だけを持ち歩きだす。
「あの人、何処の支部？見た事、無い…」
「そりゃ無いだろう…アタシも初めてさ…レディD！アタシらの教官」
「久しぶりだね！裏切り者！」
「心外だね！能力差、資金力も圧倒的に差の有る組織に敵対して幼いアテナを危険に晒したのは誰だい！それで今の偽のアテナ！どいつが成った！ヘラか？セイレーンか？まぁ良いわ…貴女から始末するから…」
ペルセポネがガウンを脱ぎ捨てた。
白い肌に黒い入墨が身体を覆っていた。
「古代ヘブライ文字…アンタ、ギリシャの誇りも捨てたの！」
「オオオ！」
「キーン！」
「ピシッパキン！」
タンカーのガラスが割れる。

「アギャ！イタイ！」
「神魔和合！」
「アハ～アァァアア～ヒキギギー！」
ペルセポネの黒いヘブライ文字の呪文が黒い霧を噴き上がると同時にペルセポネの下半身股間からヘソに向かいモコモコとペニス型に腹が膨らむ。
「アラアラ…とうとうギリシャ神の名を捨ててソロモンの悪魔と交尾したわ、この子」
「じゃあ…私は自分の夫に…」
「Dが身に纏っていたガウンを脱ぎ捨てた。」
「神話和合！」
真っ白なDの身体に赤い紋章が浮き上がる。
「ア…アナタ…来て…アナタ！」
「ハグッ！」
同じように股間からヘソに向かいモコモコとペニスの型に下腹部が膨らむ。
「アア～アハァ～」
赤い紋章が金色に輝く。
「アア～～」
Dの身体が光に包まれ真っ暗闇の海上を照らす。
「ガルルル…グルルル…ガウガウガウ！」
傍らに頭が3つの犬を連れ頭には顔を隠した兜を被り甲冑に身を纏い、手には槍を握って立っているDがいた。
姿はギリシャ神話の冥王ハーデス
反対にギリシャのペルセポネには蝙蝠の羽根が生え下半身を獣の毛が覆い、頭には山羊の角が伸びている。
西洋画に出て来る悪魔サタンにそっくりに成っている。
「ガウ！ガウ！」
傍らのケルベロスが悪魔ペルセポネに襲い掛かる。
「シャー！」

尻から生えた大蛇がケルベロスに襲い掛かる。
「ガシン！バリバリバリ！」
悪魔と冥王が其々、槍を交えるたびにイカズチが天空に走る。
神話の世界の終末戦争がリング上で繰り広げられる。
中々勝負は付かない。
「ハッ！ハッ！ハッ！」
「神話和合！」
タンカーしたの海面が盛り上がると水の柱がDの尻に突き刺さる。
「オオオォー」
蒼光がDを包む。
ケルベロスは消え、右手にハーデスの槍を左手にポセイドンの三又槍を持ったDが立っていた。
「フン！」
ハーデスの槍を悪魔サタンは避けたが其のスキに腹にポセイドンの三又槍が刺さる。
「グギャアー！」
けたたましい叫び声を上げ悪魔サタンはペルセポネから離れる。
白い肌に黒い入墨の女が槍を腹に受け立っている。
「最後は貴女のダンナの槍よ！」
「ブン！」
「ボン！」
ペルセポネの頭が中にとぶ。
「ハァ～」
シュウシュウと音を立てながら槍は消えDの身体に浮き上がる紅い入墨も消えた。
「次は誰だい！ヘラ？アフロディーテ？今ならアテナを解散したら…命は助けるよ！」
「わ…分かったわ…アテナは渡す…部下の命は助けて」
「聞いた？T？」
「D！先にアテナを保護して！それから武装解除！」

「ヘラ！先にアテナを連れて来て！」
タンカーの船室から裸に布を巻いた姿の少女が出て来た。
右手には錫杖を持っている。
Dがスッと跪く。
「アテナさまを保護致します。」
「他の者の命は助けて下さい。」
「仰せ通りに…」
パッとヘリポートが照らされ上空からヘリが降下してきた。
「D！貴女はアテナと本部に行って…後はアタシ達が武装解除、捕虜の捕獲はするわ」
ヘリポートにひときわ武装したヘリが降下してきた。
中から白い司祭服の人物が降り少女に近付く。
「おおぉ…すごいオーラが出てる」
「さぁ…アテナよ！」
司祭に背を押されヘリに近付く。
ヘリのローターの風圧で布がめくれ幼い白い尻がサーチライトに浮き上がる。
司祭のヘリが上空に上がり闇夜に消えると大型のヘリが上空から降りて来る。
「全ての武具は其処に破棄し着衣も脱ぎヘリに乗れ！」
Tが強い口調で神の名を持つ女達とギリシャ文字の女達を裸にしてヘリに乗せる。
QがDと大型ヘリに乗り込む。
次にヘリから檻が降ろされる。
「お前たちも全裸で檻に入れ！」
部下達が檻に入ると檻は上空のヘリに吊るされ別のタンカーに運ばれコンテナと同じように積み込まれる。
部下達が送られるのは日本のマダムの人身売買組織。
神の名を持つ女と文字の女達は本部に連れて行かれ洗脳され組織の暗殺者に変わる。

組織のアルファベットの女は数人が犠牲に成ったがアテナを組織事、
手にする事は出来た。

南米編　パラサイトスネーク

「ガシャンガシャンガシャンガシャン…」
「アガッアガッアガッアガッ…」
「オンオンオンオン！」
機械の起動音が部屋に木霊する。
機械音だけなら工場内では有るが機械音に混じり女のえづく音、喘ぎ声が機械音に混じる。
工場と言えば工場とも言える。
日本某所に有る組織の娼婦製造工場。
世界各地から売られたり拉致されたり敵対組織の女が工場に集まり性奴隷に変えられ全世界に売られる。
格闘技術、医学、軍人は振るいにかけられて組織の構成員に成るか工場に落とされる。
「マダム、相変わらずですねココは…」
「アンタも女の悲鳴は嫌いじゃ無いだろ。でも、今回のギリシャ女達は極上だよ。殆どが処女だよ。上の口をディープ・スロートに耐えれるようにしたら出荷だよ」
「組織に役に立ちそうなのは？」
「外でQが鍛えてるよ。」
「後は本部で洗脳してアルファベットに改良ですか？」
「そうさねぇ…毎年、抗争、内戦、傭兵で亡くなる駆らねぇ…近頃は幼少期から鍛えるより洗脳が安上がりだよ。」
「来週から南米かい？」
「アマゾネスが復活したと南米支部から連絡が来て行くんですが…先の南米のマフィア抗争時にアルファベットの女を見かけたんです。日本に帰国後に調べても敵対組織にレンタルはされて無くて…」
「面倒だね…洗脳が解けたアマゾネスが現地で復活かい？」

「其れなら薬品で人工的に異能体質にしてるだけに厄介です。」
「実はアマゾネスの首領はレディRなんだよ。」
「R！南米支部の幹部の？」
「彼女は元々アマゾネスの幹部だよ。洗脳と薬剤投与で変えたのさ」
「オウオウオウオウ！」
牝が叫んでいる。
秘所にある肉のビラをクリップで止め機械が伸ばしたり縮めたりしている。
「アギギギッ…破裂する！ヒギッ」
別の場所では椅子に固定された女の乳首を縛って伸ばし其処に薬品を注射器で打ってる。
打たれたであろう乳首はマスカット大に肥大してしろい乳房に付いている。
「アンアン！アンアンアン！」
「オボッゲボッ！ガボッ」
「アンアギャキャー」
女の喘ぎ、嗚咽、悲鳴を聞いて育ったTにはマダムの拷問、改造部屋が一番、落ち着く。
「T！南米には誰を連れて行くんだぃ」
「助手のジェーンとQ、後は北米支部から応援を…」
「じゃあさぁ…新しいレディMを連れて行って送れ。今回が発任務だ。」
「特異体質ですか？」
「前のMと能力は同じだよ」
「マリアナ！おいで！」
「ギャー！ギャァァァ…あ…アッアッアッアー」
悲鳴が急に喘ぎ声に変わる。
「おばぁさま…アッアッって煩いですわ」
右手をパンティに入れモジモジと身体をくねらせた女が近付く。
「アニャアニャアニャ〜」

猫のような鳴き声があちらコチラで聞こえる。
「アリアナ！手をパンツから出しな！」
「お前の陰液でコッチまでクラクラするよ」
「T、任せても良いかい？」
「別に構わないけど～マリアナ！自分の身は自分で守ってね」
「分かってますよ～おねえさま～」
「後は南米支部で南米の奴に合流してアマゾネスの残党を壊滅するのが任務」
「マダム、Fは呼んだら駄目かい？」
「あ～魚使いのFね…南米なら使い勝手のいい奴だ！」
「では明日、夜23時に組織の空港に集合で…」
Tの革のパンツで染みなかったが結構な愛液が秘所からは垂れていた。
「ジェーン！車をホテルに向かわせて」
「はぃ…」
ジェーンもか細い声で答える。
赤い外車に乗り込むと車は屋敷の外に出てスグに高速に上がる都心に向けて走り去った。
…屋敷裏竹林内…
Qが笹の落ち葉に座り瞑想している。
「イグッ！ウグッ！」
竹林には四肢を拡げて竹にロープで固定された試し斬り用の全裸の女が4人。
足元には朽ち果てた白骨が散乱している。
既に試し斬り用の女達は自分達の運命を悟っているが乳房は張り、乳首は固く勃起している。
下半身の肉の芽も肥大し肉の亀裂からは愛液がしたたる。
それはQの少女のような肉体にも作用し小さな亀裂より流れ出していた。
「あお～おぉ～」

眼の前に逆さ吊りされた女が吊るされている。
股を左右に竹に結ばれたロープに引っ張られながらダラダラと愛液が股間から溢れ腹を伝い逆さに垂れた乳房の間を通り顔からポタポタと竹林に落ちた青い笹に滴る。
「え～い！五月蝿いわ！」
改良した鋼鉄の糸の鞭が逆さ吊りの女の股間に振り降ろされる。
「バジュン！」
「ヒギエッ！」
股間は抉れ真っ赤な肉が見えている。
弾き飛ばされた股の肉が笹の上に無造作に落ちている。
「そら！」
「バジッ」
「ガギャ！」
右の乳房が跡形も無く女の胸から消える。
「バジュ！」
左胸も吹き飛ぶ。
「バジュ！バシャ！」
女の体から肉が削ぎ落とされる。
ほぼ白骨と化した女の身体に頭だけが無傷に有る。
「あの女が！」
「ビュン！」
「パンッ！」
女の頭部が吹き飛ぶ。
「アア…アゥアア…」
「カシュン」
近くの竹を左右に払うと上部は平、下部は斜めに竹が切れた。
「バサン！」
上部の竹は自重で横に倒れる。
「カッン！」
切れた竹を横に倒すと下部は尖った竹槍の様なモノができあがった。

「アンアン！グギャ！ギェー！」
陰部に手にした竹槍を真上から突き刺す。
男根より太い竹槍の全体がズブズブと陰部に埋まる。
「やかましい！」
「ブシャー！」
噴水のように陰部に刺さった竹槍の上部から血が吹き上がる。
緑の笹に真っ赤な鮮血がポタポタと付いていく。
男性経験の無いQに性欲は苛立ちにしか成らない。
あの女が来てからずっと苛ついている。
「お帰りですか？Qさま。」
「練習にもならないわ！」
苛立ちに気味に館の部下に吐き捨てる。
笹の茂みを抜けた先に真っ赤な外車が止まっている。
それに少女は乗り込むと笹の茂みを抜けて門より出ていった。
…アマゾン川支流某所…
「ヒャイ！」
「ズッズズッ」
カレンの太ももの間を大きな蛇が股間から顔に向かい這い上がる。
ウロコが脈打つ度にウロコがチクッと太もも、下腹部、股を刺す。
蛇の頭がカレンの顔の辺りで止まる。
「シャーシャーシャー」
蛇は興奮状態に有る。
「ズリズルンッ」
「アグッキッツィ」
蛇の股間から伸びた管がカレンの秘所の割れ目からズルンと膣を通り子宮口から子宮内に入る。
「アグッキッツイ！」
出産経験も無いカレンの子宮口は蛇に犯される。
「シャーシャーシャーシャー」
「ブルッブルッブルッブルッ」

蛇が身震いをすると膣をピンポン玉状のモノがモコモコとカレンの子宮口から子宮内に入って行く。
「アワ…アグッ…」
見る見る腹が膨らみ妊婦の様な腹になりはち切れそうな腹に妊娠線が表れる。
卵をカレンに産み落とした蛇はズリズリとカレンから離れ別の小さな蛇がカレンの脚先からスルスルと太ももを伝い登ってくる。
小さな蛇はメス蛇の排卵管で拡がった膣を抜けて子宮口から子宮内に入り小さな身体から熱い性液を卵に振り掛け出した。
「ァーアズッアズイ！アツイ！」
子宮内が焼けるように熱い。
キメラスネークは他の動物の子宮内に卵を産みオスも子宮内で射精して果てる。
普通の蛇より孵化は早く産み付けられた子宮内の肉、内臓らを餌にして体外に出る。
普段は家畜にしか卵は産まないが時々、人間に産み付ける。
産み付けられたカレンは泡を吹き気絶している。
「ギヒーギーギャー裂けるー」
別の檻では尻に棍棒の様なペニスを挿し込まれたジャニスが苦悶の表情を浮かべてる。
ネアンデルタール人。
白亜紀後期に出現した人類最初のヒト。
アマゾン川の支流に有るアンデス山脈から流れる雪解け水が凍って出来た洞窟に冷凍保存された遺体から精子を取り出し体外受精させて作った人工のネアンデルタール人。
身長２メートル。
体重１００キロ有るオスが丸い女の尻を鷲掴みにして股の秘所に棍棒を抜き差ししている。
「アギャ！グギャ！」
喘ぎ声無く苦痛に満ちた声が木霊する。

「ジャニス！大丈夫か！おい！辞めさせろ！」
長い金髪の髪を揺らし2メートルも有る巨躯の女が同じような2メートル有る女に訴える。
「次はお前だから見てろ！股からテラテラと汁を垂らして…後、少しだ」
半裸の女は強い口調で白人女性に流暢な英語で反論した。
「ハングッフンガッハングッハングッフンガ！」
「ガァガァガァガァガァガァガァ！」
膣を棍棒で拡げ幹のようなペニスで擦られ膣壁は外部に伸び捲れている。
一部、切れて血が滲んでいる。
…アガッアガッ黒人とのセックスは経験有るけど…コレはセックスじゃなく木の枝でアソコを擦られはている…グッギャ！
激痛しかしない。
胸はただ鷲掴みにされて引っ張られ乳首は抓まれ伸ばされている。
「ガァガフッ」
熱いモノがジャニスの膣壁を膨らませ意気よい良く子宮口から子宮に大量に入り込む。
「ブゥン！」
ジャニスを物を放すかのように放り投げるとオスは横になりイビキを立てて寝出した。
「毎回、こうだね。この白人どうする？」
褐色の肌に黒いパンツとタンクトップ。
眼には眼帯を掛けてる女が全裸に腰布だけの女に言っている。
「余興で女を犯すゴリラと対戦して貰おうか？全米女子レスリングチャンピオンとセックスゴリラの対戦、全世界に放送するだけで配信料が入るぜ」
「アガガガカ…アギャーッ」
「ホレホレ！パラサイトスネークの孵化が始まるよ…早く特製の檻に入れないと！」

腹の膨らんだ女性が一人、女達に担がれて連れて行かれた。
ジャニス達の前に透明なアクリル製の特殊な檻が見える。
中には女が腹を抱えて悶絶している。
「バシャバシャバシャバシャバシャバシャ」
水が女の顔迄、入れられる。
「アギャグッ」
「ゴハッ」
口から小さな蛇がボタボタと水に落ちる。
小さいが黄色と黒の極彩色。
禍々しい蛇が水に落ちる。
「ウグッアガッ」
「バンッ」
腹を破り蛇が飛び出す。
極彩色の蛇が水の中を泳ぎ周り、元宿り主の女の脚、太もも、乳房に齧り付く。
透明な水が見る見ると赤く染まっていく。
猿や鳥が夕闇の中、一斉に鳴き出した。

南米編　クスコスネーク　熱帯の惨劇

「バシャバシャバシャ」
「アギャグッギャ！」
「ア…アン！アァ～！」
苦痛の悲鳴が喘ぎ声に変わって行く。
眼からも蛇は飛び出し尻の穴からも極彩色なうどんのように水にバシャバシャと落ちる。
防護服に黒いグローブをはめた者たちが網で蛇を掬い上げて別の容器に入れる。
真っ赤な水面に恍惚な顔をした元宿主が浮かんでいる。
「よし！コレで最後だな？」
徐ろに容器から小さな蛇を取り出し腹部を指で摘んだ。
ニュロンと排卵管が飛び出す。
排卵管の蛇と排卵管が出ない蛇を別けている。
パラサイトスネーク…別名エクスタシースネーク。
毒の代わりに麻薬を獲物に打ち込み、獲物が快楽に浸っている時に肉を食す。
アマゾン流域には新種のケシ、麻薬成分になる植物は数多く有る。
パラサイトスネークは雑食だが植物類はこの麻薬性の毒物の生成にだけ食す。
後は基本は肉食。
食欲旺盛な産まれたばかりの蛇から大量に麻薬成分は取れる。
人工ネアンデルタール人は主に傭兵としてマフィア・軍隊に売却し後は獣姦映像・処刑映像配信が組織の主な収入源になる。
「こんな大女を誘拐してメリットは有るのかい？」
「大いに有るわ。彼女のパトロンが支援している組織が私が元いたアルファベットの組織。

今頃は組織に泣き付いてアルファベットの女達がアマゾンに向かっているわね。やっと洗脳から解けたわ。南米支部を抜け元アマゾネス達に洗脳を解く脳手術を何人かは元のアマゾネスに戻したわ。後は蛇のドラッグで貯めた資産と人工のネアンデルタール人。私が薬漬けにされて開花した特異体質で彼女達を駆逐しアマゾネスを復興させる！」

「この女達はタダの餌だよ。」

…深夜アマゾン川支流K国アマゾン特別区ヘリポート…

「バラバラ…バラバラ…バラバラ！」

月も出て居な深夜。

ヘリポートを照らすサーチライトだけが真っ暗闇に灯る。

両翼と下部に有る赤色灯が闇夜からヘリポートに降下してくる。

両翼にプロペラを備えたオスプレイがジャングルに降り立つ。

「ズッン！」

後部ハッチが下降して水陸両用車がキュラキュラキュラキュラとゴム製のチェーンを廻しながら地上に降り立つ。

「無事、降下完了…即座に離陸されたし…」

後部ハッチがグーンと上がり完全に閉まると闇夜の中を上昇し飛び立った。

水陸両用車の操縦はジェーンが担当。

助手席にT。

その後部にQ、F。

最後尾にMが座っている。

最後尾の椅子とQ達の間にプラスチック製の間仕切りが有る。

特殊スーツは熱帯雨林には着れずに特殊なパンツを履いている。

Mのフェロモンに刺激され昆虫、動物達が茂の中で交尾をしだした。

先代Mでもコレだけのフェロモンは出していなかった。

ジャングル使用の特殊水陸両用車はショックを吸収しジャングル内でも揺れずに走る。

「　ガサガサ…ガサガサ…」

「ザーザザーッ」
川に水陸両用車は出てきた。
組織の衛星画像で見たアマゾネスの基地は川の上流に有る。
「ズブズブ…ズブズブ！バシャン！」
川に入るとキャタピラが車体に収まり後部からスクリューが出て来た。
「ヒュウーヒュィーン」
電気式のモーターが回転を始める。
水陸両用車は川上に向かい川を登って行った。
…アマゾネス特別飼育室…
「あー駄目だわ。この女。何処で仕入れたの？え！売春宿から借金の代わりに！コイツ、大分、堕胎してるよ。パラサイトスネークの卵がボロボロと出るから…子宮口に締まり無いよ。」
「餌にする？ペリカンスネークに餌を最近、与えて無いでしょ？何時も牛の子宮だから本来の人の子宮を上げないとね。」
「ほら！立ち上がりな！」
「痛いのは嫌ですぅ…」
「あ～痛く無い痛く無い。ほら！」
パラサイトスネークの飼育水槽から立ち上がると閉まりを失った股から卵がボロボロボロっと水槽内に溢れ落ちる
「ほら！この水槽に入りな！」
５メートル四方の水槽、深さは１５０ｃｍはある。
「ザブン！」
熱帯雨林の水は生暖かい。
アマゾン川からの水なので少し赤く濁っている。
「パクン！パン！カパン！」
ペリカンが口を開け締めしてくちばしを鳴らす音が聞こえる。
だが鳥、特有の鳴き声、羽根音は聞こえない。
「バシャン！ドボン！」
女の背後で何かが水槽に入れられた。

「ザラッ」
女の尻にヌルっとしたドジョウ、ウナギ類の魚類のヌメリが尻にあたる。
「嫌！嫌！魚に噛じられるの嫌です！」
女はピラニアかカンディルか何かの肉食魚類と思っている。
「あ～噛じらないよ一箇所しか！」
クスコスネーク。
別名、ウテルスイーター。
和名、子宮喰い
数十年に一人、犠牲者が出るか出ないかの特殊な蛇で出産後の妊婦が水浴中によく襲われる。
普段は家畜や豚、イノシシ等の子宮に喰い付くが人間の味を知ると草むらを這いずり村迄、女を襲いに来る。人の子宮の味を知った蛇は即座に殺さないといけない。
だが…スプラッター物の愛好家、一部の動物学者には高値で動画は取り引きされる。
ウロコは無く小さな突起の腹で進む。
水中では尻尾を器用に使い水中を泳ぎ回る。
「ニュルン」
太ももをシュルシュルンと女の股間を目掛け登る。
くちばしは医療器具のクスコに似ている。
ツルンとしたくちばしから膣を通り子宮迄、行くとクスコが大きく開くように膣を拡げる。
クスコと違うのはクスコの口の内側には無数の小さな牙が生えて子宮にカブり付き体をクネラせて体外に子宮自体を引きずり出す。
パラサイトスネークのような麻酔毒の類は無く噛じられた女は水の中で身悶え、血の涙を流す。
激痛に耐えられず自分の舌を噛み切り死ぬ女も居る。
「シュルン！」
難なく女の股から締まりを失い肉厚の肉ビラを通り抜けてクスコス

ネークは緩い膣を抜けて子宮迄、達した。
「パカン！」
蛇が口を開けると女の下腹部がビョンと飛び出した。
「うわ！」
自分の下腹部の飛び出しにビックリして女は驚く。
まだ幼さが残る顔に眼の下のクマ
明らかに薬物で中毒にされて少女の頃から売春、堕胎を繰り返して来ている。
南米には軍事国家、独裁国家、マフィアが仕切る国迄、有る。
其処では女は体を売るしか食べる術は無い。
男は軍隊かマフィア組織。
アマゾン支流に有る彼の国はマフィア組織が仕切る国だった。
マフィア組織を壊滅すれば国はアマゾネスが牛耳る国になる。
「いや！うわ！」
「パコン！」
水槽が蛇の顎の閉まる音に共鳴して響く。
「アグッギャー！」
「ザバン！ザボン！」
女が水槽内で暴れる。
膣から出ている蛇の体もクネクネとくねり体から咥えた子宮を体外に出そうと暴れる。
「ギエーッ！」
「ボコン！」
女は眼を見開き過ぎ目の玉が顔から飛び出し、片眼は血の涙を流している。
「プカン…」
ピンクの肉の袋に噛み付いたクスコスネークが子宮を噛んだままに浮かんで来る。
「グワッ！カコン！コキン！」
子宮を噛じっていた蛇の口がグワッと開くと長い口がゴキゴキと横

に拡がって行く。
口の中には第二の口が有りカクンコキンと蛇腹のカーテンのように横に扇型に拡がっていく。
下顎の骨も外れまるで大きなホタテが口を開けているような型になる。
「バフン！」
「バシャバシャバシャバシャ…」
閉まった口から水がザバザバと落ちる。
大穴が空いた股間はポッカリと真っ黒な穴を開けている。
腹が膨らみくちばしが元に戻ったクスコスネーク。別名子宮喰い蛇を水槽から出すとバシャバシャバシャバシャと小さな魚を水槽に入れる。
肉食ドジョウ、　ピラニア、カンディルあらゆる肉食魚類がポッカリと開く黒い腹に入って行く。
「バシャバシャバシャバシャ」
「ベコンポコン」
女の下腹部がボコボコと動く。
顔にも肉食魚類は群がる。
眼玉の無くなった穴から入り頭を貪り食う。
口から入り胸から食う。
幼さが残る顔に付くには不釣り合いな大きな乳房に噛み付く。
血と共に白い母乳が混ざる血が滴る。
「さぁ…アタシも入ろうかな！」
元R、アマゾネスのアナコンダが服を脱いで行く。
「え！アナコンダさん…この中に入るんですか？」
「若い女の血が混ざったアマゾン川の水が若返りの元に成るんだよ。」
タンクトップを脱ぎ捨て革のパンツを脱いだら下には何も付けていない。
「よっ！ドプン！」

水槽の縁に手を置き水槽に飛び込んだ。
獲物が増えたと肉食魚類がアナコンダに群がる。
だが尻の穴、割れ目、膣を締めて居るので肉食魚類は入れ無い。
数匹のピラニアが豊満な乳房に群がる。
「ガジガジガジガジ…」
魚の歯音だけで乳房には傷は付いて居ない。
彼女もTと同じ肉体硬化系の特異体質だった。
逆に泳ぎ廻るピラニアを捕まえ腹から喰いだした。
モニターの配信数は１０万を超えていた。
…アマゾン川支流の水上…
空は赤くなり日が昇り出した。
昼間の水陸両用車はアマゾン川奥地では浮く存在に成る。
水陸両用車を岸に近づけ収めたゴム製キャタピラをだすとキュラキュラキュラキュラと水から上がる。
「ピコーンピコーンピコーン」
「北西に約5キロ！」
「もうアマゾネスのテリトリーよ！」
「バウン！バウン！キュルキュル！」
「前に進みません！」
後部ハッチに付いたネアンデルタール人が数トンも有る水陸両用車の後部を持ち上げている。
「ウィーン」
「バラララ！バラララララララララ」
「ギャー！グハッ！」
筋肉の鎧も銃弾には敵わない。
バタバタと猿人は倒れていく。
だが何十人とネアンデルタール人は出てくる。
「M！イケる？」
「ハイ～」
後部ハッチを開けてスルスルと特殊なパンツを降ろす。

タンクトップも脱ぎ全裸になりM字開脚をすると膣を拡げ指を出し入れする。
ムワッとメスのフェロモンが水陸両用車後部ハッチから流れ出す。
「ウホッヴォーウオ！」
股間の薪のようなペニスが天を突きペニスの先から精子をドクドクとタレ流しその場に座り込む。
人間なら致死量のフェロモン量だがネアンデルタール人には即死迄は効かない。
でも数十人のネアンデルタール人を動けなくするだけで水陸両用車の銃弾の消費は減る。
ネアンデルタール人が動けなく成った時に後部ハッチは閉められ、後部ドアからナタ状の刀を持ったQが車から降り、座り込む猿人の頭を薪を割るように割って行く。
両手にナタ状の刀を持ちパカン！ガスン！ズパン！と頭、喉を割って行く。
緑の絨毯のような熱帯雨林に猿人の死骸がゴロゴロと転がる。
「Q！乗って！キリが無いわ！」
Qが乗り込むと後部より睡眠ガスを噴射し川辺からジャングルの中に水陸両用車は消えて行った。

排出口封鎖　Mのメルトダウン

「ドン！バンバババッババババッ！」
「ウジャウジャ出て来るなこの猿人！何人いるんだ？」
「M！又、頼める？」
Mは全裸にガウン姿で後部ハッチを開けるとガウンを脱いだ。
「アギャ！ウガ！」
猿人はMのフェロモンでヘナヘナと倒れる。
「タン！」
「アッ！」
「イヤン！」
Mの太ももには矢が刺さり矢にはワイヤーが付いている。
「痛い！」
ワイヤーに引かれ猿人の中に転がり落ちる。
猿人達はヘナヘナと座り込むが中から銀の防護服に身を包んだ女達が飛び出し地面に転がるMを担ぎ上げた。
「Q！救助して！」
簡易マスクで防護服の何人かは防護服を切り裂き倒したが猿人が邪魔でMを追えない。
４人の内、３人は切り殺したが１人がMを肩に担ぎ猿人の中に消えて行った。
「チッ！猿が多過ぎる！」
「Q！早く乗って！連れて行かれるのはアマゾネスのアジトよ！」
「ジェーン！キャタピラからタイヤに変えて！」
「バチン！キュルキュルキュルキュルキュル…」
キャタピラが取れて車体に収まりキャタピラの軸代わりのタイヤが

ジープのタイヤのようにゴツくジャングル使用に変わる。
「カチ！」
「バウン！バリバリバリ！」
バッテリー駆動からガソリン駆動に切り替えるとジャングルの中を一般車道のように走り出した。
連れ去られたMは支流の川に向かってアジトから掘られた川を船に乗せられアジトに連れて行かれていた。
「ホントに何なのこの匂い！捕虜のメスは発情しだすし猿人はヘタリこむし！男の捕虜は死んでるじゃない！」
「ムッ！ココね！クロコ！ココの穴を閉じて！医療用のボンドとホチキスで埋めれるでしょ！消臭変わりに木炭を詰めて！」
「おい！この女、押さえろ！穴を塞ぐ。」
４人がかりで手足、胴体を押えられたMのフェロモンを出すピンクの膣に真っ黒な木炭が詰められる。
「アン！痛い！詰めすぎよ！」
木炭が詰まると医療用ボンドを穴に流し肉のヒダにも塗り付ける。
ピンクのギョウザのような二枚重なった肉ヒダに医療用ホチキスが近づく。
肉のヒダを上からバチン！バチン！とはさみ針で止めた。
「何するのよ！」
「アソコが使い物にならないじゃ無い！」
医療用ホチキスで止められてもMは針の痛さは気になっていない。
「何だ！コイツの体は？ゴム製か？シリコン製か？」
スタンガンを当てても電流を流しても嫌がるだけで痛みは感じていない。
針で刺しても弾力で刺さらない。
肉ヒダのホチキスの針も刺さらずに折り曲がった部分が肉ヒダを止めているだけだ。
「刺さらない。切れないなら燃やすなら出来るわよね」
「も～…イヤだ！ア・タ・シには何も効かないのよ！」

「鉄パイプ持って来て！」
クロコがMの尻の穴を触りながら部下に命令した。
空洞に成った鉄パイプがクロコの手にわたさせる。
「も～ヤダー！」
大きな尻を振り嫌がる。
「このパイプを尻の穴に刺して中をガスバーナーで焼いてやる。皮膚が駄目でも内臓なら焼けるだろ！」
尻の穴を穿り、パイプを刺そうと尻の穴をイジる。
「あ～オナラ…出ちゃう！」
「ブッ！ブブブッ」
「ガハッ！」
「ハガッ息が！」
臭さは感じなく甘いアーモンド臭が周りにする。
いち早く元R、アナコンダが気付く。
「そのガスを吸うな！青酸ガスだ！そこから離れろ！」
Mの能力は軟体の皮膚と体内で生成される各種のガス。
「尻の穴だけは焼いてやる！」
防護マスク姿のアナコンダはゆっくりとガスバーナーの火を調整しながらMに近づく。
「オゲッゲボッゲボッ」
真っ黒なタール状のモノを口からMは吐き出した。
「バフン！」
大きな放屁でケツの穴に刺さっているパイプを吹き飛ばす。
「　ガチャン！」
クロコダイルの被る防護マスクのガラスを割る。
割れた部分から青酸ガスは入ってくる。
「チッ！面倒くさい！」
ガスに触れた眼から徐々に見えなく成っている。
「ガウン！ガシャン！」
「不味いわ！ジェーン！Mの横にスグに車寄せて！」

「何が起きてるのよ！」
「Mが化学反応を体内で起こしてるの！陰部から液体を出さないと彼女、爆発するわ！」
「Mってマダムの孫よね！え？！身体に小型核を埋められているの？」
「可能性は有るわ。組織の重要機密を知っている一人だから…」
「Q！防護マスク！それだけで良いわ！」
「後！簡易手術セット！」
「バルンバルン…バル…」
蹲るMの横に水陸両用車を停め、後部ハッチからTは車外に出た。
人間化学工場のようなMには麻酔薬も危険に成る。
「M！スグに切ってあげるわ！」
ツルンとした股の割れ目から肉のヒダが飛び出し膨らんでいる。
「我慢してね！」
簡易手術セットからハサミを取り出しピンセットで肉ヒダを引っ張り接着部位を切り始めた。
「ヒグッギヒー！」
Mの絶叫が森に響く。
肉ヒダを切り裂き、割れ目を覗くとまだ接着剤は膣口を塞いでいる。
膣口の接着部位にメスを走らす。
「ブシャッ！シャー！」
股間から噴水のような潮、陰液を噴射する。
真っ赤な顔から赤い色が引いて行く。
体液と陰液、青酸ガスに当たったTの着衣は爛れ溶け始めている。
体は硬化しているのでダメージは無い。
マスクに付いているレシーバーからジェーンに指示を出す。
「ジェーン！スクリューの動力を車両前方のプロペラに移してMの廻りのガスを飛ばして！」
「ガシャ！ガシャン！」
車両前方から出て来た送風機から強風がMとTに当たる。

周囲の木々や草が吹き飛ぶ。
「Q！F！後は頼むわ！Qは生き残りのアマゾネス討伐！Fは水中に隠れたアマゾネスを水中から出して！」
Qの白と黒の羽織り袴姿が緑の中で刀を振るう。
あちらこちらから生き残りのアマゾネス達の断末魔が聞こえる。
Fは川に歩いて行き水に手を浸し何やら呪文を唱える。
「チャポン！」
川から手を上げた瞬間、川面が光った。
川にいた電気ウナギ、電気ナマズが一斉に放電した。
「ガポッ！ゲバッ！」
川から飛び出す者、川で気絶する者。
肉食魚類からワニ、蛇迄、浮かんで来た。
「自分動ける者は浮かんでいる仲間を助けて川から上がりなさい！溺死してる者は放置しなさい。」
川が一段落するとQの生き残りの掃討も終わっていた。
水陸両用車内では緊急手術がまだ続いていた。
「ジェーン！Qに言ってヨモギ科の植物を探させて！」
「Q！ヨモギ科の植物！止血に使うの！」
人工皮膚を移植したが市販の薬、組織の薬がMには安易に使えない。
「ジェーン！某国に連絡してヘリを呼んで！」
ジャングル内のアマゾネス達の基地にヘリが飛んできた。
「スグに再移植とアメリカに連絡して組織の医師を呼んで！」
担架に乗せられたMがヘリに乗せられヘリは空高くに舞い上がり北の空に消えた。
「ま！待って！殺さ無いで！レディT！」
川から出て来た数名が手を上げ岸に上がった。
「貴女達は？」
「私達は本部から南米支部に派遣された者です。」
「南米支部で何が有ったの？」
「半年前にスキンヘッドにコウモリの入れ墨を頭に入れた女がサン

グラス姿で現れ…サングラスを外した途端に数人がその場に倒れました。アルファベットの女達が女に対応しましたが眼を瞑った全員が女の口から発せられた呪文で倒されました。」

「呪文?催眠術の類ね。」

「アタシが見た女は二人!スキンヘッドに頭にヘビの入れ墨の女とトカゲの入れ墨!」

「ジェーン!北米支部に連絡!アマゾネスの捕虜と南米支部支部員の運搬!後、水陸両用車の回収。オスプレイを二機、寄越して!」

Tは自動小銃を小脇に抱えてジャングル内のアマゾネス支部を見て廻った。

檻の中の女達はMの毒でこと切れてる。

何個も水槽の有る建物内に入った。

「ポコン!パコン!」

宿主の女は亡くなっているが腹のヘビ達は孵化したヘビから腹を喰い破り出て来る。

黄色と黒の斑のヘビ。

飼育している感じでは無く大量生産している。

「コレは何?」

「いえ…私達は分かりません。アマゾネスの女達なら…」

「一人、連れて来て」

一人、現地の女らしい乳房の垂れた肌の褐色な女が連れて来られた。

「このヘビは何?」

女は全く喋ら無い。

「わからないのかな?」

同じ質問を現地語、スペイン語、英語で質問しても喋らない。

「その女!この水槽にぶち込んで!」

洗脳から醒めた南米支部員、二人に担ぎ上げられた女は髪を振乱し錯乱している。

「アヒャ!」

「ドボン!」

水に獲物が落下した音を聞きヘビ達は一斉に半裸の女に遅いかかる。
「アギャ！」
少し垂れた乳首は横に向く乳房に数匹のヘビが牙を立てた。
「ア、ア～ン…アハッ！」
「へ～毒の替わりに麻薬成分か…」
ヘビ達はガツガツと乳房を食べている。
女は苦痛の表情では無く恍惚な表情を浮かべながら食べられている。
「南米支部員はこのヘビを全て回収！」
「ガガガッ…ズズッズズズズズズ…」
水陸両用車の前方に付けられたシャベルによって集められた女達の遺体は全て川に寄せられバシャバシャと川に落とされた。
生き残りのアマゾネス達は密猟用に使用していた檻に入れられている。
「バラバラバラバラバラ！」
北米支部からのオスプレイが密林内のアマゾネスの飼育支部に降り立つと手際良く捕虜の女、ヘビ、水陸両用車と積み込んでは飛び立った。
最後にT達がヘリに乗り込むと日が傾いた上空にヘリは浮上し北米に向け飛び立った。
「あの女がレディT？小さいのがQ、白い白人がF…」
「一つプラントは潰されたわね。」
「プラントは何度でも作れるわ。人員もバッドが確保してくれる。一人、アルファベットの女を再起不能にしただけでも上出来よ」
真っ裸に迷彩柄のペイントを全身にした頭にヘビとトカゲの入れ墨を入れた女がヘリが飛び立つのを密林から見ていた。

タカコ～保育器の一生～

「キューン！シュポ！」
「キューン！シュポ！」
透明な管の中を極彩色の小さなヘビが吸い込まれ銀のタンクに消えていく。
タカコは今年、二十二歳を迎えたばかりだった。
東北の小さな町から芸能界に憧れ上京したのが高卒後、一時は俳優養成所に通っていたが友人に誘われ初めて行ったホストクラブでカイトに出会って人生が階段を転げ落ちるように変わった。
最初の値段が会計が３０００円。
ホストクラブはもっと高い場所だと思っていた。
その席に付いたのがカイト。
同じような地方都市出身のカイトの話は凄く面白い。
女子中高一貫高、女子短期大学卒業の彼女にしたらカイトのアイドル的な顔立ち。
それに似合わない素朴な話。
タカコを夢中にさせるには十分だった。
カイトの夢は店のナンバーワン。
地方では名家だが仕送りはホストクラブ通い金迄は貰ってない。
最初は仕送りでまかなった。
次第にホストクラブ通いの回数も増え、使う金額も増えた。
親にはレッスン代、スタジオ代と言って送って貰っていたが余りの頻度に実家に戻れと仕送りを減額される。
ツケ飲みの金額は昼の事務仕事では払えない。
だが処女のタカコに風俗は敷居は高い。
最初はホステスをしていたがソレでも足りない。
初めてはカイトとしたいと決めていたタカコは頑として客のアフタ

ーは断る。
客も次第に離れる。
夜の街では若い女性は簡単に金が借りれる。
タカコも例外では無く裏組織の金融屋から金を借りた。
カイトは一度もタカコを抱かない。
金融屋の利子はスグに膨れクラブ勤めでも追い付かない。
「タカコ！金は！催促がコッチにも来るよ！」
裏の金融屋はカイトの紹介で保証人はカイトが成っている。
「どうすんだよ！実家に泣きつく事は無理か！」
「実家の隣街に家が所有するマンションが有る！其処なら追って来ないから！」
タカコはマンションから最低限の荷物を持ち出し夜に新宿の夜行バスターミナルでカイトと待ち合わせた。
最終のバスが実家に行くバス。
バスターミナルには人も疎らに成って来ている。
「ギャギャギャギャギャ！」
真っ黒なミニバンが止まり中から男達が降りて来た。
「た！」
開けた口をスグにタオルで押えられ頭から黒い頭巾を被せられた。
タオルには薬剤が仕込まれているようでスグにタカコは気絶した。
「シュー！シュー！」
タカコは眼を醒ました時には正常位の体位に成ったスチールの可動式の開脚機の付いたベットに固定されていた。
「おはよう…今日から元気の良い赤ちゃん産んでね」
真っ白の身体にピッタリ張り付いたボディスーツの女にそう言われる。
「ピッ！」
「ガタガタ…ガタガタ」
ベットが起き上がる。
全裸に股を拡げた状態では有るが眼の前にはフランス料理・中華料

理と並んでいる。
「はい。最後の普通食、キチンと食べなさいよ！残したら鼻からカテーテルで流動食を胃に流すからね！」
何とかしないと…辺りを見渡しても紙の食器に再生紙製のナイフとフォーク…武器に成るようなモノも無い。
入口には自動小銃を持った女が立っている。
「食べ無いと流動食に変えるぞ」
横のベッドに固定されている女を指差す。
鼻から管が出てベッド脇に有る吊るされたタンクからオレンジ色の液体が身体に入っている。
口は拘束され膨れた乳房のマスカット大の乳首からは白い液体が垂れている。
膨れた腹からは透明な管が何本も出ている。
「彼女はまだ未成年…連れて来られた時から断食だよ。私達は無駄なことはしない。素材は使うさ。」
「拘束されたく無かったらちゃんと食事はしたほうが身のためだよ。」
タカコは辺りのベッドを見渡した。
拘束され流動食にされた少女。
膨れた腹から管は出ているがモニターで動画を見ている少女。
スマホをイジる少女。
監視の女達に従うか抵抗するかで雲泥の差が有る。
「で！貴女はどうなの？」
タカコはナイフとフォークを出された料理に突き刺し食事を初めた。
「あ～駄目だ！この女、ガバガバに成ってる。」
スグに真っ黒なタイツにマスクの女がベッドから女を移す用意をする。
大きな銀の容器を女のベッドの下に置き、膨れた腹を鳩尾から両手で押し腹の卵を出す。
「ヒギー！ギャギャギャ！」

腹を押さえる度に女が悲鳴を上げる。
ピンクの膣が左右に拡がりピンクの膣の奥から黄色い卵が顔を出し股から容器にポタポタと落ちる。
別の女は腹に繋がった透明な管を外し腹に空いた穴は銀のフタで塞ぐ。
管はネジ式で取り外し可能に成っている。
「はっはっはっはっはっ」
腹の卵を全て出し女はベッドに座り肩で息をしている。
「おい！この女、道場！」
…道場？何の為に？…
「　　ガラガラガラガラガラ」
銀のトレーに銀のボウルに満タンに入った水。
ガーゼの上にはT字カミソリと短刀のような片刃のカミソリ。
後、レディスシェイバー、ハサミが乗っている。
「は～い、タエコ？タカコさん？…だったかな？今日は初夜だから下の毛の処理をしますからね。お相手は体毛が嫌いですから…」
下着は履かず腰巻き一枚のタカコの腰巻きが白い全身レオタード姿の女が外す。
先に左右の脇をハサミを使い短くしてレディスシェーバーで剃り上げる。
多少の剃り残しは余り脇に関しては気にしていない。
「は～い膝を立ててM字開脚してお尻を浮かせて…」
言われた通りにすると尻に枕を入れられて恥骨、ドテが浮く体勢にされる。
恥毛にローションを塗られ真っ直ぐにされる。
「ショキ！ショキ！」
長い陰毛を短くカットする。
ある程度長い陰毛をカットするとレディスシェーバーで短く刈っていく。
「ブイ～ン…ジョリジョリジョリジョリ」

ブルッブルッと恥骨下、股間のピンクとベージュに縁取られた肉のビラビラが小刻みに揺れる。
「あ～恥ずかしく無いのよ～誰でも出すから…」
ビラビラの間から透明な愛液が滴る。
「あら～貴女、菊の穴の廻りもビッシリね…ココは…永久脱毛しないと駄目ね。レーザー持って来て！」
「ゴロゴロ…ゴロゴロ…ゴロゴロ…」
何やら小型発電機のような機械が運ばれて来た。
「チョッと貴女も手伝って！」
タカコは尻の穴を天井に向けた状態で女に尻と両足を手で押えられる。
さっきまで剃毛していた女の手にはカミソリのかわりに歯ブラシの先にブラシでは無く金色の丸い板が付いたモノを持っている。
「少しチクッっとするからね…」
「チリチリチリチリ…バチン！バチン！」
繊細な尻の穴と蟻の戸渡り、大陰唇、肉ヒダの付け根、股間の陰毛の生える膣口廻りは全てレーザーで永久脱毛される。
「ヒャギ！ヒギ！ヤベデ！イダイ！」
数分後、機械音とジリジリと言う音が消えるとタカコの菊の穴辺りは真っ赤に腫れ陰毛は全て消えていた。
「はい！軟膏よ！初夜迄には痛みはひくわ」
その夜の夕食は何時も以上に豪勢なディナーが出された。
…アタシの初めての人…。カイトなら良かったけど…売掛金を払わずに逃げたから…カイトは無事かな？…
…新宿組織直轄ホストクラブ…
「よう！カイト！今月は処女、二人を売ったって？ボーナス一千万、プラスだな！」
「何処で処女の田舎娘、探して来るんだ？」
「？ん？今更？上野駅か定番の家出娘がたむろしてるトコにいるよ。ネットカフェも居るなぁ。早く見つけ無いとエンコウ目的のオヤジ

に狩られるぞ！」
カイトのスマホが鳴った。
「おう、ナツミ？家出した？金が無い？取り敢えず俺の店に来いよ！エンコウオヤジに２万で股、開くなよ！エンコウしたら俺は知らねぇから…」
「ホイ、五百万！」
「お前もババァと酒を飲むより処女を売った方が儲かるぞ！」
…富士山麓樹海…
富士山麓の樹海の中の熔岩の作った自然の洞穴を使用して組織が１週間で作ったエクスタシースネーク（麻薬ヘビ）の養殖工場。
世界中から処女が集められる。
非合法的に紛争地から売られる少女。
マフィアから反社組織からそしてあらゆる職業の人間から売られ富士に集まる。
…タカコ処女喪失…
夕食が終わるとタカコは全裸にされベッド事、部屋を移動させられた。
プラネタリウムのような半円形の部屋。
イヤホン一体形のゴーグルを付けられ腕に注射をされた。
ゴーグルでは草原に裸の自分が立っている。
草原には風が吹いている。
実際に微風を当て体感的視覚的にもＶＲの世界に入り込ませる。
草原の奥から男が歩いて来る。
実際には部家にエクスタシースネークのメスが入れられた。
ゴーグルの男はカイト。
タカコが恋い焦がれる男が全裸になり歩いて来る。
男根を怒張させそっとタカコにキスをする。
実際にはエクスタシースネークのメスの双頭に別れた舌がタカコの唇を舐める。

舌がタカコの乳房を舐める。乳首を摘む。
ヘビの舌がタカコの乳房を舐める。
双頭に舌が乳首にまとわり付く。
タカコは自分からカイトの男根を握り怒張を自分の股に当て亀頭を自分の秘所に当てる。
実際はメスヘビの産卵管を自分で握り膣に押し込む。
「あっあっあっ！」
卵を吐かない産卵管の太さは普通のペニス並みの太さ。「あっ奥に当たる」
産卵管の先はタカコの子宮口を探す。
狭い亀裂が有った。
産卵管が細くなり楽に子宮口を通る。
十分に子宮内に入った産卵管の中を卵が通る。
「アッ痛い！」
卵が通る太さでタカコの処女膜は破れる。
催淫剤と麻薬でタカコに激痛は無い。
アマゾネスはゴーグルも無くそのままヘビと女を交尾させていたから激痛とヘビの恐怖で交尾中に死ぬ女が多数、出たそうだが組織は苦痛なく貴重な飼育腹の処女を大切に扱う。
子宮口と膣の締まりが悪くなる迄使い締まりが悪くなるとQ達の試し切りに使われ遺体は子供のヘビの餌に成った。
「アッアー！」
タカコが絶頂に成った時にメスと交代で子宮にオスヘビが潜り込む。
翌朝、タカコは自分の腹を見て驚く。
妊婦のように膨らみ腹には何本も管が繋がっている。
トイレも自分では無理。
尻、尿道にはカテーテルが刺し込まれ鼻からはチューブで流動食が朝、昼、晩と自動的に流れる。
唯一、モニターで動画が流れ週に1回、ＶＲでカイトに逢える。
生きた繁殖器が子宮の弾力性が無くなる迄、続く。

数ヶ月経ったころ…

「あ！この子駄目だわ！道場だわ」

全身レオタード姿の女に言われ胸に乗られ腹を力任せに押される。

小豆大のピンクの乳首はライチのように肥大し赤黒くなったまま垂れた乳房に付いている。

変態趣味の女とアルファベット最後の女

「アギギキッ！アロンバ！アンバ！」
真っ黒な股間に真っ赤なラフレシアのような肉の華が咲いて居る。
華が咲くように肉の花弁がモコっと盛り上がると漆黒の頭が肉の花弁から出て来る。
真っ黒な鼻先を出し徐々に頭が見えてくる。
「アギャ！ギー！」
肉の花弁から血が滴る。
黒い肌を伝い藁に落ちる。
「アガッガ！」
「ブチッ！ブッ！」
ペットボトル大の蛇の頭がラフレシアを潰しながら出て来る。
「カッ」
三角の頭の両方に有る蛇の瞼が開いた。
漆黒の頭に金色の眼が光り
「シャーッ！」
口を開けて真っ赤な二股に成った舌を出す。
「カカカッ…」
黒人少女は泡を吐き出し失神している。
黒い肌に白い泡と白目に剥いた眼が目立つ。
「スネーク！成功したね。」
「バッド、後は催淫毒の実験だよ。このヘビは雑食だし何でも食べる。そしてココは戦場、後サバンナだ。野生動物もいる。少女はゲリラが捕まえて来る。この国の政府は脆弱だから私達が牛耳る事が出来るよ！」
「後は彼奴等だけだな…」
「アルファベットの女たち…名もなき女医だね…」

「1番近い支部は？」
「エジプトに支部が有るよ…」
「どうする？」
「今回はコチラから　手は出さない。まだ全員、揃って無いわよね。」
「スコーピオンが明日には来るよ。
後、スパイダー。」
「アギャグキキキキッ」
「ビチッ…ミチミチッ」
「ほらア・ソ・コと尻の穴が繋がるよ！早く言いな！」
真っ黒な肌の女性が白人女性のピンクの膣に刺し込んだ左右の人差し指を緩めた。
「アタシはタダのボランティア看護師です！帰して下さい！」
「へ～髪の生え際の白粉彫りの十字な何だい？確か名もなき女医もしてたよな！」
「コング！殺すなよ！お前の怪力で一人は首が折れてアウトだから…」
「分かってるよ！股に有る3つの穴を繋げても死なないだろ！」
「ヌチャッ！」
真っ黒な左右2本の指を穴に入れ捏ね回す。
「ァーァンアァアァ…」
コングと言われた女の肩から上腕の筋肉がブワっと肥大した。
「ブズン！」
腱を切ったような鈍い音が女の指とピンクの秘所から聞こえた。
「ギャ！」
「グルン」
白人女性の眼がクルリと裏返る。
「ビチッ…ブシャー！」
股間から大量の血が吹き出す。
膣が左右に伸び穴の上の尿道口と繋がっり下は蟻の戸渡りが無くな

り一つの亀裂に成っている。
「さ～て、喋ら無いからアソコから内臓、引き摺りだそうか…」
「ズボッ」
気絶している女の股間に腕を打ち込む。
「グェ！」
「ほら子袋と紐に卵…」
「次は…」
「ガッガッガッガッ…」
股から内臓を抜かれる女の口から発する声が次第に小さくなる。。
「ズルズルズル」
ピンクのソウセージ状のモノ…白いモツ状のモノが引き摺り出される。
「ホントに言わないな…こいつ等…」
「あ～駄目駄目、言えば頭のカプセルから毒が出る仕組みだから…」
「何だよ！バッド！先に言えよ！」
「でもコングも楽しめたでしょ？」
「ま…あな。」
どっと笑いが起こる。
「アルファベットの女ならカプセルは入って無いわよ」
「どう呼ぶ？」
「そうね…富士の裾野に有る施設に里帰りする？」
「ただいま～破棄組ですってか？」
「良いね！裾野の施設にはマダムのバァさんと研究員、アルファベットの女も2、3人！」
「じゃあ里帰りするか！」
スキンヘッドに頭に黒い入れ墨の女達は壁にあるウィッグを頭に乗せ各々がドレス、革のツナギ等の服に着替えだした。
「おい！空軍基地迄！」
若い兵士2人が女達を軍用車に乗せ空港迄、送った。
「ギーーン！」

自家用ジェットのエンジン音が鳴り響く。
「解ってる?横田の米軍基地!」
「サー!」
南米の某国は既に女達の手懐けたゲリラの配下に有った。
アメリカとは軍事協定を結んでいる。
「シュイーン!」
真っ黒い滑走路に赤い誘導灯とジェット機の蒼い焔。
申し訳程度のサーチライトが照らす滑走路を銀の軍用機は飛び立った。
…富士山麓樹海秘密基地入口…
「今日の来訪者は?」
「夕方に産廃業者だけだね。」
樹海を横断する国道から反れたトラック1台分の道幅しか無い道を樹海を切り裂くように延びている。
其の先に場違いなコンクリート性のゲートとガードマンの制服に腰にはガンホルダーと特殊警棒。
もうひとりは自動小銃を持っている。
女子プロレスラーのような体躯に潰れた耳、拳の拳ダコ、明らかに何らかの格闘技経験者。
其の彼女達に自動小銃。
明らかに異様なゲート。
ゲートを抜けても施設に入る入口には自動小銃の女とアルファベットの女が居る待機所。
軍隊でも入るのは困難な施設。
「寒く成ってきたな!12!そろそろ防寒着にするか?」
「そうだね。8、待機所以外は此の樹海は寒いよ。」
ゲートには定期的に来る産業廃棄物処理業者と数ヶ月に1回、黒塗りの高級車が来る。
後は自殺目的の人間。
2人は人助けと迷い込んだ自殺者を狩る。

女ならいたぶり組織に渡す。
女なら組織から金銭が支給される。
ゲート横待機所にはテレビ、映画等も充実しているがマンハントを経験すると刺激が全然、違う。人を狩る。
怯える表情は格闘技大会で絞め技で絞め落とす感覚とは比べものに成らない。
「は～い！お姉さん達！名もなき女医の施設、知らない？」
「え！」
すぐ後に大きな帽子にサングラス、黒いロングコートの女とショートボブヘアにサングラスの背の小さな女が2人、立っている。
「チクッ」
「アィて！」
「アンタ達！何もんだ！ココは許可無く通れ無いんだよ！」
「あ～さっき許可ならあの女に押したよ！」
「な！…何だオマエの身体！」
「ガハダガブクランデ…」
「バッン！ビチッ」
制服の生地を破り身体が膨張する。
腰のガンベルトと上半身の防弾、防刃ベストが膨らむ身体を止める。
「グルジイ！」
「バチバチバチン」
防弾チョッキのチャックが壊れ巨大な胸がシャツを破り飛び出す。
「ハギュ！」
防弾チョッキが無くなり肥大が顔に移り始める。
「何だよ！オマエ達！」
「ねぇアンタ、切れた手首を見せんじゃ無いよ」
ガードマンの女が持っていた自動小銃ごと手首が地面に落ちている。
「鮮やかだねぇ…スパイダー！」
「貴女こそスコーピオン！」
「オオオッ！…」

「バシュン！」
肥大した女が破裂した。
「ジリリリリ！」
手首を切られた女が非常ベルを鳴らす。
「せっかちだわ」
スパイダーの手首がクイッと動いた途端にゴトン！
女の頭が床に転がった。
「スコーピオン！カメレオンは先に行ったの？」
「あの子、せっかちだから…」
…秘密施設第二ゲート…
「珍しいわね！非常ベルよ！」
本当に珍しい、マキコが此の組織に就職して二年、非常ベルが鳴ったのは1回。
その時は誤作動。
「マキコ！指令室に連絡！」
「ハイ！先輩！」
マキコは空手の強化ナンバー迄成った。
普通なら何処の大学や高校のコーチだが強化合宿中にセクハラで迫ってきた男子コーチを病院送りにした。
「ガサガサガサガサ…」
木立ちが揺れ女が2人現れた。
「ヒッ！」
「ピッ」
「ブスブス…」
自動小銃の銃身が溶ける。
「クロコ！久し振りだろ。此の施設も！」
「カメレオン！本当、森の中の女達、何だい！質がおちたね。アルファベットの女、巡回してたのかい？」
「ひゅ～ベチャ！ベチャ！」
真っ白な隆起の先にピンクの突起が付いた肉片を道路に四つ放り投

げた。
「まさか…あの手応えの無いのがアルファベットか？小文字を護衛に配備か！」
…森の中にはアルファベットの大文字が二人、確かにいる。…
重要施設警備なので中堅の殺し屋が…
「おまたせ～」
木々がボヤケて人の輪郭が出来上がる。
迷彩柄のボディスーツにマスク。
目だけギョロギョロと動いている。
「また収集かい？カメレオン！」
「当たり前だよ！その為にきてんだから！ほら！奇麗なピンクの！」
「瓶に入った赤貝のような肉片を見せる。」
「二人だけかい？」
「ベージュや褐色には興味が無いんでね。黒は以てのほかさ！」
「あの倒れた女！見ても良いか？」
「好きにしな！」
首の無い先輩の元に近付きガチャガチャとベルトを外すとズルズルとパンツを下ろしシゲシゲとアソコをカメレオンは見る。
「良い色だね！」
カメレオンはボディスーツから金属のコルク抜きのような形の器具を出した。
「よいしょ！」
片腕で体躯の良い女性の両足を片腕で上げマングリ返しの型にして大陰唇に器具を当てた。
コルク抜きの突起部を手で押されるとキノコ型の先が膣に潜る。
「ズルッ」
キノコ型の突起が膣に潜るとコルク抜きの外側に付いている鉄製の輪っかが大陰唇をスッポリと囲む。
輪っかにはリングに刃が付いておりコルク抜き型の器具を大陰唇に当てると丸く大陰唇を覆った輪がズブズブズブと股間の肉にめり込

む。
最後にキノコ型の突起に連動している栓を押すと膣に有るキノコ型の突起が開く。
開いたキノコには刃が付いており膣壁をスッと切り裂きながら入り込む。
栓に付いてるハンドルを何回か廻し引っ張ると真っ赤な肉片が股間から離れる。
その肉片をジャム容器のような瓶に入れたら作業は終わる。
「さ～て次はアンタかな？」
カメレオンと呼ばれた女マキコをギョロりと見た。
「カサっ」
カメレオンの異名の女の体に真っ黒な布がフワリと覆いかぶさる。
「ギッ！」
真っ黒い布に真っ黒な装束の女が隠れておりカメレオンの女の頭頂部から頭を抜けて顎下まで長い針が突き抜けている。
「ガン！ガンガン！」
クロコがハンドガンで布を撃ち抜いても弾は全てカメレオンにめり込む。
薄暗い木陰に針を刺した女は溶け込んでいる。
「廃棄物が勝手に再生したら駄目だろ！変態趣味の仲間迄、連れて！誰の許可で施設に入った！」
「でてこい！あのアルファベット付のように殺してやる！」
「ば～か！アルファベットじゃねぇよ！
練習生の小文字だよ！」
「誰だ！」
「やれやれ…アレがマダムの娘？Mの親？呆れた出来損ないだね。」
「レディZ…アルファベット最後の女だよ！」
スピーカーからマダムの声が流れる。

アルファベットZの反撃と特殊部隊ダッシュの招集

「パシュン！」
カメレオンの耳、口、鼻から煙が上がる。
「ねぇ！Y！この女！施設に連れて行って！死んで無いわ。脳細胞に微弱電流を流し気絶をさせただけ！」
「アタシにも、仕事をさせろよ！」
「木陰がバサッと落ち中からコングと同じ体躯をした女が出て来る。」
「貴女は何時でも遊べるから！頼むね！」
「お前は！Z！」
「こいつ等をxと止めるから！」
…クロコは驚愕した。アルファベットの女でもX、Y、Zは謎とされてきた。存在自体、都市伝説級の女達…
「X！聞いた！何時でも狩りな！」
「アタシはゴリラ女を退治するからさ！」
「このチビッ来な！」
Xが手の平に載せた粉をコングに吹き掛けた。
夕暮れ時の粉は存在自体を隠す。
「コング！何か吹き掛けたよ！」
「ビリビリッ」
「フン！」
「バサッ！」
コングが自分の上着を引きちぎり風を起こす。
「プッ」
「アギャ！」
コングが右眼を押さえる。
「やっぱり穴迄は鍛えるの無理か…」

Xはコングの体に何箇所かに針を吹き刺した。
皮膚は弾く。
乳房、尻も針を弾く。
顔も無理。
皮膚全体を硬化させている。
鍛えれない眼…
刺さった。
後は鍼灸針専門医のXには身体の硬化は無意味に成った。
「眼は硬化は無理…じゃあアソコに刺して動きを止めるか…」
両眼に針、全身に微細なニードルシャワーを受けコングの動きが鈍くなる。
「ザザッ！ドスン！」
Xの蟹挟みによって脚を固定されたコングは地面に倒れた。
「コング！耳を塞げ！」
バッドが口を開くと施設の窓ガラスにビシビシと亀裂が走る。
だがXは威に関せず長い針をコングの股間、蟻のとあたりと呼ばれる場所に突き刺しズブズブズブっと一尺はある針を股間に押し込めた。
「よし、ココ…」
針の尻をコンと叩くとコングの身体から力が抜け肌の硬化も解けてきた！
「おい！コイツを運べ！」
バッドの超音波もXには聞かない。
もう既にフロッグ、カメレオン、コングと3人が敵に捕まっている。
「おい！いったんは退却するぞ！」
「あらら…逃げちゃった！お仲間、置いて…」
「薄情だね君の仲間！？聞こえて無いか！」
Xはケタケタと笑う。
「本部？捕虜の運搬員を第二ゲートに…3人？かな？捕まえた」
スグに本部から捕虜送迎用の車両が着く。

「後は君たちで出来るでしょ？任せたよ。そのゴリラは当分は起きないヨ！アタシは道場にいるから！マダムに宜しく！」
コング、フロッグ、カメレオンが護送車に乗せられ本部に入って行く。

（マダムの拷問）
「フガッフガッフガッ」
「アンタ、アフリカ系と思ったけどアジア系かい！眼の廻りはドーランで迷彩柄にしてたんだね。まぁ！スベスベした白い肌！なぶりがいが有るわ。」
「ほら！貴女の友達はゴリラと愉しみ中だから・・・・」
モニターにはコングがゴリラと掴み合いの格闘をしていた。
既に右乳房は握り潰され力なく身体に張り付いている。
「貴女は少しずつ削るから…」
マダムの手にはグレーのハリガタが握られている。
「ホレ！」
ハリガタに木の根のようなモノを擦り付ける。
「カシュカシュカシュ」
木の根のようなモノが削れ緑色のネバつく物体が落ちる。
指ですくい上げカメレオンの女の口に入れる。
「辛い！」
「コレは特製のシャークスキン製のハリガタだよ。」
「ズブッ…」
「ヒッ！」
「ほら同じモノを入れてあげたよ。気持ち良くしてあげるよ」
カメレオンの股間の肉の破れ目からグレーのサメ皮付のハリガタが飛び出ている。
ハリガタは下に有る機械と繋がりユックリと上下に動き出した。
「まだまだ、痛くわないよ。特殊ローションでコーティングしてるから…コーティングが無くなったらアンタのアソコは削られて熱帯魚の餌に成るからね。其れまでにアンタの組織に関する情報を言え

ば止めてあげるよ。」
「余興のゴリラと人間のメスの交尾でも見てな！アンタの仲間、ゴリラとケンカ中だよ」
モニターにはコングとゴリラ、そして数匹の猿が裸のコングにまとわり付くと肌に牙を立てていた。
「アイツは壊れるな。体力が無くなればゴリラの巨根でボロボロにされ殺されるか拷問が待っているよ。ゴリラの拷問だから凄まじいだろね。なんせ脳は性犯罪で死刑を求刑された囚人の脳を移植しているからね…」
「このカエルはもう駄目だしね…」
新たなモニターにはフロッグの名を持った女の顔が映し出された。
ケラケラと笑っている。
顔から段々と全体が映るようにカメラが引いていく。
白い顔の下に小ぶりな乳房が見える。
そのすぐ下、鳩尾から腹がパンパンに膨らみ股間の赤貝のような肉ヒダからは透明なパイプが伸びている。
その透明なパイプの中を赤い細長いモノが動き廻っている。
「カエルと蛇の共存は初めてだろ？あの小さな蛇は組織で改良した小型の麻薬を生成する蛇だよ。特殊な液体と寝床と産卵に女の子宮が必要なのさ。あの女で実験して次は敵対組織からの奴隷を保育器に使う。」
「元々は肉食だった蛇を人工餌に変えたが肉食に戻ればアノ女は体を喰われるからね。喰われ無くても保育器第一号だよ。」
「アズッ！」
「ほらアンタのハリガタのコーティングが取れて来たよ。喧しくなるから口枷はするけど、ボタンを渡すから組織の情報を話すなら押しな！」
「ガイン！ブルブルブルブル！」
「ガシュン！ガシュン！ガシュン！」
機械が動き出しサメ皮張りのハリガタが女の膣壁を削る。

一往復しただけで膣壁は削られてフトモモには真っ赤な血が滴る。
カメレオンタトゥーの女は平気な顔をしている。
「ガシュン！ガシュン！ガシュン！」
膣壁を削られて股間の穴は段々と拡がる。
穴がビール瓶の太さになった頃合いに股間を焼かれる激痛が女の頭に迄、響く。
「ァギャー！アガアガアガァー」
ハリガタには蛇から抽出された麻薬が出る仕掛けに成っていた。
最初から穴が拡がり切った状態で麻薬は止まる仕掛けに成っていた。
「喋る！しゃべるー」
マダムが女に近付く。
「アンタの組織のスポンサーと構成員、組織の知っている事を言いな！」
「い！いだい！」
「おい！麻薬注入！」
「はぁ～」
「組織の本部は？」
「アマゾン川源流のブラジルとの国境付近…」
「組織のスポンサーは？」
「南米の麻薬カルテル〇〇〇」
「後、南米〇〇共和国軍部」
「入れ墨の女は？」「後…クロコ…ピューマ…スネーク…スパイダー…ァ…アント」
「各自の能力は？」
「知らない。仲間でも教えない…」
「あのカエルの能力は？」
「破裂…」
「フロッグを映していたモニターに閃光が走る」
「ドン！」
「ズズズズズン！」

建物自体が揺れた。
「ゴリラ女にシェルター！」
そう言いながらマダムは持っていた杖から仕込んだ刀を抜きカエル女の首を瞬時に切り落とした。
「あ！」
最後にフロッグの見たのはマダムの右脚の義足だった。
「バゴッ」
ゴリラ女が炸裂する。
瞬時に落としゴリラ女と数匹の猿、改良したゴリラがシェルターの中でバラバラになっていた。
「被害は？」
「はい！カエル女の部屋内の研究者が一人、爆破で死亡。後は室外の作業員が二名、負傷！」
「後、このカメレオンの女の解剖を頼むわ。起爆装置は脳の中にあるから…爆薬は脊髄液に混ぜてるわね。」
カメレオンの言っていた事は全て嘘だろう…苦痛に耐える訓練、洗脳を解く訓練も受けている。
「ウチの特…ダッシュ付のアルファベット達を徴集して！」
（高級住宅街レディＴクリニック）
「ありがとうございました」
「マヤちゃん！後、今日の予約の患者さんは？」
「夕方にデトックス注射の患者さんが一組です。」
「そうマヤちゃん今日は昼上がりでいいわ。もうスグ国家試験よね！」
「わ～良いんですか？」
「構わないわ。正式なナースになったらこき使うから！」
チラッと壁にかけてあるビーナスの生誕の絵を見る。
天使のにこやかな顔に少しの変化が有る。
口を開けた天使に小さな牙が生えている。
本部に緊急徴集の合図。

「明日はジェーンが診察するから…補佐を頼むわね」
マヤがクリニックから出ると女医は白衣を脱ぎ捨て真っ黒なライダースーツに着替、裏の車庫に有る改造したハーレーにまたがりクリニックの敷地から出た。
スグにアメリカ在日米軍基地に着きそのままハーレーをＦ３５の格納庫に入れた。
「ギューン！キーン」
格納庫から真っ黒な機体がゆっくりと出て来る。
尾翼に赤の逆の十字架。
「管制塔！コチラ、スクランブル発進！アテナ！」
「アテナ確認！Ｂ滑走路より離陸！」
闇夜に滑走路を照らすライトと赤い誘導灯。
その滑走路に黒い機体。
アフターバナーが赤から蒼い炎に変わる。
「テイクオフ！」
滑走路を走り抜け闇夜に舞い上がる。
両翼の赤色灯と青いアフターバナーだけが闇夜に映える。
東京から数分で富士樹海にある日本支部の研究施設には着いた。
滑走路は無いがヘリポートは有る。
Ｆ３５の後部が変形していく。
青白い炎が水平かは下に下がる。
垂直離着陸機である同機はヘリポート、草原、平地なら何処でも離着陸できる。
「トン！ドン！」
機体がヘリポートに着いた。
真っ黒な　パイロットスーツのＴが機体から降りる。
送迎のミニワゴン
は機体脇に着いている。
後部ドアを開けワゴンに乗り込む。
中にはソファが置かれ小さな冷蔵庫も有る。

冷蔵庫を開けミネラルウォーターを取り出しTは飲みだした。
「フゥ～」
一息付くとパイロットスーツを脱ぎ下着を全て脱ぎ裸に成った。
顔に黒いマスクをかぶり黒いマントで鍛え上げた裸身を隠す。
黒いマスクは額に数字が書いているだけで本来のアルファベットは書いていない。
幹部会議、通称サバトでは同じ仲間でもダッシュ付きとは分からなくしている。
通された部屋には十数名の黒いマスク、マントの女達がいる。
「アテンション」
部屋の壁面のカーテンが左右に開く。
中には司祭服にマスクの人物が立っている。
事前に耳に付けたイヤホンから声が流れる。
「敵のスポンサーが分かった」
司祭の片隅にガラスに入った生首が有る。
生首の下には色々な機材が付きモニターに繋がる。
モニターに映像が写し出される。
生首の女が見た事がモニターに写し出される。
胸にバッジを付けたスーツ姿の人物と軍服の男が写し出される。
紅いバッジと軍服には横に3本の線が入る国旗。
ユーラシア大陸の2大軍事大国の国旗。
「この闘いは我ら組織だけで行う。入れ墨の女の壊滅とこのバッジの男、軍服の男の暗殺。」
「今回の件は国家絡みでは無いが西のクライアントの多い我らが邪魔なんでしょうね。」
「マスクから出る声はボイスチェンジャーで変えている。」
「司祭！人選は？」
「そうね…奇数は紅！偶数は北のクマ！」
「各自、ミーティング後に即座に行動！この研究施設は明日破壊。以後は北海道の施設にて！」

「解散！」
Tの数字は9、
「奇数組！B会議室へ集合！」
「カチッ」
生首の入った容器のスイッチを司祭が切る。
「ガポッコポッ！」
生首の顔が窒息しそうに青くなる。
「ガポ！」
眼を大きく開き顔を真っ赤にして生首は息絶えた。
自決しても脳機能さえ有れば生前の見たモノを再生する。
組織にはそのような自白の道具は山程、有る。
B会議室に集まったメンバーが各自3人に別れ行動と成った。
「じゃあアジアの9．5は先見隊として先に赤の大国に侵入。後続は人員を揃え侵入ね！」
「わかったわ！」
「は～い～」
各自が帰路につき反撃の支度につく。

女医達の反撃

「アガっオゴオゴッオゴッゴフゥ！」
「痛っ！」
「歯を立てるなと言ったろ！」
体毛の密集した肥った大男が股間に顔を埋めていた女の頭に有る輪っかを引っ張り上げた。
「ベホッゲホッ」
口からは白い男の精液を吐き、鼻からも鼻水のように精液が垂れる。
「残りの歯も抜いてやる！」
女はイヤイヤと首を横に振ったが後ろにいたスキンヘッドに入れ墨の入った女が女の頭をガシッと掴んだ。
ベットの傍らに有るテーブルにはハリガタやペンチ、針等が置いてある。
ペンチを握り締めると男は女の顔に近づけた。
「う～う～」
歯を噛み締めて抵抗する女。
「ガコッガコン」
顔を持っていた女が口を締めていた女の顎下を数カ所、指で押さえただけでガコンと口が空いた。
「アゴ～アガ～」
歯と言っても女の口腔内に奥歯と前歯が上下3本しか残っていない。
下がりきった口腔内にペンチを入れ下の前歯を摘むと捻った。
「ゴゴッアガガガッ」
ボロボロと女の眼から涙が落ちる。
「アガっ」
「アギッ」
「ガコッ！」

「ハヒャイ！」
「カラン！ガシャン」
銀のトレーに白い小さな歯とペンチが無造作に置かれる。
「あ！ごっ！」
再び男の怒張したイチモツを女は口に含まされる。
「で！我が方の損失が６人で支部が１つだけ壊滅か？割にあわんな！」
「ヒマラヤに有るとされる本部は？」
「バカモン！もう攻撃したわ！２個師団が消えたわ！」
「兎に角、世界各国に有る支部の殲滅と入れ墨の女の量産よ！特殊技能は薬でも何でも使い増やせ！」
「は！」
男の傍らにいた女が針を空に投げた。
「パチッ」
空中に火花が飛ぶ
「何だ其れは！」
「恐らく超小型ドローンかと…」
「何！此処がばれているのか！」
「恐らくは…」
「絶対にワシを護れよ！」
「閣下も此の宮殿から無闇に出歩かないで下さい。相手は要人暗殺のプロ集団ですから……お電話も衛星回線で！」
「大柄な男の身体がブルッと震えた」
「ズルン！」
股間に顔を埋めていた女の口からズルンと萎えた肉塊が出て来る。
「オゲッ！ガホッ！」
傍らのナイフを男は取り女の頭に少し残っている手綱のような髪の束を切る。
「この女も兵士にしろ！」
スキンヘッドに頭頂部にだけ黒い髪を付けた女は別の女に脇を抱え

られ部屋を出ていった。
「ドン！ズズズズン！」
館が揺れた。
「何だ！」
「先程の女が爆発しました。」
「おい！あの女は何処でさらった！」
南の○○省です。
「敵がよく使う人間爆弾ですね…閣下も問題が終わるまでは女は控えて下さい。恐らく此の宮殿にも敵は潜伏してます。さらった女は宮殿に入る前に身体検査はしますから…」
「この宮殿内で爆弾に改造したのでしょうね」
「そんな事が出来る連中か！」
「アルファベット付は全員が医師です。自分の身体をカスタムした連中もいますよ」
宮殿内には蟲使いのレディPが先に侵入し手駒と人間爆弾を大量に作っていた。
「ビービービー！ミサイル発射五秒前！」
「今度は何だ！」
「バシュン！バシュ！」
「おい！誰の命令だ！何処に撃った！」
「閣下からの命令で北の大国に通常弾頭のミサイルを2発、発射しました！」
「ワシはそんな命令は出していない！早く自爆させろ！」
「無理です！自爆しません！」
「目標は！」
「座標○○の○○です！」
その座標には手を組んだ北の大国の副将軍の別荘が有る座標だった。
ミサイルが座標に着弾する。
ドン！通常弾頭なので別荘が吹き飛ぶ。
2発目が着弾する。

ピカ！ズズズッズドン！
周囲1キロが吹き飛ぶ。
2発目には小型戦術核が弾頭に使われていた。

最終章　蟲飼う女

「ズン！ズズッン！」
「ねぇ逃げ無くて大丈夫？」
「この冷蔵倉庫内は大丈夫。この宮殿の頑丈さなら心配ないわ。」
「それより…」
女の長い舌が半裸に成った女の股間に顔を埋め股に有る赤貝のような小陰唇をベロンと舐めた。
「アンッ…あふぅ」
「アタシのも舐めてよ！」
女が自分の履いている白い厨房用の作業服のズボンをずらした。
赤黒いイチモツがビンッと天井に向いて怒張している。
「貴女…本当に女なの？」
「前にも言ったよ…コレはクリトリス、普通は母親の胎内にいる時に身体に吸収され小さな豆だけ体外に出るけどアタシはアソコも付いているの…人類学的にも女性。だから妊娠をさせることはコレでは無理…」
「話はコレくらい…入れるよ…」
赤黒い肉根が赤貝を裂きながらメリメリと身体に入って行く。
「アン！そ～そんなとこに…当たるの…」
「アタシのイミモツなら当たるよ…ココがボルチオ…子宮口を突くんだよ」
「アアォー！ア！あアアォ！」
突かれる女は今までに味わった事の無い快楽を味わっていた。
「これも初めての体験だよ！」
膣内のイチモツの尖端から黒いストロー状のモノが赤い子宮口から子宮内に入って行く。

「あ～はぁ～」
黒いストロー状のモノには産毛が生えている。
極微な毛は快感として女をざわつかせる。
「さぁ…君の身体に産むよ」
タピオカ状のモノが子宮内に流れ込む。
「アッあ～何か！何か入って来る…」
「お腹！膨れて来た！」
タピオカ状のモノが子宮内を膨らませる。
「アゥオー！」
女は絶頂に達し目を白くし泡を吹きながら気絶した。
ズルんと女の股から出たイチモツはモゾモゾと動き、動きに合わせてイチモツが変化して行く。
赤黒いイチモツが真っ黒に変色し脚が出て来る。
時間と共にイチモツは真っ黒い虫に変形しモゾモゾと動き女の胸に潜り込んだ。
「おい！お前も消化活動を手伝え！」
…後、1時間後には屋敷は無くなり、人は骨に成るわよ…
「シャーシャーシャーバシャバシャバシャ」
何とか宮殿の全焼は逃れた。
ミサイル発射室の全員を銃殺し宮殿は納まりかけていた。
首席に直に北の大国の大統領にも謝罪と誤射の連絡は入れた。
「やっとおさまったか？」
「ミサイル発射室の全員は！」
「バシュ！バシュ！バシュ！」
「誰が撃ってる！」
「し…死体が発射ボタンを押してます！」
「と！止めろ！」
「閣下！北の大国から報復攻撃で我が方のミサイル発射基地を攻撃されてます。」
「閣下！最終通告でスグにミサイル攻撃を辞めないと首都に潜水艦

発射型核ミサイルの攻撃を始めると！」
「メインコンピュータを切れ！ミサイル発射を止めろ！」
「バシュッ！」
一瞬、宮殿内の全ての灯りが消えた。
「や～やっと止まったか…」
「閣下！国家主席よりスグに来いと呼び出しです！」
「おい！ゲッ…」
妊婦のような女性兵士の腹が蠢き軍服の裾から黒い虫が湧き出している。
「ギャー！ウォ！来るな！」
女性兵士、厨房のコック、メイド…
何人も妊娠したような腹をしている。
「ゴバッ！ウゲッ！」
「ボトッ！ボトッボトッボト…ザザザッ」
大量の虫が女の身体から流れ出る。
「イヤー！」
虫が部屋の中の女達に襲いかかる。
「イギャ！噛んだ！イタッ！アボッ！ゴボッ！」
女の口から虫達は体内に入り込む。
脚からよじ登る虫は股間の秘肉をくぐり抜け、菊の穴をこじ開け体内に入る。
虫の鋭い口に有る牙は分厚い皮のパンツだろうが軍服だろうが噛み千切る。
女医達の組織で開発された特殊な虫。
軍隊アリと何でも食べるゴキブリを掛け合わせた食人ゴキブリ。
ゴキブリ並に平たくどんな隙間でも入り込み軍隊アリ並の強烈な牙で人を襲う。
蟲使いのレディPが数人の女の子宮に産んだ卵から孵化した虫達。
孵化してスグに子宮を肉を喰い人の味を覚える。
Pの怒張していたペニス状のモノはクリトリスが肥大したモノでは

無く改良したゴキブリを変化自在のクリトリス包皮で包んでいた物。
Pは虫を操れるだけでなく虫を運ぶ為に皮膚を弄っている。
特に秘所の皮膚は改良した虫の運搬だけでなく小型のプラスティック爆弾も隠せる。
X線で調べてもペニスの型にしか写らず全裸に成っても見た目はペニスにしか見えない。
流石のPも孵化したばかりの虫は扱い辛く孵化前に宮殿から退避していた。
黒い絨毯のような虫は動く動物を次々に襲い副首席に襲い掛かる。
副首席はシェルターに隠れたが空気ダクトから侵入するゴキブリには完全密封の部屋しか対応出来ない。
改良ゴキブリは口から合金なら溶かす酸を吐き出す。
数万匹のゴキブリ達は動く動物を食べ尽くすと自然に死に絶える。
長く生きても1週間。
生殖機能が無い為、数万匹に成ったゴキブリも全て死に絶え1日で灰に成る。
北に潜り込んだ一行は軍事システムに入り込み北の大国の友好国、軍事同盟国に向けてミサイルを発射するように座標を書き換えた。
基地攻撃には巡航ミサイルと局地核ミサイルを使用した。
ミサイル攻撃を止めようと海底では同盟国同士が魚雷戦をしている。
日本にも首都近くに数発、ミサイルは落ちたようだ。
仕上げに世界の警察を自認する大国が北の大国と紅い大国に国連軍として入った。
北にヨーロッパ連合が入り資本主義国家が独裁国家を民主化に導いた。
女医達が起こした大国間の争いは鎮まった。
スキンヘッドの女達はゴキブリに喰われたのか逃げたのか…女医の組織が探している。
「先生！あたし先に行きますね」
「ジェーン！元気で！立派な医師に成るのよ」

「先生は？」
「アタシは夜に南の秘密基地に行くわ」
首都近郊の復旧もまだ終わらない。
生活と復興で美容整形の客も来院は少ない。
ジェーンはヨーロッパ支部に移り、医大に通い医師を目指す。
本部の意向とジェーンの意向が一致したから止もしなかった。
今迄の闘いでアルファベットの女医も少なく成った。
「じゃあ！行きます！」
ジェーンはヨーロッパに行くため空軍基地に向かった。
「ウィ～ンガシャン！」
「T！私も南方の秘密基地に連れて行って！」
タクシーを降りたQが立っている。
「貴女も暇そうね。そうね…南方なら人体には困らないわね」
漆黒の外車に荷物を載せ二人は南方にたった。
…南方秘密基地内…
「ヒグッ…は…はれちゅす…る…」
スイカ程の大きさの胸の女がしかめっ面で女医を見ている。
「破裂するじゃ無く、させるのよ」
「パチュン！」
真っ赤な肉と白い液体が飛び散った。
「東洋人でOカップがギリギリね…」
「ねぇ！次の娘、入れて！」
変わらず基地内には女の悲鳴が響いていた。
完

最終章　蟲飼う女（後書き）

レディＴは今作で終了です。次作は現実味の有る話を考えていますので宜しくお願いします。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n9949hj/

レディＴ～ある女医とナースの副業～

2025年2月1日17時25分発行